（又略）節奏ある言語を將て高尚なる題目に適するものとなせは世の常に云ふ所なるが思ふに散文体の言語は之を人世に喩ふるに猶其平時の操業に於るが如く而して人心の優悠閑適なるを表せるに適せるものとす然して詩の散文に於るは猶踊舞乃行歩に於る如し然れども散文の始て文字組織乃一方法となり之を機巧に運用せる以來無數の著書世に播布し而して其題目大に詩に適して其幹旋形容の妙殆ど最勝の節奏文章に均しきものあるに至れり（又略）但し近世散文の著書と雖も其体は最も尚高の詩想に根せるものにして只其詩と異なる所は嚴密なる節奏を棄て和諧せる言語に一任し以て自由に流出變化せしむるもの是のみ云云

又歴史歌（委ビツク保エム）の條下にいはく

時の新古を論ぜば國の東西を問はず凡そ記事の本色は必ず其詩史の精神骨髓たるなり即ち心志を鼓舞激勵せる事業の說話或は辛くして虎口を脫し水火の變故に遭遇し注眸手に汗する如きの狀或は讀者として痛惋腸を斷たしむるの境或は初めに艱難辛苦を經歷して終りに康樂を享くるに至る男女離合の情話等は能く人の心意を奪ひ其本境を脫して夢境に入るの想あらしむ真に此術を變幻百出の

は古今の詩文上に歴見して曾て廢せざる所のものなり即ち外間の物象人事の發跡形勢等にして妙に心神を發揮する者是なり詳に之を云へば外間に森羅せる所の品物及び天然不測の力と殆ど其競爭を逞うはる人間の真狀人生忍ぶ可からざるの悲哀。克勝。愛情。卓絶。高聳。不朽の垂業を期せる至切の志念天然と生存との至大。至變。至錯並に至神。理外の範圍に属して宇宙を管理すと認識せらるゝ上帝神明。天界茫々の形容。地理幽々の景況。歳月時季の順環。人間社會。其君將英傑の存狀。事業。變轉。幽運消長の機を決せる戰鬪爭競。人間の開明進歩を任とせる有力者の勤勞。人事に發せる至大反常の現狀等是に属す更に之を概言すれば凡そ人の感覺も徹底して跌宕。威赫。祟高老實。嬌艷。悲哀。快活。發揮着色と稱すべき万般の者皆包まざるなし若し夫れ世間俚俗の要件は其生存の道は欠くべからざるを以て人々之に注念すること常なりと雖も其人心を感興籠絡せること遙かに外間に属せる事物の如くなる能はざるを以て自ら詩の真題に列することを得ざるなり且學術上の興件。講學に属する事物。對數比例の表。歳額の等計。分子の分量等は世界に於て最も重要の事實なりと雖も亦詩の題目に加ることを得ざるなり

で小説家が教導化目的とをる所ゐ通學勧善懲惡を旨とするをまるが實ゴ此目的並ゴ其他の主旨も亦此術の進歩ゴ因て愈々高上ゴ達するを得べ丸をり然れども此種の文字ゐ人間無涯の嗜好ゴ供すべき者なれば其事の理ゴ合ふと合ゐざるとを問わず一ゴ時風の沿革ゴ隨て之を相終始をべきのと

小説の變遷

小説ゐ假作物語の一種ゴして所謂奇異譚の變体なり奇異譚とゐ何ぞや英國ゴて羅マンスと名づくるものあり羅マンスゐ趣向を荒唐無稽の事物ゴとりて奇怪百出もて編となし尋常世界ゴ見れざれたる事物の道理ゴ矛盾するを敢て顧みざるもろゴろある小説をゐち郷ベルゴ至りてゐ之と異あり世の人情と風俗をば寫すを以て主腦とをし平常世間みあるべきやうある事柄をもて材料とし而して趣向を設くるものありこれ只概略の辨あるから尚解しがたき由もあらめと其辨細なる本義のことをゐしばらく之を下回ゴ譲りてまづ變遷の次第を説くべし

それ偖ら惟みるゴ小説野乘の行わるゝゐ其源遠く遡爲さる上古の時代みありといふべし其然る所以を知らまく欲せば試み社會の淵源ゴ遡りて其狀態と察せざる可らを

妙ゴ到ゴむる長器具と云ふべ丸あり而ゴで此種ゴ屬する詩文の各狀并みゴトマトより然ヤシルゴ至る間ゴ發顯せし文体の沿革及び中古の小説（羅マンス）より近時の人情話（郷ベル）ゴ移れる實況等ゴ皆精密の詳解を要をべきも多なれども此等ゐ別ゴ文学史ゴ於て論究をべ丸の大業ゴして茲ゴ詳説をるゴ違あら數煩して此種の著書の方今近体格ゴして尚ゴ所の書ゐ專ら其本色と人物とゴ於る活潑なる狀ゴして益々人生の實事ゴ適合せしをゐてせ上萬物の消長並ゴ人間日常の情偽をゴして讀者の心胸ゴ了然としてまた事實ゴ相違せる考思おからしむるゴあり因ゴ此等の著書ゴ表せる男女の動作事業ゴ與ゴ其風采を寫し出すをゐで讀む者をゴで親く人世の情態ゴ接するの感を發せしむべし而ゴて若し此風采をゴて讀者が曽て閲歴せし同事實と相符合せしむるときゐ讀者ゐ爲ゴ壓然快たるを覺えて自ら鑒むるの心を發すべく又人間至樂の事ゴ於ゴで益ゴ真理ゴ違ざるゐのをゴしめを何等の種類の文字と問わを常ゴ無上完全の地を占むるべ丸於ゴ列ホワ氏ゐ世界實際の形狀を表するゴ善く史詩体の文章を適用しるる人ゴして又コツパ、ガルワ（雲霓をいふ）等ゐ諸先輩ゐ亦歴史の教授方ゴ此体を供用せ給ふ

第一の原因なり又人間はうまれながらに奇異を好むに切なるものなり斯かれば別に其要なくとも假作の談話をつくりまうけて史傳を誤ることあるべし是第二條乃原因なりしかして國歩やうやく進ミて稍文明の世界となりなば其國君といはるゝやからは下賤の匹夫のなりあがりを我太祖なりといはるゝをば快からぬことに思ひて附會の說をつくりまうけて太祖の事蹟を粧はむとを況んやこれらの時代に於ては敬信の念深かるから故意に物語と假作せずとも自然に祖先を神といひなし天孫なりしと思へるをや是なん諸國に信じがたき神代史などいふものあり第三條の原因なりしし斯かれば上古は魔イソロジイ即ち鬼神史といへるものは所謂羅マンス(奇異譚)乃濫觴にて其傳おほくは假作にいて若くは訛傳になりたることもとより疑なきに似たりさはあれ所謂神代史(鬼神史)はもとおれ真實の物語にして決して遊戯の作にあらねば後の所謂奇異譚とは其質をと〳〵同じうしく其用はまたいたく異なれ蓋し謬信訛傳の久しき後世の人其傳記の妄誕なるをば怪まざるなれこゝをもて後の世の人此種の書を尊み信じて曾て小說視するものなきまゝ恬然正史の巻はじめにいとうや〳〵しく之をかゝげく國家の權輿を穿鑿する好材料となすことなりけり或は神代史(魔イ

上古の社會の狀態はいかにといふに東西人おなじからず南北地異なるにも係らず一個の家長を尊崇して之を酋族の長となすこと人間社會の道則なりかゝれば戰鬪いと烈しく優勝劣敗急激なる未開野蠻の上世にありては猛然荒蕪の間に起りて俄に一家の主長となり忽ち一族の首となるもの或はすくなしとなさざるなり斯ある性質の家長にして已に酋族の首となりなば其子孫等にものがたるに何等の事柄を以をする乎想ふにをのれが經驗なしたる艱難辛苦の事情はさらに其武功などを語りつゞしたりして此等の物語は其人にたしく經驗なし若くは親く見聞せる真實の事蹟に相違なけれど子孫が之を傳聞してまた其子孫に語るに及びくあるひは記臆の誤謬より或は附會に原因して竟に事實の髓を亡ひ咄々奇怪の物語と長く口碑に傳へ存じて鬼神史(魔イソロジイ)神代記の基とひらく是上世の通則にしてまた怪むに足らずと雖も事はこゝに到れるには別に原因のなきを得むや今こゝろみに之を思ふに其原因となりたるものをよそ三條ありしと思はる譬ば酋族次第にさかえて勢強大になるにいたれば人の心をのづから傲りて些々たる事とも巨大にいひなし他の酋族に誇るものなりあゝれば祖先の履歷の如きは故意に附會の談話加へていと大業にいひなすべし是

から唱師は力めて功妙なる文句を綴るに怠らざるべし然しく一唱人情をむよく表出する文句の如きは總じて活潑婉麗なるからひたすら情を寫さむとて事實を枉るも多あるべしかくしてしきりに虚飾を加へて漸く時好に媚ぶる程は唱歌の傳ふる史傳の事蹟はやゝ本色を失ひつゝ其本来の傳記に比すれば大異小同なるに至らむ是しかしながら神代史鬼神誌が全然正史の体を脱しく排悶の料となりさる時にて即ち小説の濫觴なりなり

希臘國の詩仙哈マアが著したる以リヤツド物語のごときも其源は土ロイ神聖史にいでたきども其編述せる事蹟に於ては頗る異同の多しと聞く

かくすること幾星霜文化の度次第に進みて書よゝ書かく道ひらゝて已に其國に正史といふもの全く備はりたる後にありても尚傳唱の法を存して奇譚を唱歌に綴りなして吟誦なすあと行はれぬさはあれもはや此比には唱歌を以て必要なる史傳を傳ふる法とは思はず玩弄物のやうに思ひて只奇なるをのみ求むるからに唱歌師もまた此意を推してしば〳〵おのれが意匠をもて奇しき物語を編成なしまことしやうにいひたやして虚名を賣らむと力むることあり此時よりして正真なる羅マンス(奇異譚)世に

ソロジイ)を解釋しく太古の羅マンス(奇異譚)といふもはあまともこはまた甚しき誤謬なるへし夫れ神代史は荒唐なれども其質小説とはおなじからず其記載せる物語はもとより全く事實にあらねどまた虚構ともいひがたかり假作の話譚と訛傳の事蹟と相混淆して事實と粧ひもて史体をばなしさるものにて其質なうむは正史に屬しなうむは小説に類するものなり此を以て考がふれは正史の本源は神代史なり羅マンス(奇異譚)の濫觴も神代史にあり史と小説とは其源おなじ只累世の變遷にて今日の差を生ぜしのみ

しかるにしかして文運のいまだ開けざりし比にありては世々の史傳を傳ふるには必ず唱歌を用ひたりき蓋し文字の用をしらざりける上古蒙昧の世に於ては史傳を詩歌に綴りなして子孫に傳唱せしむるとは最も簡易利便にして誤謬はくなき法ぞと思へりさる程に唱歌師等が史傳を唱歌にものするに臨ミてまづ第一に記臆をると暗誦をると便ならむことを望むが故に自然に用ふる言語のごときに成るべく平滑流暢にして吟誦なさむに便なるをむ力めてしらみ用ひしなるべし且又行

[illegible]且はものする物語の真に似ざると似るとを問ねば唯々怪事を綴
りかたれ悟然おやしむ体なきのみかなる〳〵に之を得意とせり讀むものも亦た之
をめでゝ老もうたがふさまもなけれど文化いま一としゆ進むに及びて世の人やうや
く羅マンスの荒唐無稽に倦むよしあり羅マンスをたゞつて衰へいたゆる真成の物語
(那ベル)おこる其沿革の次第のごときは更に下條にときわくべし
およそ奇異譚の世に行はるゝや寓言の書もまさ世に行はる所謂寓言の書とは何ぞ無
稽の小説に諷意を寓して童幼婦女子の蒙を啓き奬誡なすものをなれち是なり英國に
ていふ浮ヘイブルはをなれち件んの寓言なり以ソツプ物語のごときは其一例とも見
るべきものなり其他莊子の寓言のごときもまた此ものに外ならざるなり按ずるに寓
言の書の世に現はるゝは當時の君子有徳の士が世の道徳の委靡して振はず人情澆
薄に流るゝをはいと歎かはしきことに思ひてこを濟はまくわりをるものから人をな
遊佚懶惰にして書をひもときて讀むものまれなり況て人倫道義をときたる彼のうた
くるしき書籍のごときは机に近づくるものだになけれどもと〳〵教誡の方法に因ゞ
つ竟に世上に愛玩せらるゝ彼の奇異譚の脚色にならひて架空の小説を結構なし暗に

現はきたれどもなほ此時代の羅マンスは總じて韻語のみを用ひて詩歌の体にものせ
しあら今のいはゆる羅マンスと其名おなじふして体裁異なり
さる程に羅マンスの種類もいつしかいろ〳〵になりてあるひは滑稽を主とをるもの
ありあるひは真事らしうもてなすもあるべし然して輿情殺伐にかたぶく時には武勇
をかたれる羅マンス出で時好柔弱に流るゝ國には宗旨に關をる物語にあらずは情事
に關をる物語あらはる此をもて那マン人種の羅マンスには勇士の偉業をのべたるも
の多く索遊時代の古詩篇には宗旨に關をるもの多かり我皇國の羅マンスは前の二ツ
に相反して往吉といひ伊勢といひまたあの式部の源語のごときも專ら男女の情事を
のべたり蓋し優遊文弱なる當時の輿情に應ぜしなるべし之は要する此ころには人
みな奇異を好める故にかりにも時好に投合せる奇異なる物語をものする時には世の
人よろこびもてあそびて敢て忘誕無稽をとがめず且實際の事柄とは大に矛盾するこ
とありとも却りて之を奇なりとたゝへて怪み訝る事なけれは作者もます〳〵奇を求
えて工風を費し文を練りてひたすら新奇の脚色はむ結構なさまく企つべしさはあれ
[illegible]

を聞ーて已ゐ道義をーも弁知したればまさ寓言の書またおよそ之を學ぶ蒙おくたゞ其文の巧なると其結構の妙をるをは賞玩をもー過さればをうゝれば劣等の作ーいたりてゐ偏母童蒙のお伽はおしとをり若くゐ婦女子ばらーもてあそばれつづゐ玩弄の一種となるのゞ其目的たる諷刺のごときゐ全く通ぜざる事とをるべし何とをれば童蒙等にたゝ脚色のみ眼をとゞめて其含蓄せる寓意の所在を窺知ることおければをりをり譬ば我國の寓言なる猿蟹合戦の物語舌切雀の話おとを見よ多少の寓意のあるべきなれども之を小兒ゐみたり聞かまる祖母母親だ一十に八九ゐ寓意の所在をしりしいまゐにてたゞ一通のつくりむなしと同一様のものゝと思へり是とを進化の自然ーして所謂浮ヘイブル次第ゐをとろへ亞ルレゴリイ（寓意小説）おこる源因をり㕝し

亞ルレゴリイといいかゐるものゞ曰く戯作物語の一種ーして二様の脚色を含をるもれをり所謂二様の脚色とゐ皮相を見へさる物語と隠微れ寓意を是いふをり今一例をあおていゐゝ彼の有名なる西遊記のごときゐすなゐち此類の的例をるべし其皮相をる脚色ゐつきゝ彼の物語を評するときゐゐ奇異荒唐架空無稽たゝよのつねまる羅マ

奨誡の意を寓しゞ世ゐ誡せんと圖おおをゝしきされば奇異譚と浮ヘイブル（寓言の書）とゐ其外形ゐ同うして其内質ゐ同もうらを商者ゐ娯樂を目的とし後者ゐ誡誡を真相とも浮ヘイブルの物語ゐ浮屠氏のいたもる方便ーて其眼目ゐあらざるから其脚色ゐ單純よも只皮相のゞ関をるときゐいと淡くーて味おゝーされども借ら玩讀して其隠微をすも味ふときゐゐ所謂寸鐵人を殺す深妙の旨趣を見る事あり猿蟹合戦の物語またゐ桃太郎の昔話舌切雀のちゝ山皆済ヘイベルの部類ーして其皮相をる物語ゐさゝめて甲斐なきものゝお似たれど其真相を見るー及びて頗る深意ありと思そおゐ

さる程ゞ文運ゞ〳〵進歩しゞて開明の世ゐをるゐ及べば浮べイブルもまた變遷しゞ多少の進化をきあたゐをゐ盡しゞ文運の進むーまさがひ世の流行るむかしゐ似をとゐくゐ奢侈ゐ頽きつゝ万の事をお贅澤をり狂ゐ人智のをゝめるまゝあまりゐ甲斐なく浅をゐをる彼の寓言れ書なんどをめて喜びてゐ讀まさるべし中ゐ傑作雀子のごときゐ長ゝ具眼の士ゐ導まれゞ太人社會ゐ行をるまどもかへゝゞ其書の目的をりせる誡誡の旨ゐ地蹄よりまたゝ効をきものゐと

之を見れば一ねきためく單簡なり一ね願る複雜ふて相類似る由をけまど其含蓄せる本意ば探れば此故ぞと〳〵同一おて別種のものとね思ひがさかり因くひそうに考ふるみ己に前ふものべたるごとく人智ふむ〳〵進むにまたがひ時の好もむかしに似も器具粧服にいへば更なりまたのるき神祇物語だおひさそう簡樸の質をきらひて奇異複雜をるものおごのめば奇異譚にまま浮へイブルにまれあまり多單樸淺近よく興味うもろるものをんどねいつ〳〵お興論みありぞけられ世に行ぢまぬ事ともをるべしかおきば奇異譚の作者たらねつとめて新奇の趣向を累ト其脚色を複雜ふし其物語を長くものしてまも〳〵時好み適をるやう意匠をかまふることなるべしきる程ふ浮へイブルねいよ〳〵興情にかをむぞ〳〵ふまふ婦幼の玩具とおり其本來の主旨をきへふ忘きらるゝに至るべければ寓言の書に次第ふ衰へ竟ふ跡をもたつふとなるべきねあ是小說に諷意を寓して世を諫むるの力あるね人々もまたおらざるおうねば全く件の方便とば棄るふ忍びぬ由あるうら世の狂才ある操觚者流ね暗ま奇異譚に諷意を寓して世を誡めまく企つべー是勸懲ば主眼とする小說稗史の濫觴ありなりおかしく文才ある宗教家もー〳〵道德家の博識なんども役の奇異譚の時好に投じてめで

ンス（奇異譚）と相異なることをきま似たれど細かま驚讀おそにいたれた願る隱微の寓意もしられて彼の幽玄なる佛道をも窺ひ見るべき便機とある一種の深妙不可思議なる脚色の別ま存をるをば正可ま穿鑿おすを得べし其他士遷敘筆の傑作なりける孚へヤリイク。ポン（仙壤傳）まさね姿ニヤンの比ルグリムス。プログレツス（天堂遊原記）等の如れもすべて文外ま寓意を存じてあるね敎訓しあるね諷刺を殊ま孚へヤリイク。ポン（仙壤傳）の如きね都合三樣の趣向ありて一ね尋常の奇意譚まて其文章の上にあらはる一ね聖敎の極意まして其文外まあまて存をしかして當時の社會を諷刺し且奬誡をる寓意のごときも其文外ま出没して歷々之を指點をへし實ふ仙壤の傳の如きね亞ルレゴリイ中の傑作まして空前絶後のものといはんも決して誣言まあらざるなり此他ま寓意小說ねあまたあれども今証例の便をはかりて只其粹ぜぬきさるを乃ミ其詳細なる脚色の顚末をらびふ寓意の具合ならとね前乃三書を精讀してミづから之を穿鑿なしかして覺悟おもべたまり

畢竟をるま寓意小說（亞ルレゴリイ）ね役の單純ある浮へイブル（寓言）の書の次第ま進化變遷し〳〵發達おしたるものならむ敢亞ルレゴリイと浮へイブルとね其皮相より

懲といふ主義を賛れる辻商人の風にならひてこれまた軒下に店をいだして人情といふ品物をば其本店にてひさぎをがらったゝら勧懲をもあきないつゝいつゝの店賃の本務をおこたりひさすら勧懲をむ賛らまくほりをして竟に店を閉すにいたりし嗚呼あさびとゐひとしといはむ

演劇もまた之にひとしくむかしをいまにおほむね神代記の事蹟を演そるものありしが人智のしざいにそゝめるまゝ彼の寓意の書ゐあらひて奨誡の意を傳奇ゐ寫して世を誡むるの方便とせり此間ゐ行はるゝ馬鹿ばやしとういふものなんども畢竟古事記日事記に載さる太古の事蹟の演劇にていまざ誡意を寓せざりし上古の遺風と思はれたり英詞にていふ魅レクル夫レイル尊者聖人の霊験俾跡をたゝありのまゝ丹演ぜしものゐて其大体より評語を下さむ我馬鹿囃子の類なりけんしかしく其后行はれし蒙ラル夫レイ（奨誡演劇）ハ之に異なり其質まつたく亞ルレゴリイを演ぜしものといふとも可ならむ演劇沿革の事ゐつきていおのづから論あれども今要をきまゝこゝはゝえぶきつ

之を要するゐ演劇と奇異譚とハ其發生のもとめまありてハ其質ほと〳〵相おなじく

もてえやきるゝのみにハあらで且よく感乎風動もる至大の効力あるをば見つせの人心を奨誡して善靡たる徳義を正さんゐハまづ其好める處によりて投說いだもゐあらざりせば奏功きとめて難うらむと窃に覺悟する由ありすなわち浮ベイブルを延長して其脚色をも複雑ゐし奨善誡惡の意を寓して彼の奇異譚と相おらべて世ゐ發行もるあとゝハなりなんきまゝ所謂亞ルレゴリイ（寓意小説）と勧懲主義の小説とハ其源淵ハ相おなじく浮ベイブルよりいでたまども其性質ハ天にたがへり其故にいのゐとをれば寓意小説ハ勧懲をもく主眼となし物語をもて方便とせりまうるゐ勧懲小説にハ物語をもて本尊とし勧懲をもま粧飾とせり故ま寓意の小説にハいはうなる不條理の脚色ありとゝ何等の荒唐なる話ありとも寓意の塩梅妙ありせば之をそしるに及むされども若し勧懲の小説ましで其本尊さる物語丹咄々奇怪の脚色ありなば勧懲の主旨ハ通もるとも之を巧妙の小説とハ次しく稱へがたかるべし我東洋の勧懲作者ハ此變遷の次第とをらねばひさもち勧善懲惡をば小説稗史の主眼とこゝろえ彼の本尊たる人情をば疎漏丹寫もハそらしめらをや是をかしながら亞ルレゴリイと勧懲主眼の小説とのさ差別をあらぬに出たることにて物にさとへて之を識らば我軒下を借うけつゝ勧

ま記すまゐ其奨誡ま益なきことといふまでゑおきことおりのし文化文政の比より
て我國俗のもてゃせる小說稗史ゐ擬してそを此種の勸懲小說ま て真の小說まゐあ
らざるおうさればこそ具眼の士ゐ我小說を邪技とそしり有害無益とも罵るおれゐれ
あま小說家の迷惑おらをや

さあらば真の小說稗史(那ベル)ゐいかなる時世ま現ゐるゝぞ其奇異譚と異なる所以
ゐうもまた何等の邊ゐあるや曰く那ベル即ち真成の小說の世ゐ行ゐるゝゐ概ね演劇
衰微の時まあり其故ゐそもいかまといふゐ懇しく文化の淺るりける未開蒙昧の世ゐ
ありてゐ人皆皮相の新奇をよろこび眼のつけどころ密ならねば何とてもあれ異常ゐ
して稍々注目ろ促かすべき新奇の性質あるものありおば競ふてこれをもてもやして
面白きものと思ふゐ常なり且また此北の人の情ゐ今の人情とゐおなじからて怪りて
も喜びてもまた哀とても樂とても懇ゐま願る激切おるうら七情おのづら其擧動と
其顏色とゐ見れつゝ限なく人ゐも見られしなり是併ながら道理力の作用さゐめて
微なりしからま一時一旦の情欲をば抑へ止むることかおゐて心ま思ふことをさへま
あらゐゐ外面とうちいだしつまたゐ擧動にも見えたるなりされば此時代の人々にゐ

たゃ新奇ある話談をのミ言とし演ぜし事おりーゲ世の人情のすゝむましさがひしだ
いま奇怪の條を除き荒唐無稽の脚色を省きく事を凡近まとりて意を勸懲ゐ發もるま
いたる斯かれば演劇の主腦の如きも亦これ人情風俗ゐて他の勸懲の主意の如れゐ其
目的にゐあらざること瞭然とーて明かおりかし

さる程ま羅マンス(奇異譚)も其荒唐ある趣向を減じて漸く世態の真相をば寫ーいだ
さまく力むるおとゐ所謂進化の自然まして抗すべあらざるいきをもなれども世の人
情の固うして嗜好充分に高尚をらざる文運半開の比まありまゐ小說作者も見識之し
く自ら守るの勇あなればひたもら流行時好を追ひて其物語をえのもることゆゑ尚小
說の神髓をば修め得るまゐ願る速うり之を要もるま作者の本意ゐ人情世態を寫さむ
とする母もあちもせを誠誠せむとも教まえあらずさゃ當代の時好に媚びせの流行ま
衆合して一時の虛名を射むとするのミ此をもて此時代の奇異譚作者が物したてし奇
異譚中なる人情世態ゐ其物語の主旨まあらで時好ま媚ぶるの方便おり且また寓意の
勸懲の如きも俗ゐいいやる遁辭まて無益の書をうといいまもとて識者の譏を蹇ぐ

譚の疎漏にして妄誕無稽奇異荒唐趣淺く情至らず且活動の妙乏しくさながら死灰と一般にてたゞいたづらに脚色のみくだ〳〵しきに比するときは其差雲壤月鼈のみうは是國所の差別もなく演劇さかえて奇異譚衰ふるの所以なり

さはあれ彼も一時なり此も一時なり時好の變遷と文運の發達はいまだこゝにしもとゞまらねば人智いま一層進むに至きば世れ人次第に華美を好みて万の事をなむかしに似ず主として外觀をうざるものから其人情はかえらずとも其外面にあらはれたる世の人々のさちふるまひはすぎにし時代のものに比すれば大に異なる由あるべしうくて月日を經るうちには彼の異やうなる風俗習慣いつしか世上に迹をたちく成たゝざるやう成行くのミか人も智力の進めるまゝ我情欲を抑制してあうらさまには其面にあらはさゞるやう力をつべし譬は大に怒りし折にもすぎと面を和らげつゝ從容として語らふべくまたはなはだしく悲しき時にも涙をながさぬことあるべし人情うくのごとく變じ來りて彼の激切なる態度容姿の漸く減少なるにいさきは梨園子弟が劇場にて演する所の人情世態は漸く時勢に適はずしく真を寫すに堪へざるべし夫れ演劇の性質たる真に遷るべきものにあらで寧真に越えつべきものなり語を換へく之

所謂奇癖もまこぶる多くて笑ふべき癖あり罵るべき癖あり憫むべき癖もあきは惡むべき癖もありけむ或は破廉陋猥なること善六丈八其人のごときもあるべく或は痴愚のたなはだしき有業其人（小栗實記の道戯形有原屋業平をいふ）に似たるもあるべし故に此時代の人情世態は全く皮相に見えさるから寫しいだまに難うらねば彼の羅マンスの類にまら其一通は描きいだして世の一粲に供せしかどなれ文才に富まざりける當時の作者の筆頭には活たるやうには描かがたき人情世態も多なるべし斯かる時に當りては精細に風俗を寫しいだし詳明に人情は見えしむるもの彼の演劇に優るは稀なり蓋し演劇の性質たる彼の奇異譚に比するときはたゞに其脚色の簡略にしてあへりて情趣の密なるのミあは別に景色の補助ありて俳優の動止と言語に伴ひ其趣を寫す程に擬似の人情世態はして活動せしむる勢あり況てや妙手の俳優にして傳奇の大家の手すなりさる巧妙非凡の傑作をば巧に演劇するに於ては一擧一動一笑一顰宛然其物の真に逼りて看るものをしてしらず〳〵其劇さるを忘失なしあるひは笑ひあるひは泣きれと〳〵狂人のごとくならしむ（我國の梨園に市川小團次の妙手ありて鶴屋南北の傑作ありもて都人士を動かせしは人のよくしる所なりうし）彼の奇異

はさゞありけまゝに演出せばたれかあまたの貨をすて劇劇と觀むと望むべけやいくらか真物に超越りておもしろおもしく思へばこそ人も觀うきも演すなきされば情態ふたつながら激切なりなる人の目には其情態をありけまゝに演戯ゆらむ得さるをもて演劇にてすは万の事みなおもしろくも見えたるならえどなふこのごろ人の目には劇場にて見る万の事みな不條理と思はるれば次第に真に反するとは罵るやあらもいでたつべしさはせて真物を見るがごとく只ありろまゝ事演すは時には自然演劇の演劇さる所以とそこなひいと怪しげなるもの事なるのみならぬは實に真物のごとく演せんとするは難かるべし故に文華の時代となりても據なく演劇にはなほ往昔の情態をば十に八九は殘しとゞめて所謂世話物の演劇をば時代形にて演ぜは事なり譬は一個乃乙女子あり一好男子に邂逅して之を見初る折なんどに手に携へさる扇子などを恍惚として取落しく他の面をのみうちはもはは其情たゞめて激切なる未聞の人の情態にて今は世は情態とはいふべからぬされども我國の狂言作者もしくは艸冊子は作者なんどもいはなほ是等を得意としてしば〳〵戀慕の意を表はる好標章ともなほならぬや是しかしながら演劇もて文明時代の情態をば寫しいだははかたう

をいへば真物そきみづからを摸擬するをば其主腦とはなきにあらで真物并にある物をば擬きるを主眼となきものなり（理ヤリチイ不ラス叙ムシング）譬ば一條の情事を演し一場の鬪戰を摸擬きるにも真物に似ざるはもとより拙しといへども真物に異ならざるもまさ興なしおよそ文明の世にありては人々おほむね外觀とのざりて其体裁を粧ふからよしいかほど事戀ひこがれし我意中人に接きればとて雛鳥の久我に於るごとく阿七の吉三に於るごとくいと厚かましう打いだして情を述るを得ざるべければ其趣を見たきばとてさまで興あるものとも思はず又鬪戰も之にひとしくいと味なきものなるべし戰國の世に近ありなる武斷政治の比にありては民間にきめるものと雖もいくらの武藝を習得なしあるひは柔術をも修めしから不圖喧嘩などなき折にも方事かなひし手を盡して敵手と挑ミ戰ひなめ故に實際の鬪戰も見ておもしろき程なるから之に擬したる鬪戰はいよ〳〵興の深かりなめさきども今の時代にては相戰ふにも挑ミあふにもひさきら拳とふるへるのみもとより方などあるべきならねば之を見るとも興なければ真物のごとくに演せんことさきめて益なきのみにあらで頗る至難の技なるべしさかるをしひて寫眞を旨として鬪戰事も情態

すべうらさるものあり演をるとも興おきものあり故ㇾ院本の作者おどれこゝらのものを度外視して皆て採り用ひ〳〵ことおけるど細微ㇾ穿鑿をくだほときはおほらの性質を見えしむればなら〳〵ㇾ讀者ㇾ興あるものなり彼き淺々し允激切の性情ゐミを寫〳〵いだをゝ見る人々も已ㇾ屢ぬかゝる細微の性情をもこまかㇾ描きいだをㇾあらやば世の人いのでの嬉むべき是演劇ㇾ附屬したる不利の第二といふべきあり

演劇ゝ早くいへば擬似より擬似ゝ事物の特異性（ベキユリヤリチイ）を摸擬するに巧なりといへども普通の性質ゐ摸擬をるゐゝ巧ならを譬ば痒多允俳優の声ゝまねるㇾ易く普通なるゝまねがたきゲごと〳〵往昔ゝ人の心も淺むかるまゝㇾ七情のこりなく外面ㇾ伝らむれ且異やすをる所も多かりしがゆゑ母之を演をるㇾ便をりしゲ世の文運の進むㇾつれて事ごと物ごとㇾ異やうある性質ゝ減じゆきつ呼謂「思入れ」のみㇾまゝゐつくしがさきものいと澤あり是もまた演劇の漸く其位を稗史小說ㇾゆづる所以とやいとまし

おもそ小說の範圍ゝ演劇の範圍よりも廣く時世々々ㇾの態情をむ細大とをく寫しいだしてほと〳〵遺憾を感せざらしむ譬ば演劇みてゝ人れ性情を寫しいだすㇾもつむらるべ允ひとつの証據といふべ允なり

とうくする程ㇾ演劇ゝやうやく當代の鏡どをこりてせㇾめでらるべ允儀ゐうしまひとおをトのうす眞物ㇾひとしく演をるをはひさをら奇妙どゝめ玖ゝ

ㇾり市川團十れ扮粧ゐ淡泊おるをゝ「まぶい」とたゝへ壘辭れ常乃言葉ㇾ似まいふべ允ことをも敢ていえす思入れまゝあらえをゝゞ賞ㇾ「すごい」や吾ぶなり想ふゑ數年れ後にいさらば團十なんどゝゝ藝齣ゐあひだ樂屋を與母畫寮をㇾて某といふ一主公の病氣引籠を演をみおるべしあるひゝ素顏素頭ょて演劇をおをゲ可ありやいふ輿論どあらむもおるべのらゝ油こせㇾ奇なりと識ㇾしゲ實母おをゲ所論ㇾ加をへり呵々々々

演劇ゐ不利そひをり上にれおる所ゐも乃ゐみゑあらを別ㇾ人間ゐ性質ゐうちみを演

観者の耳に訴へまた其眼に訴ふるがゆゑに其場かへりて狭々きども小説にてゐを反してたゞちに讀者の心に訴へそは想像を促がすゆゑ其場廣しといふべし演劇にては山水艸木遠近の景色家屋調度の位置あるひは露をもそを示しあるひは道具立もてそをあらはすも其他雷電風雨のたぐひも總じて器械のたゝけまりて観者の視聴の官にうつたふ小説にてはこれらの事をも悉皆美妙の文にものして讀者の心の眼に訴ふさるから小説にては讀者ゐ想像の精疎によりて得る所の興おのづから異ありあるは文外の佳境に入りあるは文面のみの佳境ゐいる

因云英の小説大家殿タル數コツト箱の小説などは殊ゐ細密ある記文多うりある強賊の巣窟なりける洞堀のさまを記しまあたりて箱にことさらに家狹いでゝいふしへ賊の住ゐしといふある洞堀ゐおもむきつゝ仔細に其四下を観察なし且そのあさりよ咲出さる種々さまゞ〳〵なる艸花をも殘る所なく観察して之を情意錄にかゝとゞめつさて歸りてのち其さまをば見るがごとくに寫しいざ〳〵て物語の地とおせしことありかゝる細微の景色を寫を

て表し得がたき事あり而し

是まさ演劇の小説稗史ゐ劣る所以の不便ゐ一てをなゐち第三の不利なりさり尚此外ゐも演劇ゐは一箇の重大なる不便利あり脚色の不便をなゐち是なり演劇にては万の事ゐをもつばら眼ゐ訴ふるを其本性ともなをことゝも云前れ齣ゐて見えたる事實と後の齣ゐて演をる事實といくらか脈絡相通ひま因縁あさらかあらさるべからを殊ゐ悲壯体(トラゼヂイ)の演劇にては其結局の悲話(洛ハイナル寺タストロツヘ)の如きは是非とも前の齣ありける因縁よりして来りしものとつくりあはをむ必要となをことあり結局の悲話といかあるものゝといふみまづ悲壯体の演劇とは充分會得あさゝるときゐは其性質をしりがたうるべし悲壯体の傳奇小説もとより我國ゐも多くあれども其實ありて其名あされば是非なく二三の例をあげてこゝゐ解釋を下しつべし譬むちかごろ新富座にて團十郎等が演したりし真田の張扱筒とかいへるものゐすなゐち悲壯体の演劇なり其他山門五三の桐もしくは幡隨長兵衛の劇の如きは皆此類の物といふべし之を要するゐ其演劇の本尊をなゐち主人公(ヒイロウ)が其結局の齣ゐいたりてもかあき最後を遂るといふいと淺まゝく悲しげある趣向を旨となすものなり

んやをや況ぢや堂おばづらふみあるこをや読らむや

きくかくの如き進化を経て小説おのづから世あらはれまるおのづから重んぜら

是ゑらしながら優勝劣敗自然陶汰のまゝらしむる所まおやを抗じがるき勢をいふべ

し廃コウレイ氏ゥヰ美術を論じて世の開明に進むこまるがひ美術の次第に衰ふる

れ天の数なをいはまゐりきげお道理を是談論をまどもこれ上世より成立る雑美術

の上ふ乃ふいふべきもあらをや又廃コウレイも詩ば論ずま其衰頽をる所以をしも叮寧

説の上まいいふべきもあらをや又廃コウレイも詩ば論ずま其衰頽をる所以をしも叮寧

反覆ト て論ぜられ〜が（其論も廃コウレイの彌ルトン傳まあり）是をの〳〵毋小説神

史の今より次第ま衆えつべき確たる理由となることなり其故にいのまといふ毋已毋

前まも陳さるでをく詩も奇異譚の本元ましく詩と奇異譚とは同質るりのくまは奇異

譚の衰ぶるも詩の漸々衰ぶるも其源因の所在ときぐらば十の八九も同様をみ原因

なること疑るしもし我所謂小説（拜ベル）毋しをよく奇異譚毋さちのむりて世毋愛ら

るゝの質ありなば亦たよく詩歌またちかむりて美術の瑾上毋列しつべき器量あるべ

きむをなりかゝ

其最後まもしを〳〵あり或ね自刃ま終るもあり或ね殺されて死もるもあり刑場の露

とたゆる強盗もあれば憐死してをゐる男女もあるべ〜此主人公の最後の段とばもる

ねち結局乃悲話といいふまあり此結局の悲話まるものも〜前段ま關係おき不慮偶然の

事をらむ歟見るものさながら手ま持たる物をとられ〜心地をして其興情の何とや

らむ漠然たるをば覺えつべし小説ふてゐ之ま反しくかゝる偶然の事變をもて主公の

最後を示もときね其事の不可思儀あるゲ爲毋かへりて佳境を覺ゆることあり蓋し人

生の浮沈榮枯ね因あて成るも多けまどもまた偶然の事ま成れるも頗る小少あらさ

れむあり（おの事ふつきてね尚論ををさことあまたあれども脚色論の部まゆをりて

こゝまね筆をとぶくも於るり）されば こ毋某氏がかつて演劇の脚色を論じて演劇ね

局を結果ま結ぶべ〜偶然の事（亞クシデント）をして其團圓とねをべらもといね

れ々きまことま當然の吉といふべ〜

小説の演劇ま優ること已まおくの如しといへども唯人心を感ぜ〜むる力ふいたりて

ね劇演の力ま及ぶべうもあらず蓋し想像と目撃とね其感觸の度元来おおじからさを

ばありこの故をもて小説を貶さんとするね稍些瑕あるねもて美玉を疵瑩の下ふ列せ

おのづから其人煩腦をば全く脫せざるどころかれども從ふ所の有情の人ざるのみならずおよそ情欲のをのづからさるべき哀樂をも亂るいことなく樂みても荒むことをなく能くその節を守るなのみか怨むべきをも敢て怨らず怨むべきとも怨まざるいもと情欲の海きよあらで其道理力の強さが故あり斯れば外面みすぼらしいだに行ふ所にあくまでも端正端良なりと雖とも其行ひなすおさきだち衆多の男情心の中み勃發するおとおらもやゝもすれば其劣情と道理の力と心のうちまで相鬪ひ道理劣情み勝つみ及びそだゝめて善行をおすを得るなり彼の神聖よあらざる以上ゝ水の低きみつくが如くま善を脩むる者やゝあらんいくらの迷ふ心あるをばよく道理をもて抑ふれをこそ賢人君子ともいむるいなきばとをよりて迷なくんば善をなばとも珍しのらず君子賢人などいゝんゝをの〳〵ま是おるのなるべし斯きば人間といふ動物にゝ外に現るゝ外部の行爲と内に藏れざる内部の思想と二條の現象あるべき筈なりまのしま内外双ながら其現象ゝ駁雜おて面の如くみ異あるもののらせま歷史あり傳記ありて外ま見えさる行爲の如きゝ概ねこきと寫ばせいへども内部み包をる思想の如きゝくさ〳〵しきま涉る孩もで寫し得たるゝ皆で神おり此人情の異を穿ち所謂賢人君子ゝきらゝ老若男女

嗚呼麻コヴレイ氏の言をもく信なりとせむ歟從來の美術ゝ次第まおとろへ英國の文華を以てもまさ彌ルトンゝいださゃるべく伊多利ゝ國の高雅なるもまさ阿ンゼロゝいたさゝるべしひとり小說てふ美術み於くゝ望將來みきむめく大なり數コツトや笠トンや重てや奏リオツトや近代の大家多しといへども力めく之ま駕せんとせばけつしく至難おりといふべらゝを嗚呼我文壇の才人雅客いさづらみ馬琴を本尊としあるひゝ春水み心醉おしあるひゝ種彦を師とし崇めて其糟粕ゝばおむることおく齦乎陳套の手段を脫ー玉我物語を改良るー美術壇上ま列しつべき一大傑作をあみなへや

小說の主眼

小說の主腦ゝ人情おて世態風俗こきみ次ゞ人情といいうおは者ゝいふや曰く人情とゝ人間の情欲みて所謂百八煩惱是なりそれ人間ゝ情欲の動物おるのらいのなる賢人善者ありとくいまだ情欲ゝ有ぬゝ稀なり賢不肖の辨別をく必を情欲を把なるものの ち賢者の小人みと異なる所以善人の惡人ま異なる所以ゝ一ま道理の力を以て若くゝ良心の力みて頼て其情欲ゝ抑へ制を煩惱の犬ゝ攫ふみ因るのみされども智力大ま進みく氣格高尚をる人みありてゝ常お劣情を包ふのくしく苟みも外面み顯さゃるのらさ

げでゐん嫁彼の曲亭の傑作おぎはぎ八犬傳中の八士の姓きれ仁義八行の化物ぞで決して人間といひ難かり作者の本意もとよりしま彼の八行を人手擬してお說となすべき心得あるのらあくまで八士の行をば完全無缺の者となして勸懲の意を寓せーをりされば勸懲を主眼として八犬士傳を稱ずるときは東西古今其類をき好稗史をりといぬべけれど他の人情と主腦として此物語を論びおば瑕をき玉とは撰へがたし其故をいかにとあらば彼の八主公の行を見よ否其行爲ねとまきかくまれ肚の裏みて思へる事だ1徹頭徹尾道よかおひて皆て劣情を發せしことなし知や一時瞬間といへども心猿狂ひ意馬跳りて彼の道理力と肚れ裏まて鬪ひたりける例もなしよしや堯舜の聖代なればとくらいる聖賢の八個までも相並びつゝせこいてんこと殆々望みがたき事ならむや蓋し八犬士ね曲亭馬琴が理想上の人物みて現世の人間の寫真ゐらねば此不都合もありけるおりさねあれ馬琴ね凡ならざるよく巧妙の意匠をもてして其牽強をむ掩ひーねば讀者ね竟もこれをしらをよく人情をも穿ちたりとおめたゝえたるね誤らをや斯いへむとて八犬傳をむ小說あらをといふこいあらねど今證例み便あらんが爲ましむらく人口ユ膾炙したる彼傑作を引用せしのみ曲亭翁の著作ユ

善惡正邪の心のがちの皮幕ねね淺ね所をく描きいざして周密精到人情をば寫出しして見えしむるを我小說家の務とするなりよしや人情を寫せはとて其皮相のさを寫したるものだいまさ之を真の小說もいふべのらず其骨髓を穿つま及びてたじをく小說の小說たるを見るなり和漢ユ名ある稗官者流ねひさずら脚色の皮相ユとゞまる拙トをして深く其骨髓み入らむことを力をさりとも主腦となすべき人情をば皮相を寫して足れりとせを豈慨むべきことあらむやそれ稗官者流ね心理學者のごとー冝ト心理學の道理ヲ基づき其人物をば假作るべきあるね苟ユもおのをが意匠ねて強て人情ね特長もな否心理學の理ね戻れば人物なんど狀假作りいだきば其人物ね已ね既ね人間世界の者ゑらて作者が想像の人物をるから其脚色ね項なりとも其譯ねなりもいふともこ之をね小說といいふべらずらを物ユたとへて之をいへゞ機關人形といふ者ユ似たり勿卒にとも之を觀きはさるがら彩のまことの人間活動をばかごとくなどとも再三熟視なすいたれば偶人師の姿も見え機關の具合もいとよく知らきて興味索然たらざるを得ず小說もまた之ゑひとーく作者が人物の背後ゑありて屢ゞ糸を牽く樣子のあらむね人物の擧動ユ見えねたゞまち興味を失ふべし試ユ一例をあ

どありき是ば人間もこれまおなじく衆達落魄必もしも人間の性質ゐ伴むざるうち或ね才子ありし業をおさゃるあり或ね庸人まして志を得るあり千狀萬態千變万化因果の關係の駁雜ある樣を圖定むべうらを故ゐ小說を綴る1當りてよく人情の奥を穿ち世態の真を得まくおりせば宜しく他人の衆棋を觀て其局面の成行をば人1語るが如くゐをまべし若し一言一句たりとも傍觀の助言を下をときまね衆棋ね已ゐ作者の衆棋とおりて他人の某々等が圍したる衆棋といいふ可らを「あゐ此所いいと拙しもし予なりせば斯をまべし茴樣々々ゐ行ふべき1」と思もるゝ廉も改ををして只ありのまゝゐ寫してこそとゝめて小說ともいもるゝおれ凡小說と實錄とね其外貌1つきて見ればをこしも相違のおき者さまたゞ小說ね主人公ね實錄の主とおおたうらで全く作者の意匠ゐ成たる虛空假設の人物なるのみされども一旦出現して小說中の人となりなば作者といへども擅1之を進退おをべからを恰も他人のやう1思ひて自然の趣をのみ寫をべきなり彼の勸懲をもて主眼とせる和漢の小說作者のごとく1斯る情ね此人物1ねふさむしうらをさる情欲をいだかせなば此人物乃價を損ぜん如を聖人君子1耻ざる立派の人物1まおーおくべしなど作者が岡目の手細工もて人の感情を

つきてねおのれおのづから列ゐ論ありその折を得てとくよしあるべしされば小說の作者たる者ね專ら其意を心理1注ぎて我假作りたる人物なりとも一度篇中1ねいでさる以上1之を活世界の人と見做して其感情を寫しいだをゐ敢ておのれの意匠をもてゐ善惡邪正の情感をむ作設くることをばをさを只傍觀してありのまゝゐ模寫すゐ心得1まあるべきをり譬ば人間の心をもて衆棋の碁子と見做をときまねと飛車1まね其盡きおと飛車の如き情も勘からざるべく行く道常1よこさまなる心の角も多のるべし桂馬の剽輕なる香車の了見をき或ね王將の才1富て機ゐ臨み變1應ぜる雖橫無盡の行あるはたも進むべき前あるをしりて左右1避くべき死道をしらざる匹歩庸歩も勘うちをおのがおおじからを角も世故1長ぜるいたれば直なる道をも行くことあるべし或ね王將も匹歩の手1かゝゐ或ね愚なき香車1して金銀を得ることもありをん圍碁者ねも造化の翁1ま碁子ね即ち人間をり造化の配劑の不可思儀なる傍觀で觀るとね大1異あり「敗金やとなく彼方へなりこみ進むで王手とおるべうらん」と思ふ1違ひて一匹歩よたちまち道をふたがれつゝ進退くべきひまだなうして桂馬の餌食とおるなど

画工が自儘の想像よりつくりいだせるものおよび美人間の像をあらわすに、人間以上の人物を假作するもまづその如く此處彼處なる人間若くはまた人間以下の像をるべく人物を假作するもまづその如く此處彼處なる人間より其性質の原素をもとめて併せ、これを一箇どおり完美全良の人物をば小說中につくりいだすにも（もし其配合の方法巧拙心理に違へる由なき以上は）敢て苦しからぬことなきどころか人界に望むまじき嗜々奇異なる人物なんどを作者が自儘の想像もて假作りいだすをも惡むべきにあらず、前にも已に述たり。如くも小說も美術にして詩歌傳奇等におなじけれどもまたおのづから詩歌傳奇と異なる所も勘からず。譬ば詩歌傳奇等におなじけれども小說も模擬をば主眼となさゞれども小說も常に模擬をもて其全體の根據となしいはゞ模擬を主眼となさゞれども小說も常に模擬をもて其全體の根據となしいはゞ模擬をば主眼となさゞれども小說も常に模擬をもて其全體の根據となしいはゞ模擬をば主眼となさゞれども小說も常に模擬をもて其全體の根據となし人情を模擬し世態を模擬しいはゞ模擬そのものをば真を違らげめむとかむる人情を模擬し世態を模擬しいはゞ模擬そのものをば真を違らげめむとかむるえのたり小說いまだ發達せずして尚「羅マンス」たりしころまでは其体裁も詩歌に類しえのたり小說いまだ發達せずして尚「羅マンス」たりしころまでは其体裁も詩歌に類して奇異なる事をも敘したりがひとたび小說の体を具備して今日の小說となりたるて奇異なる事をも敘したりがひとたび小說の体を具備して今日の小說となりたるるらまれまた荒唐なる脚色を弄して幽怪の物語をもまぬうもあらず是今日の小說界るらまれまた荒唐なる脚色を弄して幽怪の物語をもまぬうもあらず是今日の小說界史の一至技難たる所以なりかしされむ人物を假設けてうの情をしも寫さまくせばま史の一至技難たる所以なりかしされむ人物を假設けてうの情をしも寫さまくせばまづ情欲といふ者をば其人物が已まに既ふ所有したりと假定めてさてまかくの事件おづ情欲といふ者をば其人物が已まに既ふ所有したりと假定めてさてまかくの事件お

折衷おし勘懲といふ人爲乃模型へ造化の作用ばためこむときゝは其人情と世態とは已に天然のものゝあらを作者がみづから製作へたる譬向ひ人情をるうら其人物を除くの外は決して見がたき人情あるべし夫小說の主人公はもとより假作の者にしあれば完美あらしめむとほりするときゝは作者の意匠の浮べるまゝにあくまで全美にこしらふるも敢て妨げざることなれどもたゞ夥め限界を設けて人情の外にいでたるやう工風を疑すを肝要とす譬ば画工が意匠を疑して佳人の肖像をものする折ふもひたもら妖嬈ならんを望とくみざりまあるまき眼を画き若くは眉口の類をなんども人らしくなく寫しいださば其貌いかゞとも美ありといふとも之を名畫といふ可うも否名畫といひ得べ丸も絶美の「人間」に描き得たる名畫なりといひ難のうりもし絶美をる禾曽有の佳人を描き出さまくほりもるをらばまづ其蛾眉をゑがくる當りて世二蛾眉をもて名を鳴らせる佳人の蛾眉を雛形とおしきて其眉を畫きつべし星眸ま於るもまた其如く世界星眸の譬たかき美人の眼を手本として其星眸を寫しつべし嘉屠いはゞ及ばを面の長短髮のいろつや皆世にあるべき人間より其雛形をとり來りてえためて古今ふ曽てあらざを絶美の婦人を描くべきなりもしゑみせずして眉も口も

傳奇ヨ鄙野ある言詞ヲ用ふるこゝを惡むが如くヨ鄙猥ヲ語るを惡めざるが如ン茂ルレイ」が「文ジン委リオツト」女史ヲ著作ヲ評ヲる語ヲいへらく（上略）おゝ文學ヲ主旨目的ヲ人生ノ批判（クリチシズム）ヲなさんが爲ノみヲ往古ノ識者ヲいひ小說ヲもヲ文壇ヲる一大美技ヲも稱ふべきヲ却テ屢々賤められ最下ヨ其位置ヲ占るものゝそも〳〵また何故ぞや想ふヨ人生ノ批判ヲ見るべき小說稀なるヨ因ることゝをるべーせヨ操觚者流多ーヲ辭も造化ノ文才ヲ人ヨ附與ふるや配劑一樣あらざるから見識ヲ淺きものあり意匠ノ足らざる者あり概ーく評ヲ下ヲゝたにヲ一大奇想ノ糸ヲ繰りく巧ま人間ノ情ヲ織おし限おく窮おき隱妙不可思儀ヲる因源よりして又かざりなく定まりおき取捨多端ヲる結果ヲーもいヲ美ーく編いだーて此人生ノ因果ノ秘密ヲ見るがごとくおいをあらむヨ說明めたる著作ねもくなーおよそ人生ヲ快樂ヲ其類おためく多きが中ヨも人ノ性ノ秘盛ヲ穿ち因果ヲ道理ヲ察り得るヲど世ヨ面白おこゝをねあらじさねば人生ノ大機關ヲといをヲ詳細ヨ察り得るからもヲ容易るから如業ヨーあれヨ淺識韭才ノ操觚者流ヲ得てなをべうもあらざるヲ以其才稠人ノ上ヨぬおんて不拔ノ氣力ヲ有ヲる者ノみ特りそのこゝヲ名得爲ヲべーヨ遐とて文壇ノ技術ヨ

でりて資樣ととの刺戟ヲうけ立ば其人いかある感情ヲおこゝやまた元ゝの感情おこらば其餘ノ物またノ感情ヨいいかある影響ヲ生ゞべたうまた從來ノ教育と其營業ノ性質によりて其人物ノ性にきらゝ其感情ノ作用ヨも何等ノ差違ヲ生ヲるかといふ細密ヨ撈り寫ーて外面ヨ見えざる衷情ヲあらむヨ外面ヨ見えしむべしもー人物ヲ善人ヨて勸懲實事師といふ者ならんノ作者ハ力ヲて實事師ノ其折ゝヨ感ずべき感情ノみヲ摸寫しいたじもし人物ヲ惡驚あゝせば邪曲しい心ヨ抱きつべき感情ヲのみ寫すべきおりきれどもこゝをおもヨ當りて善人ヨも尚煩惱あり惡人ヨも尚良心ありて其行ヲをもみきたちいくらか躊躇ふ由あるヲは洩して寫しいだきもあらばまた皮相ノ狀態ヨて真ヲ寫たぬものといふべし圓朝熱心なる油繪師ハ刑場ヲんどへも出張ーて斬らるゝ者ノこほかさちねさらゝ斷頭手ノ腕ノ働ヲた筋骨ノ張たるさまヨも眼ヲ注ぎて觀察するとかゝ小說作者もまづそのごとく性ノ眼ざもノも情ノ邪あるものゝも敢て忌嫌おことをばなさて心ヲこめて寫さもあらばぬおでゝ人情ノ真ヨ入るべきさねとて淫猥野鄙ヨもたれる隱微ヨ過たる劣情ヲきへヨ寫ーいだせよといふおゝらや盖も小說ハ美術なるから彼ノ音樂ヨ類果ヲ忍み雜亂ヨ擬毫ノ後ヲ嘯むヨ

人生の批判をもて其第一の目的とにおがして筆を採るべき者なり。…
されば小説の見えがたきを見えしを瞭昧なるものを明瞭にし限なき人間の情欲を限ある小冊子のうちに網羅し之をもてあそべる讀者をして自然と反省せしむるものなり造物主の天地万象を造りて私なく拾も我党小説作者が種々の人物を假作りいだして毫末も偏頗愛憎なく行住進退なべてをなひたずら自然に委らぬやう寫しなせるを似たりといふべしさもあらばあれ造化の翁が造り設したる活世界は極めて廣大無邊にして規模のあまりに大なるから凡庸推察の眼をもてをも原因結果の關係をば察り得ることいと〳〵難かりおろるを我党小説作者が其因果の理の要を摘みだし小冊子のうちに幾めて照應取捨する便に供ふ其任豈に重らずやもしよく奏功おは由あらなば其功もまた偉大ならずや

因に云本居大人が「玉小櫛」にて源氏物語の大旨を論じていへらく此物語の大旨音より說どもあれどもそも物語といふものゝ本旨とたづねもしまだ只よのつねの儒佛などの書のおもむきをもて論ぜらるゝは作者の本意にあらずさまゝ〳〵彼の儒佛などの書とおのづから似たるおゝろ合へる趣もあれどもそをとらへて懲

してやゝ高等な位置をしむるものを此人世の大機關狀覺るをえざるは主眼をきゝまさゝは目的をなさゞるを宗教といひ詩歌といひ哲學といひ其名はよりて形こそちがへ其主旨をはる所をとへばおべく人間を離する者あて其性質と運命とは何等も自然も機關にまかていうまる具合にもさらくや狀殘る盛おく說あ充ちめて世間も人も迷妄をとゝ充また疑も雲をも排ひて好奇も癖をは慰むるあり人此種ろ書と讀みおはよし其深理は解し得ずとも尚人世も評判記も興あること狀覺ゆるるうに卷を閉くことを能さるべし蒙昧不學の徒にありてはこれら書籍を讀むといへども爲ふまづうら悟をひら充く反省致舍をるおいたらをとも事れ曲直是非當否はおろばおがら自判も得べし（中略）委リヲワト女史も小說ゆみさる觀念の畑へしも讀者を導く捷徑なりされども女史も獨斷をもて此行は宜しきことるり此行は不可まりなど皆く指示することとは好まも唯あからさまゝ事物の因果を見るが如くにかきあらたゝして褒貶取舍は總ゝてこを讀者の心も任したりき女史になる人の爲ふ種を誘く者のごとしこづから褒を收めんしく他人の之と捨ふも任して善も妬めは氣色もなし云々といへり誠に茂ルレイ氏のいへるがごとく苟ふも文壇の上ふさゝて著作家たらはは此著

邪正さまざまあらむ中に道理ありたがへる事ありとも感ずまじきにあらねど我が心のまゝに任せぬことのみおほかれば感ずるこゝろもなし源氏君を上手といひ空蟬玄君朧月夜の君藤つぼの中宮などの心ばへもよくぞ書あらはしたりといひ紫上をいとやさしくいみじくもてなしたりと感ずるこゝろもなし儒佛などの道徳をいひ善人をほめたるも感ずるこゝろもなし不義惡行をにくみ善き事あらむをもてはやすこゝろもなし其行をまた外にいかばうそを善き事あらむをもてはやすこゝろもなし其不義惡行をするよしをはさしもさてゝいひ言をもて只その人あひだれもなゝ行をも深さうさを返すがへすうきがべて源氏君を本主と善人を本となく善事のかざりを此君の上にとあつめたる是物語の大旨なりとて其よしたねし儒佛などの書の善惡と差異あるけぢめをくさりとて彼のたぐひの不義を可とするふうにあらぬその惡しきことをも今さらいむでもあるく然るさやうの罪を論ずることをおのづから其方の書どもの世に夥多あれば物せぬ物語をまつべきにあらず物語も儒佛などのまたゝうおう道のやうな迷とてまよまで悟に入るべき則にもあらぬ只世の中の物語あるがゆゑにさするすぢの善惡の論もまばらくさしおきてさしも關もらぬたゞ物のあはれを知れる方の善きをとりたるべし此おゝろ

体をいふべきふうにあらぬ大うさの趣ばうのたぐひとは痛く異なるものゆゑて惡て物語れ又別ふ物がたりの一種の趣のあることゝみしてでもおおいさゝいへる如ー（中略）胡蝶の巻にいえくむうし物語を見さまふにもやうく人のありさまく書るものなるゆゑ故ふ讀えばおのづうら世の中の景況をよくあゝろえ人の所業情の現象をよく辨へまる是ぞ物語をよまむ人のむねと思ふべきことなりなる（又略）まからば物語みて人の心所業の善き惡きいみをるぞといふに大うさ物のあむれを知り情ありて世の中の人の情にかゝはるを善とし物のあむれ狀知らぬ情をくて世の人の情にうあむざる狀惡しとせりがくいへば儒佛などの道の善惡といとしも異なる差別をさが如くなれども細ふいえむふに世の人の情ふうあふとゝおむざるとの中にも儒佛の善惡とれ合むざるも多ゝ又猶べて善惡を論むるをも只をざらかにやむらびて儒者などの議論ばやうゝひたぶるふせまり

色を構へて世を諷誡せんとつとむる者なり曲亭馬琴以後の著作は概ね此種の者と思
はる勸懲小說にもおのづから二種の別あり一を褒譽といひ一は誹刺といふ褒譽は仁
義禮智等は八行を本として暗に全編の列傳と設け其行爲を尊むべく仰ぐべきを示し
て讀者としておのづからこを景慕する心念を起さしまして瞑々裡に良道に導かんこと
を期す馬琴が仁義八行を列傳として八犬士傳を綴り智仁勇を人に擬して朝夷奈巡島
記とあまる皆おの主意に外ならざるべし誹刺は全く之に反して暴虐非道は行爲をの
べ若くは不義不孝は狀をあらはしあるは痴愚の笑ふべきを寫しあるは醜行は恥べき
を描きてもて訓誡せんとつとむる者なり曲亭翁の夢想兵衛の物語式亭三馬は浮世床
浮世風呂をはじまとして福内鬼外の戲作類は總じて此類の物と思はるさはあれ馬琴
の著作の如きは概ね褒譽と誹刺とを兼たり殊に晩年の作に於ては褒貶自在にもなせ
しものあり美少年錄の如きは其例なりまた誹刺法にも二樣ありて嚴正なる事馬琴の
美少年錄の如きものあり或は滑稽洒落にして一讀人を笑はしむる鬼外の戲作に類す
るものあり

摸寫小說（アヽチスチツクノベル）は所謂勸懲小說とは全く其性質は異にしたるもの

はべは物にたとへていはゞ蓮をうゑてめでむとほる人の濁りてきたなくはあれ
ども泥水をさくえふるが如し物語に不義なる戀をかゝるゝ其にごれる泥を愛で
ゝにはあらず物のあはれの花とさうせん料ぞかし源氏の君のふるまひは泥水よ
りおひ出たる蓮の花の世にめでたく咲にゝへるたぐひとして其水の濁れることを
をばさしもいはず只なさけふかく物のあはれを知れる方をやりたてゝよき人の
本にしたること云々といへり

右に引用せる議論のごときはすおぶる小說の主旨を解してよく物語の性質をばとき
あきらえたるものといふべし我國にも大人のごとき活眼の讀者なきにしあらざり
ゝまどもそは絶無にして希有なるから他の曲學にあやまらまて彼の源語をさへ牽強
して勸懲主意なるものなりなどいやしたり兒に講釋せる和學者流も多しとおく豈は
なはだしくあやまらずや

小說の種類

小說を其主意より見て區分すれば二種あり曰く勸懲曰く摸寫即ち是なり勸懲小說は
英語にては「ダイダクチツクノベル」と稱して專ら槩誡を主眼とし人物を假作し脚

おまさ工三回の經驗よりて反省覺悟すみ沈益鮮やかに勝りて其効能を覺ゆることなり

して小少あらざるをりさまざまも我國の小說作者ねこゝらの道理をさとらざるゆゑひたすら筆舌が語を師として小說といへば必ずしも事を凡近卑とりて意を勸懲に發せざるべ叶むざる事ばやう忌ひで奨誠といふ模型をつくりで強て趣向をそのうちにて工風あさまくおしたりしいとも嗚呼なることさおらすや

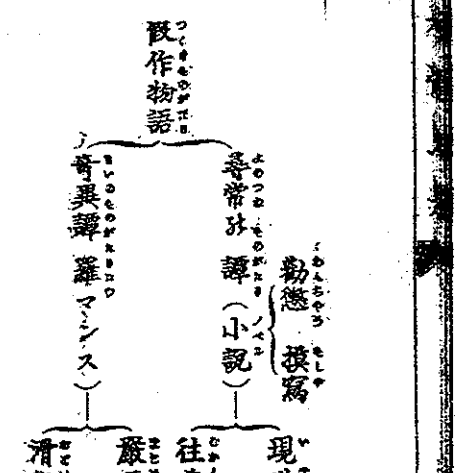
さてまた小說を其編中に記載せる事件の性質ふよりて區分すれば更に二種れ小說となるなり曰く往昔（時代）曰く現世（世話）即ち是をり往昔物語ね既往の事蹟を本として若くね歷史上ま人物を主人公となして以て一篇の脚色を構へ現世物語ね現世の情態を材料としてもて其趣向を設くるもれなり我國の小說ね概ね往昔物語即ち時代小說ならぬね希へ馬琴の著作ねいへば更なり俗ふ稗史と呼なるせ真名ふよりの半紙本ね概して此類ま物なりなりをかして紫式部の源氏物語爲永春水の情史等ね總て現世物語の部類とゆふべし

左ま載るね小說の種類を表すふ略圖なり

ま〻其主意偏ふ世態ばかり寫しいだばよき勿論ながらさきばかり模倣するもまた其脚色を設くるふも前に述べたる主眼と雖して只管假空の人物をしく假空界裡に活動せしめて真ま遠らしきむとかむるえんの〻譬ば詩人が詩歌とものして真景と寫し真情をもれ畫工ふ丹青をもて花鳥山水ふ描き寫像師ふ錄をもく人またね歌ふ形ど寫れるふ如く專ら真に遠るを主として趣向を攜へ列傳をきうけ人情世態を穿てるものなり故に此種の小說ま於てねあるふお勿論の意を寫して脚色をまくる事をばさきびたずら世間まあるべきやうを情態そのを掲げいざこゝさきふめら異物のごとく見えしめむおとふ堅ふみがめて天然の書記をうつし自然の跌宕を描き讀者をしてまらをまらも其假作眞ま遊ばーをて而して隱妙不可思議をお此人生の大機關をば察らしむるといさをものなりされば模寫主意の小說ま真ま勧懲の法をあえう婦ふ人を教化するのがあり讀中よの意ともふ現世の情態を寫しいささば其物語ね（よしや其事件と人物の如きね全く假空のも況なりとも）皆も現世ば風潮を示し時好を趣く旅ねしらしを實情れ類斜を察うすむる一活歷史ともいおべきなれば其眼光人ユトて之をよまた彼假造をる際記錄歷代歷史實傳等に對照ふ比較ふ參考ふ

を假作りいだして征役中の情況などを寫ほものおう我國の戰記軍記等とハ異なり就海小說（奈バル。ノベル）ハ假空の人物假空の事蹟拭假作りいだして就海の情況をのぶるものなり我國の巡島記類のものと其質相似て異なるものへ蓋し我國の巡島記類ハ總じて奇異譚の部類なるとも就海小說ハ之と反して重ゐ就海中の情況をのべさる尋常の小說に異ならざるべからず

前の條圖よて表示なしたる如く現世物語するむちせ話小說ゐゐおのづから三箇の別あり上流社會の情態を寫ほを主とほる者あり中流社會を物語の本義とおす者あり或ハ下流社會の情況をむ專ろに描きいださんと力むるもあり但し三種とも相關して決して判然さる區別ハなけれど其主人公の性質ゐよりて此區別拭しも生ずるなり我國にハ現世物語と稱をべきもの極めて其類少うるから例を擧ぐるほ苦めどもまづ大概をこゝに示さば爲永春水の人情本ハ概して下流社會の情態を寫し時ゐ上流社會のありさまをも寫せり京山翁の艸冊子などハ其名を時代物語ゐるとあまども其實中流以下の世態をうつせる世話物語りゐほかあらざるべし松亭金水が翻案せし蛾山の情史ならびに千代萩の情史なんどハ上流社會と寫せるもの紫式部の源氏大意



尚此外ゐも政事小說宗教小說兵事小說就海小說等其數一ならして足らざれども要するに現世往昔ゐ双小說ハ細別たるに過ざるなり政事小說ハ專ら政事界ハ現況を寫しいだして時ゐ党議を張らまくすゐ政事家ゐ手ゐなれゐ者多し「美イコンスヒヰルド」候ゐ春鶯囀矢野文雄大人ハ纂譯せる經國美談なハ其例なり宗教小說ハ專ら布教拭音となる者をハ其的例とおをべし花者いまだ我國にハ在せざるとハ假ゐ其例と擧ていむで靈顯記利生記ゐさくひをらねゐ山東京傳翁が晩年にいさりて著しゝたゐ物語類ハ此部に入るべし兵事小說ハ征役中ハ事實を本ともく趣向をゐ加ハ假空ノ人物

み高雅の現象を愛せざるなし苟も美妙の感覺を抱けるうらには冨麗なるものを見てはこれを樂み豪宕なるものを見てはこれを愛し或は尊嚴偉大なるものを見てはそゞろに畏敬する念を生ず或は壯快激越なる者を見てはこれをうけ感激奮發なし瀟洒婉曲なるものを見て喜び洒々落々たるものを見て樂む蓋し人間の常性なりうし此感情に投合してもて人心をさのしましむるは即ち美術家の務にして我小說家の目的なりもし小說に載せ所よく人情の髓を穿ち細に世態の秘蘊にさぐりて冨麗なる者も宏壯なる者もおもしろきものもをかしきものもあれせ綴れて寫しいださば爭でか文心を感ぜしめざらんや況んや小說の主とする所を音響にあらず色彩にあらず此活世界の人情なるから一事一物總じてこれ活動なさんず趣あり彼れ音樂と繪畫に比ほれば興味一層多のるとも決して劣れる由はあらずさらぬだに「如ン茂ルレイ」氏は人間世界の批判をもて人生の一大娛樂といひさり小說は即ち人生の評判記にて甲の失敗なしたる所以乙の成功なしたる所以或は權力を得て道義心の腐亂する趣或は情に牽されて道理を誤る次第歷々編中に敍しいだしてもつて讀者の評判に供ふ具眼の人にしてこれをよまば其興情ろふゝること他の經書によみもしくは又正史をよむの

三位の狹衣などは專ら上流の情態を寫せる好き世話物語と稱しつべし

小說の裨益

小說は美術なり實用に供ふべきものにあらねば其實益をあげつろえんことなかゝ〳〵に曲ことなるべしさはあれ音樂繪畫の類にも暗に實益の存ずるごとくに小說稗史の場合に於てえ作者の敢て望まざりける裨益あるひは勘しとせず蓋し美術家の望む所は偏に美妙の感覺をあたへて人を娛ましめむとするにありて敢て他に望む所あらざればなり前にも已に論じたるが如く美術の妙工神に入りて完美の程度に達れるものは大に人心を感動して暗に氣格を高尚になし教化を裨補する由あれどもそは妙工の神に入りて自然に生ぜし結果といふべく決して美術の目的ならねば其直接の利益といえんはいと大なる謬なるべしかゝれば小說の利益をのべんとするにはまづ豫め區別をまうけて一を直接の利益となし一を間接の裨益となすべし直接の利益は人心を娛しましむるにあり語をかへて之をいへば小說の目的は娛樂を人に與ふるにあり娛樂にも種類多かり而して小說の目的とする所は人の文心を娛ましむるにあり文心とは何をかいふ曰く美妙の情緒これなり夫人野蠻にあらざるよりは皆風流の妙想を娛

總て美術といへる者には此大裨益ある由とば已に前段にも論じさるーがいま要略ーて再びのぶべー夫れ小說は人間の肉欲を供する者あらて其風流の嗜好を發じて娛樂を與へんと望むものゝ如くなれども風流の嗜好美妙の感情にもつとも高尚なる情緒あーて文學發暢ー開化進達せる國人ならでは決ーてこの情緒は有することあーたの蒙昧の野蠻を見るあたはず肉体の欲あるのみ耽りて所謂妙想は樂むことをえらねむ造次顚沛行住坐卧も其爲にはるところを問へば皆肉欲あらざるはなし故に其心は卑野まあゞきてさゞおのゞ利のみ是求めて殘忍なること酷しく物の可憐といふことゝば毫末だまも解せざるなり蓋ー劣情の爲は身は責られ卑欲のために追るゝうち道理いまは〳〵退縮あー良心はいよ〳〵力を亡ひ特り卑劣の情欲をーて專ら發動せーむきむなりよーや蒙昧の民あるともひたすら功名富貴ゝ求めて競利場中あ奔走あー竟に其欲望を休はーむることあく畢あ塵界は榮利あれみ其心をーも傾け盡さゞ或は人情に戻るやすく或は私欲に偏ーやすく卑劣陋猥は心まーも流さらむとやりはと雖どえ豈よくこまと制め得んや是をかーあがら其胸壞に蔽れ鞏々たる陋態おきまいそぞろに情欲は奴とおうて其指願とはゞ受くまばねみべー此劣情と制はるには道理

比まいあらゞ是泰西の國々にても大人學士とばえるゝ人々皆爭つて稗史をひもときて快樂をもとむる所以なるをかし我國俗にいはゆるより小說をもて玩具と見做ーつ作者之を甘んじ敢て小說を改良して大人學士と樂ましーむる美術となさむと思ひしものおしさるうらあ我國の小說稗史は之は泰西の小說と比ぶる時あは皆も歌川家の畫工ゞものせし浮世錦繪といふものをば狩野家の繪畫に比ぶるごとし錦繪のおらもしも描さにあらねど所謂高雅の質あ乏しくせの文心を慰するはたらねば幾ま童幼婦女子にのみもてあそばるゝを務とせりさまばこそ小說固有の利益といへば春の日長ゝ思ひしなれ是をかーあがら小說とえて婦女童蒙の玩具と見做して美術視せざりー誤りより原因なーたる過失まて其罪おほかさゝ見識おき作者の上あありといふべー以上ま述たる所をもて小說稗史の直接なる利益はおほむね盡ーまさ進ば更ま間接の稗益を說くべし間接の稗益は一まーてたゞ其曰く人の氣格を高尚になす事曰く人を勸奬懲誡なる事曰く正史の補遺となる事曰く文學の師表となる事即ち是なり

（第一）人の氣格を高尚なす事

ば氣韻おのづから尚うなりてあばらく欧海を脫しはべし是なん美術の實益をうして尚要用ある所以なりなるされば美術を常ゐ愛してあむ〳〵之を玩ばゞ美妙の嗜好いまは〳〵長じて氣格いよ〳〵高うなるべし小說ゐ即ち美術なみうらこの裨益あみ勿論なり但し我國の小說中ゐ眞ゐ美術と稱へつべき小說ほと〳〵稀なゆゑう讀者あみひゐ此議論を信しかねぞと思ゐみべーおのれもこゝを說解み玆好方便ばなきま因しぬ已ゐ前段ゐおべしごとく我國俗がもてもやせ玆小說稗史ゐ未熟ゐーて尚美術さは玆質ゐ乏しく之を繪畫ゐ比ゐみときゐゐ殺玆浮世繪ゐ位置ゐありて真乃繪畫といふべうらを此比喩玆意を味ひこなば所謂まことの小說とゐ果ーていのゐは者れみのを概ね了解ゐー得べきなり。

（第二）人を勸奬懲誡なす事

小說の勸善懲惡ゐ裨益する所ゐる由ゐ先人已にあば〳〵說きつ世人もまさ之を口ゐする者おゐし殊ゐ東洋の小說作者ゐ醫藥排悶の効能と勸善懲惡の裨益をもて小說稗史の目的と心得意ら勸懲玆主眼として稗史を編む者比々是なり奬善誡惡を主醫とーて小說稗史をものするときゐゐ其勸懲ゐ裨益すべきゐもとよ〻其答の事なるうしよ

玆力をうらざはべのらすされども劣情烈しきときゐゐ道理もまつたく威力をうーゐ玆ひこきをいうゐともゐし得ぬことあ利慾む劣情ゐ熱病にかゝきみ小兒にひとーゐ烈しく勃發ゐーるゆ折ゐゐとへいのれみ者承りて藥玆のまーめんとまたきはとて容易ゐ之をざくものならを道理ゐおほ嚴父のごとしいと苦々ゐき面地ーて小兒を叱咤したきはとて勃發むげしき時ゐ茨てゐたえて其誡を用ひざるべし此時ゐ當てゐ據ろるく母親の手段を採らざる可らず母親の手段といいうまとゐふ譬ば小兒ゐ良藥を飲ゐーめむとはる折なりせばまづ甘味ある菓子を與へて小兒の心玆誇ひつゝ玆漸く渴玆覺えて飲を求むるときにいたりて始ゐ煎藥を飲ませむるべのくしてあばゐ藥を服ーて其効能を知るにいたきはゐ其病苦とーも逃去んが爲ゐすゝめをとてもみづうらのむべし旦ゐ煎藥をあば〳〵飲るば渴もいくらか減ずべ々れゐひとへに水を求むるこゝろも次第々々ゐうすらべー此比喩をとよ〻的切ゐらねど劣情を制するにもまづその如く勃發玆をめて烈ーゐ折ゐ道理をもてして制はべうらを玆の温藥まる美術を用ひて其文心ゐ誘へつゝ美妙の感覺玆喚起ゐて次第に劣情玆おひゐりぞ甘其當人の心とーも此塵界の外ゐ誘ひ一種微妙の感覺をば招うーむるゐいたりもせ

て小說ゟ反ゐ往誤謬あるべし唐山の人々が小說戲揩して誨淫等欲と罵りさりーゐ金瓶梅もしくゐ肉蒲團等の評をなるべく我國俗が物語を摸斤して風儀を紊ぼの書ありといひしゐ男女の私情の隱微と寫して鄙野淫猥に流またりし情史の類を指すものあるべし然り而して金瓶梅肉蒲團ゟらび丹猥褻なる情史のごときゐ是似而非なる小說ゝまことの小說といふべからぬ其故いかゝとゐれば此等の數種の小說まゐ美術ゟ灰て最も忌むべき鄙猥の原素を含むが故ゟり否猥褻なる情史の類ゐもとより誨淫等欲をば其全篇の主眼としてものしたりーこと疑をしのまる似而非なる小說稗史のゑばゑば世上ゟあらそるゝゐ其罪讀者の方ゟあて作者にあらずといえんも不可なし何となれば作者ゐ戀ゝて時好ゟ應ゝて著作の筆をば操るものなるゟもし世の人が高雅ゟして淫靡になづめることをくんばなどてう猥褻卑野ゟりなる小說稗史をものしつべき源語のすゟぶる猥褻なりしもまたゐれ藤氏專權以來の文弱の弊のゑうらしめしものなり豈さゃ作者を咎むべきやゐうくいたゃ反對論者ゐ更ゟおのをを難ゝまいえなん戀ゝて小說と稱ほるものにゐゟあらを男女の情話をのすめり殊ゟゐ摸寫の主意をもてせば道ゟ違ひし男女の情話も頗る多うることなるべし近くば米國おゝび英しや勸懲を主眼として副色趣向を結構せをとも其妙神ゟ入るゟいたらば暗ゟ讀者を奬誡して反省せしむることあるべしおのれが奬誡の一條とば裨益の中へ加へさをしゐ全く此意ゟいでたることにて敢て世上ゟもまもやせる勸懲小說の裨益をしも事あたらしう說くにゐあらねどいま退いて考ふれば世の活眼を具事ゟありてゐ勸懲小說の勸懲をさへに效能をさやと疑ふものあり否小說ゐ罵り譏して誨淫等欲といふ者ゐ利爲ゟ一言とこゝゟ贅して勸懲作者の寃をもときあとせて勸懲の益あるよしをばいさゝう說明おさまくほりば凡事物と批判ばるにゐまづ其事物を辭劍して其結構をも知りたる上にてさて評判を下しつべーさらぬば馬を評せんとやりしま鹿を評するの謬あるべし馬と鹿とゐ其形相似たり故ゟまづよく馬をしりてゟゟして評判をえとめぬもあらば其形の似さるをもて鹿をば馬とあやまり認めて鹿を評して馬に及ぞし馬ゐ深山にすめるものゟを邇身ゟ斑点ありといむなば人々ゟゟらず嘲笑ひて是馬とのみ見あやまりてシカと見とめぬ謬誤をりあな馬鹿らしゝと勤掲めくべし小說と評するゟもまづそのごとくいうなるものが小說ゟるか試むとめゟ會得をばことをうしして妄ゟ批評を下さまくせば小說ゐ似て小說ならざる所謂奇異譚(羅マンス)の類を評し

も正すことを得ぎみづから辛苦を經驗してえずめて悟ぎ啓くの徒なりかゝれはかや
うの徒に讀まれて不當の非評をうけなむこといたき小說の冤罪にて小說作者の迷惑
なりかゝ金瓶梅が金瓶梅の卷初にいへらく此書をよみて人よこしまなる念をいだか
ば罪其人の心にありて此書の罪にはあらぎといひなりこはまたいさき無理なれども
若しこの語は眞正なる小說の場合にあてえめなば至當の批評といふべきなり論ずて
こゝに到りし序に一言いひおくべき事こそあれ其事は餘の義にあらねど西洋にても
東洋にても小說を玩具のやうにこゝろえまだ嫩若き童男童女に與へて讀ましむる風
慣ありこはいと危險なる習慣といふべし總ずて幼少なる時に於ては感能もつとも敏
なるから外部の刺戟を感ぎること大人にもましていと銳し故に小說はいふに及ばぎ
をべて人心に甚しき刺戟感觸をば與ふる物をば近づけざるをもて可とするなり美術
は玩具に相違なれど大人學士の玩具なるからよし危殆すべき理由はなくとも兒童
の玩具に供へんこと已に其理に戾るといふべし。
小說を誹する者またいへらく小說に寓ほる勸懲の意のごときは士君子はもとより之
を悟れり豈小說は讀て後に之をうとるが如きことあらんやさあれば小說の寓意なる

ても小說稗史に刺戟せらきて道ならぬ戀に迷ひそめたる童男童女もありしと聞にき
かくても誨淫導欲ならずや其理をきうむと罵るべしおのれ即ち答へていへらくげに
小說は情を主として其脚色をばまうくるものゆゑ男をなごの情話のごときはもつと
も必須の材料なりうし蓋し情欲多々きども愛憐といふ情合ゆゑ重なるものはあらざ
きばなりされば眞正の小說にも主として男女の相思をとけども彼の爲永派の作者の
如く無いふ可らざる隱微を穿ちて卑猥の狀をば寫さんとはせぎたゞ人情の秘蘊はあ
ばきて心理學者がときもらせる心理を仔細に見えしむるのみされば此等の稗史と聞
して邪淫の心を起せるもの若くは惡意を萌せる者は其罪おのれが心にありて稗史の
與るところにあらぎ小說はもと世態をば寫しいだせるものにしあきば讀者にして活
眼ありなば書中に敍したる所によりて反省をべきが當然なり譬ば他人のなりふりは
見て我なりふりを正さんとほるは有識の人の常なるをやもし久松がお染を將て出奔
なしたる條下とよみてこを艶羨ほる傾ありなむよし小說を讀まざるとも早晩其念起
りつべし譬ば東隣に娘子ありて其情人と出奔なしなむたちまち之に刺戟せられてま
きまた西隣の乙女を將て共にえしらむと企つべし此種の人は他の風は見て我風をし

と某の信義をもてすらこのことありおのれの如きわろいること常に多し世人のこゝを感ぜぬものは小說に勸懲の徳おきふあらで讀者を讀書の眼なきのみされば小說の勸懲をもて特に衆昧の徒の爲ふせるえのありといふが如きは此間に行なるゝ艸冊子を讀たるものゝ言なり所謂羅マンス(奇異譚)の評あり笑ふべく駁するふあたらぞうく辨をるわなり〳〵に大人氣なしとやいこるべからん。

さてまた婦女兒童の翠ふいたりてわ元來雅樂淺學なるゆゑ脚色を讀むのみ寄意おどわ決して得知るまじき道理をともさわとて善惡美醜の辨別些少もなしといひ難かり奬誡主眼の小說をばまば〳〵通讀をすま及ばゝ勸懲の意わあらず〳〵其心肝に銘徹ーま幾分か刺擊ほる由ありて其行爲ふ影響あらんわ疑ふべうもあらざるなり唯その影響の力異眼の讀者ま及るものゝ比ほれば弱ゝ是小說の毒ら婦女兒童の爲ませざる所以なりかし叔又夜遊遊惰の徒の小說を讀むわ實ま排悶の爲ふるべくまば寄意なんどを管せざるわもと其筈の事といふべしさわあれ些少ばゝりふても廉恥の心あるゝゝよしや小說の寄意を知得てたゞちふ悔悟慚羞して其行と改むるまわ至らぞとも誹刺されてこゝろよゝと思ふ者わ稀なるべしゝれはのゝる徒に於るも尚奬

者わ婦女稚童のためにまうけさるものふあらざまば遊惰放遊毎日をくらせる凡庸の徒のためふせしからん實にまからば小說わ勸懲ま裨益する所ふゝるべし何とふまば婦女稚童わ衆昧ふてもとより事理ふくらさものなり小說を讀みて其脚色の奇ふるを善ぶべしといへどもいふてう寄意をさとり得べきまた遊惰放遊の徒の小說を讀むわ偏に賢夢排悶の媒分となさむが爲のみ堂善惡醜美の差別などに眼を注ぐことあらんとおのまふたゝび答へていへらく若そま人生きて心ざまたゞしき父母の教育をかけ生長りて善惡の心あを廉耻の念と抱くものわ誡めをゝて惡を避け勸めをゝて善に趣うむわきることなれども尚時とゝてわまらをゝ〳〵面正ゝからぬことと仗おそことありこまゝらわもとよゝ不誼と譏り惡と罵るわどにわあらざめまともし公然お世ふ知れをばかならを嘲笑の種ともなるべゝ勸懲小說の完全なるものわかゝる些細の事といへどゝ淺さて懲誡ふほこまるゝら道義を口ふするものといへどゝ之れを讀むふいたりてわ時みうら恥かゝう思ふことなきふゝもあらをおのれが友人某わ東京の人なり學わ和漢洋ふ渉りて心ざまいと正ゝく最も俠氣あるをゝて人ま縛せろる然れとも尚書ておのれまいへらく僕八丈傳を讀て丈士の交際を見て物に恥るところなきを得ぞ

これ訓誡の一端なるべし世上の小説讀者ゆしてもし此訓誡の所在を知得て其真味をしも味ひ得なゞさてこそえゞめて小説稗史の真成の効能をえ覺得べく且は快樂の果實をしも摘得たりといふべきなれしかるに世間の小説讀者は此道理を知らぬもの多くひたすら趣向脚色のミを讀てもて娯樂の果實ゝしも已ゆ得たりと思ふは違へりさるは快樂の花を觀しのみ果實を得さるゆあらざるをや云々といへり實に活眼の議論ゆしてよく小説に寓しつべき勸懲の質を明らめたる新説なりとも稱へつべし勸懲の裨益につきてはなわいふべき事はくなゆらねどくだ〳〵しきまゝ此處ゆは略きてまた後回に折を得ぬは更に説のぶべき由あるべし。

（第三）正史の補遺となる事

補遺とは何ぞや曰く正史に漏たる事蹟を補ひ正史には細述せざる當時の風俗習慣などを見るが如く描くるが如くいと精密に寫しいだして一部の風俗史をなすことをいふなりさきに此裨益はひとり時代物語（過去小説）を專占するところにして餘の小説にはこの事なしさはあれ世話の小説といへども後世の人より之を見れば過去小説に外ならざれば何をかしてえ小説には此裨益あるは爭ふべからず（譬ば式部がもの

誡の意は通ぜりたゞちに奬善の媒とはならずとも暗に良心を喚起するの方便とはなるべし良心數々喚起されて終に情欲を壓するにいさらば悔悟改心の道を開かん歟これもまた知るべからず兎にも角にも小説に勸懲の力なしといふは違へりしらずおのれの説うへりて牽強なるのも。

西洋の博識なるゞし嘗ていへらく小説ゆ警鬱排悶の裨益あるは皆人のしりたることなれどもこのほかに灼然なる實益あると知りさるは稀之小説は訓誡の種となるべきものを夥多納めさる寶藏なり閭屋なり人ひとさび其扉を開らば益を得ること蓋し小少のことにはあらず訓誡といへば一向に仁義道德の主義を奉ぐて人の行狀の曲直正邪ゝ評判せるものとのミ思ふもあらんが予がいふ訓誡はこれに異なりげにや道德の主義の如きは人生必須の規律にして定に大切なる標準にしあれど予のいふ訓誡は區域ひろくてたゞさるおとをのみいふにあらずたとへ道德の區域を離れたるものといへども苟にも人間ゝ警誡して其内外の体裁をば改良はるの力ありなば總ぐてこれらを通稱して訓誡なりといふなりなり譬ば人間に諸禮法を教ふるえ機智頓才を磨らしむるも人情の何たるを悟らしむるもまた情欲の千万無量なると知らしむるも皆

處彌ルラルもまたいへらく夫正史といへるものは其体裁嚴格にして名稱年月いと精細に事實もきためて委しけれども當時の人情風俗なんどは僅に一斑の皮相のみを寫して其真像と寫すを得ず稗史物語の人物事蹟は作者の意匠になれるをえてあさかも戯作の如くなれども話譚に陰陽表裏あるから却て人情風俗をば寫しいだすに便多くて當時の世態の寫真鏡と稱しつべきものいと多かり歴史を學むむと思へる輩もし我曾祖父の時代の景情を審に知らむと欲するならば彼の「ドヅレイ」の年報を繙きて徒に時日を費すは詮なきことなり寧季チヤアドソン幷に非イルヂングの稗史をよむべし其得るところ果して小少ならざるべし「ホウム」はしたしく一千七百四十五年の逆亂にたちまぐりておのが目擊したるごとく傳聞なしたることをあらはせて一部の大歴史と綴りたりしがそれだに彼の數コツトの「ウエイバリイ」物語にのぶる所のものに比するときは當時の情態がうつさゞることいと多かり云々といへり

薩カレイ英國の小說家もまたいへらく予は稗說をよみて得る所きためて多し當時の世界の景情とし時勢を知り風俗をしり衣裳の流行を知り快樂滑稽遊戯の類の現世とおとなる所以をしる已に死去りさる人も再びよミがへり已に往たる世も再びかへりさな

さりし源氏の君の物語は全く世話の小說なれども後世の人これによりて當時の風俗習慣をさぐり事物の起原を知るがごとし）　かゝれば小說の作者たるものは力えて人情が穿つかたえら亦風俗にも眼を注ぎて苟にも妄誕無稽に類はる時代ちがひの形容なんど描きいだはまじ事なりかし此裨益のことにつきては西洋の博識のいえれさりしおといと尠からねばおのれが言葉をもてあげつろえんよりは寧そと二ツ三ツこゝに掲げてもて此益ある徵証となはべし。

英國の小說大家蘇ル歐タル數コツト翁いへらく時代物語は二種の讀者に益するものなり第一種乃讀者は假空の時代物語をよミてえじめて歴史のおもしろきものなる由を覺えて自然に小說の本據をなしさる正史の事實をしらまくほすして更に稗說が擲ちさり正史がよまむことに心を傾くるもの是なり第二種は讀者は快樂の爲にあらざれば書を繙くことを好まず既往に何等の事柄ありしかもしらずたゞ現今の世の事情のみを知来りしも時代物語を讀むに及びてえじめて歴史の大略をしるに至りしもの（よしや其知識は歴史の一班を窺ふにしえ足らずとするもなほ本来虚空なるものにはまはべし）是なりといへり。

終始一樣感情苦境を叙したる文句も冗しき思をのべたる文句も其質まったくおおむうして毫末も差別のあることなくんば其情おのづから移らざるべし譬ばこゝに大に悲しめる折ふしの用ふる言語は簡略まて且おびたゞしく怒りし折もく〳〵大に怒りし折ふしの用ふる言語は簡略まて且おびたゞしく華言を吐くなり華言とは何ぞ曰く擬詞の事なり擬詞といへるものは西洋まてにて「フヒガル、オフ、スピイチ」と稱して文章の飾ともなり省略の一方ともなるえのなり其一例を擧あげていはゞ人を罵る折のごときをば「人でなし」といふべきをば「畜生」といひ牛馬といふは是其人の羞恥おそれをば厭ふ比しさる擬言にしていはゆる華言といふものありもし平常の折柄ありせば「其方は義理をもらぬ奴てあるぞ」といと長やかにいふべきあまたゞも激しく怒りし時ゆゑありていふこゝろもまさ整えれば自然と言語も簡略ふてたゞ「畜生」とか「人非人」とう一二言丈のみ發言して餘は思入れと身振丈もて意のある所をあらはすことは世の人のよく知る事ゆゑにされども世間の事に老ひてせの人情を知らざるのぎりは此道理を知易からねば彼の幼稚なる操觚者流はすこふる文を長くするがらもなきかつ緩の文をものして人丈感ぜしむることは能もせむおしく死文を綴りいたして我思ふ由の一斑とは

がら往昔の英吉利國にふたゝび旅をするの思ありき嗚呼大華の正史にして此餘ある益をる所ありや云々といへり

此他正史小說の裨益をとくもの尚かつあまたありといへども要をるに大同小異まし之を風俗史視をるに外ならざれはこゝに繁辭を厭ひて省きつ後に正史物語を論をるにいさゝかして更に說のざるみとあるべし

（第四）文學の師表となる事

師表の裨益とは小說の文章上の裨益なり小說の大華なるものは特りその趣向の奇ましして巧なるのみならず其文もまた絶妙なりて句々錦繡なるがゆゑ文を學ぶものゝ爲に益となること勸からを源語水滸を見ても思ふべし夫文章といへるものゝ思想を表示するの機械なるのら激越なる思想丈表示せんと思へる折にはおのづから激越なる文章を用ひざるべからを優雅なる思想をいひ表さんと欲するときはまたおのづから優雅なる文章を用ひざるべからをあるひは簡短なる文章を要をる場合もあれはあるひは長やかに說のざる場合もあるべし機に臨み變に應じて簡繁強弱宜敷其宜しきを得たらんえの之と巧妙の文ともいふべしもしまたらずして

錬るべきなり一二百年のむかしにありてはたゞ一種文に妙を得ればそれにて足りたることなりしが文化駸々日々に進みてなふこのごろの世界となりてはいふべき事も筆をべきことも極めて多端となりにたまは政事の論難評議にざに記事体の文を要することありまた歴史文を要することあり彼の婆ルク氏が議事院にて平スチング氏を彈せし折に記事文体の演説もて滿院の士を感ぜしめしは人のよく知る所なりかし

しからば如何なる文章をもて師表となしたらば可ならんやと問ふに千變万化極りなき美妙巧緻の好文章は希世の大家の手になりたる小説の文に越えたるものなし蓋し小説といへるものは千變万化の世態を描寫し千變万化の情趣を寫して毫末遺漏なからむことをば其務とはなすものなるから富麗の文あり豪宕の文ありあるひは悲壮潸漓たるありあるひは優婉閑雅なるあり来歴を叙する折には歴史体の文を用ひ景況を語るときには記事体の文を用ふ問答の文あれば論難の文あり詼諧の文あれば嚴格の文あり奮激せる者の思想をいひあらはすには之を適しつべき活潑なる言語を用ひ愁傷せる者の感情をいひあらはすには之にうなひつべき悲しげなる言語を用ふ之を要するを文と情と適應するをば主となすから求めざれども其文体千變万化極りなから

漸く表示なすこと多かり是しかしながら如何なる折には如何なる性質の文を要するや何等の思想を表はすには何等の文体が宜しきやを會得せざるに因ることにて即ち思想の文章に適應せざるにもとづくものなりさはとて人の感情思想はもとより千差万別なるから一々之に適しつべき文をなすこと極めて難かり希有なる英才にあらざる限は箇様々々の感情思想は箇様々々の文もてあらはしまた云々の趣には云々の語を用ふべしと學ばで知るべきえうなければ必ず模範を要するなるべししからば如何なる文章をばまづその模範となすべきやと問はんに先進大家がものしたりし論文のみを模範とせばさゞいたづらに理屈に偏して文章淡泊にすぐるの患ありさはとて記事の文のみ學べばまたおのづから緻密を失して活動の妙を損ふことあり問答文のみを學べば記事に妙ならず歴史文のみを模範とすれば論評の文をものしがたし蓋し一方に偏すればなるべし千變万化の文体を用ひて千變万化の思を吐くもの之を完全の才筆といふと士ペンサアの翁はいはれきたゞ一種文に偏するものは（よしや其種の文は巧なりとも）完全の文章家といふべからずかりにも文壇の大家たらまくありする筆は千變万化極なき美妙巧緻の文章をもて其模範となし師表となしもて其文を

種々うゝきはおのきは實際なる經驗にはいと乏しけれども多年古今の稗史を閲して理論上にて得たりしところ頗る些少にあらずと思へばかりに一篇の小說法則の論を綴りてこを下卷にて陳述なし世の參考に供へまくほりほをこがましとのミ笑ひたまえで熟讀翫味せられもせば小說といふ一大美術の至難技たるをば知らるゝのみかは我艸冊子の久しからで眞成の小說稗史となるべき道をひらかん便機となるべしあなかしこあなうしこ

小說神髓上卷終

ん是小說の文章家の師表となるべき所以なりうし此論いまだ盡さゞきどもあまりに冗長に渉きるまゝしむらく筆をこゝに閣きまた折を得て說繼ぐべし（下卷の文体論とあれせ見るべし）

上にのべたる議論はすべて完全なる小說につきていへることなり此間に行えるゝ艸冊子のたぐひを論ぜしにはあらず看官誤りしたゝめて疑團な抱くなかれ

若夫小說にして實にうくのごとき裨益ありなば是が未熟なる小說稗史を次第に修正改良して彼の泰西のものにも駕すべき完全無缺のものとなして國家の花と稱へつべき一大美術となさゞることは是が大なる懈怠ならずやさはとてこれをなさまくせばまづ先進の得たりし所以また失したりし理を察し同轍の過失に墜らざらんことをつとめ其長じさりし妙處を採りていよ〳〵之を發揚なし完全無缺の好稗史を編むべき手段を定めずもあらばわが東洋の小說稗史は幾星霜を經るといへども依然羅マンスの地位にありて進歩なすべき機なあらむおのれは學窓を退きてより日なほきえめて淺

小說神髓 下卷

河本

河本文庫

小說神髓下卷

目次

小說法則總論
小說と法則の必要なる所以
雅文体の得失
俗文体の得失
雅俗折衷文体の得失
小說脚色乃法則
快活小說と悲哀小說との辨別
脚色の十一辨
時代物語の脚色
正史と時代物語との差別
時代物語を編述する者乃心得
主人公乃設置

主人公の性質
主人公の設法に二派ある事
叙事法
叙事に陰陽の二法ある事

小説神髄下巻目次畢

小説神髄下巻

小説法則総論

文学士　坪内逍遙　述

若夫春去り夏来て秋と更り冬を迎ふるは四時の法度あり日暮逢夜継ぐは一日の則あり宇宙間の森羅萬象一として夫れの法度を有せざるはなし天工の事物すら尚ほかかり況や人為の物をやなどて法度なからざるべきやよしや小技末術なりともまつたく法なく則なうしておきを成すことは難かるべし絵画に画法あり音楽に音律あり詩歌といひ踊舞といひみなそれぞれに規矩をそなへて後進子弟を導くべき便利を図るの事あるからには我小説にもこれにひとしき規矩法則のなからずやは是予が此論ある所以なりけり

世には小説稗史をただ何ひとつの法則もなく規矩もなく作者が意匠の成し遂るままに孟浪漫筆の筆を下して書綴りたる物語と思ひあやまてるものからもあらめどそは浅見の惑にして稗史の性質の何たるをば会得せざるに因ることなり夫れ小説は尋常なる伝記

て妙辭となし難ゐて小說牌史と作る者もまさしの心得あるべきなり
小說の手段は猶庖人の料理鹽梅のごとし羹といひ炙物といひ鱠といひ鹽といひ料理
に關する慣習ありて苟にも庖人となりたるからには其方法をとり用ひて料理となさ
むは勿論なれどもさゝ味ざに美さからば炙魚とまゝめつべき順序となりさる機に於
ても生魚とまゝめて妙なるべくあるは鱠となすべき魚とは新工風をもて鹽魚としあ
るは羹にしてまゝむべきものをば炙魚となすなんども敢て苦しからぬ事なるのみあ
るへてで面白き料理といえなむ味は主なり鹽梅は從なり味を旨くするの方法なり從
と先にして主と後にすべき道理はなしおゝともて機智頓才ある庖人は時に巧妙の庖
丁と下して意表にいづる鹽梅をなすことあり小說の秘訣もまさ之にひとしく讀者を
感動せしむるは主なり法則と設々て物語を結構するは讀者を倦まざらしめむがさめ
なり讀者の感心を得むがさめなて故に法則は從なて方法なて方法は須らく臨機應變
なるべし千古不拔なる法則も無きにはあらねど悉く確定しさるものと見做すは違へ
て讀者の心と感動する力あるべしとざに思ひ得さらば機に臨み變に應じて斟酌折衷
の手段と施すべきは勿論なりこれらは作者の機轉にして俗にいえゆる「ハタラキ」な

實錄のたぐひに異なり人物といひ事蹟といひ悉皆作者の想像もて假作りいざせる虛
空のものにて根も據憑もあるべきならねばのくらのはじめに土臺をまうけてさて構
造に着手せざれば前後錯亂事序繽紛精麤當らず緩急度なくよしや小說の目的たる人
情世態は寫しいだして其眞髓に入るよしありとも脚色繁雜しなれば讀むに煩はしく
布置法宜しきを得ざるときには奇しき詬譚もあぢたひ薄のり讀者もかゝる物語は中
道にして讀むに倦みていまざ佳境に入らざるまへに全く卷を擲拋べし故に小說と綴
做すは猶一大文章とものするがごとし結構布置の法なかるべからず起伏開合の則な
かるべからず趣向に波瀾あり頓挫あて記事に精疎あり繁簡ありかつまた摸寫する情
態にも斟酌の法存すればこうよく讀む人を感動して音樂詩歌にも恥ざるべき美術乃
譽を得ることなきさはあれあながち法則にのみ拘泥して彼の工が規矩準繩もてもの
するごとくにしひて意を枉げ筆を矯めて脚色と結構なさまくせば世の人情と風俗と
は自在に寫しいざすと得ずよし幸に情態をば限なく寫し得さればとて全篇活動の神
に乏しくいと味なきものともなるべし譬ば文章と作るに當りてしひて抑揚頓挫と試
み故意と照應波瀾と設々てひさまら規律にしさがふとば其目的となすときには決し

りひとり小說のみおおらず總て文學お遊藝ものの此心ど存て筆をとらざるべからず此用心お怠りき輩ハ全篇からむことを欲ねこゝづらら欠き活きまく欲しくみづらら妖を惜むべきかお

總て法則といふ者ハ俗にいふ忠告と同種のものおりと思ひそ可あり忠告ハいまだ事に着手せざる前にありてこそ用をもおせ已に事に着手しく後に一あかしてハ惡し斯く〳〵せよ〳〵といえれおば既令失策せべき所とそれがために助かりにもせよ其事の所置ふり阿どやらお不手際にお成切りし後にてもいど醜き屢多かるべし法則も又そのごとくにおまた趣向と搆べさるまべハ充分それを細膩にて會得につくもと終要とももにおかりむむで規矩の長短と度るごとく一毫四規律に拘泥と其物語を綴ることもでき如何の模型の俄にお作て見るまさへさるものともある老練の作者ハ期せむしく功と奏まることあれども稚心ら作者ハ期ごく功と奏せざることといと多かり思にさるべかお定さるおり

下ハ述ぶべき數ヶ條ハ總て小說の名ある法則とにいふものおかず其實啻髣髴の議論ましてをどより周全おるも乃ら組が言ひもらーさるも盡さざるを極めを多かるべき事ありかあ

文體論

文ハ思想お載むまさ粧飾むり小說と編むまハ最も等閑ともべらうさるもらをり

珠ハ純宝博奇のさいひハ其人乞乃うまれ得たる才の多少と優劣とによりて重ハ巧拙を生ぜるえのゆる天賦乃才をざ入ふおりくハ最百千乃法則をハ限おく諳ハ得たれハ

とて毫も法則規律と知らさる自然乃才子ハ矛りつべーむお一馬拳ヶ京傳翁乃門を叩きて戯作お學ばむと乞ひさりしお識遂ハ師傳乃教ふおあらすと翁がいろひく其乞をば退けさりしむ宜おるおお故よ小說乃法則おんどハ所謂以心傳心おと得ていふヶさき物多かりおるとをひとおあらきまハ法則とハ名と設々と此ハ論辨もる所以乃もの乃に我茂識おる小說者流ハ小說といお一大美術乃其目的乃ある所と殘る限おく知ろせんと反老婆心切ねいでさる事おてやしそ以心傳心おな真の法度を語るハあらねべ世乃賢明なる博識さち妄ご法則の二字ととべでもあれ度不明とハ咎めた性ひを且ハ下像ご速ふおとこ後ねおほむねれろれが管見まくあるひハ非なるもらも多らるべー識者もー嘲嘘乃唇ご藉たご一言一字乃師とをもれもせべ定ご編者乃本意ごー幸ごよなうも侍ごむう

ほ數々として氣力み乏しき風ともまるゝ柳乃ごとしとやいふべからん之と人またとふれば稍玉簾乃うちふありて病ふおやめる上臈乃ごとしされば此質乃文章ハ特りうち見し所乃幽艶なるのミおゐあらで其音調も長閑ふして且おのづから古雅なるものから激切乃感情豪放の擧動。もしくハ跌宕ある情況おんどを寫しいだすふ適ハぬ由あり況んや殺伐の景情おんど狀此優柔ある文体もく描きいだすハ極く難かりれよそ小說といへる者ハ宇宙ふ森羅星列せる無數無量の現象より彼乃百八乃煩惱まで今まで乃あたり眼とも〻見るが如く一盡さいだし〻之を讀者お見にしむるを其本分とおすものゆゑ其盡くべき事物乃中ふハ優柔閑雅なるものゑあるべく激昂痛快なるもの乃もあるべく悲涼沈痛なるものもあるべく葬厭絶倒すべきもの乃もあるべし若し小說乃作者ふして唯優柔なる條と乃み巧ふ寫しいだすと雖も他乃痛快なる條と寫すふ其筆至らぬ所ありおハ可惜妙趣乃卿色まで爲ふ盡ふことあるべし跌宕（又アリミチイ）と富麗（美ウチイ）と哀情（波ソス）と清雅（璃ヂクラス子ツス）とハ所謂華文の屬性まて殊ふ小說乃文章ふハ離るべからざるもの也あるゆゑ此四箇乃唯一をさへ缺之おしたるも乃をらむおハよしや其他の場合ふ於〻ハ如何なる妙用ありといふともこを完全なる

卿色いふほどふ巧妙をりとも文おきをなれハ情通ぜも文字如意ならねハ摸寫も如意ふもろ〻たゝ文體ハ一定おり様ふ要をまた雅と俗と雅俗折衷の三體ふ外ふハあらず詳細おることハ迷を後日乃論おかざりふ此ふハ三體の優劣お辨ぜる讀者の參考ふ供をべし。

我國乃小說文體の事ふつきく〻れのれ尚弊ふ論おれどもあまりふ冗長ふ渉ると恐れ〻ここふハ全く略さされども後日神髓乃拾遺ふ於〻ハ更ふ文體ハ變遷より其改良をも論ずべし。

（第壹）雅文體

雅文体ハもなむち優志おゐ其質優柔ふして閑雅なれハ曉曲富麗花文とおもおハれずいかゞ適ひさりといへども惜いかな活潑豪宕ハ氣おゐ一物ふさゝへ〻之を缺それハおも

さまざまの雅文體もてうつしいだしたるもあれど中にも馬琴畸人ぞ此の景況おもひ遣夜鷹の情態をなんどゝ殊に眼前に見るごとくちかせらるゝにあれ其主意の部びたるより其文のいさゝか雅びされバさゞ何となく北と彼を相通ハさる心地せられてうち含笑まるゝこと多かり物あらがひおどする條も其言までふる優長あるから所謂江戸ツ子乃氣象より多しく上方あさり乃人とも思ハるゝ是あるしおがら俚文ともて活潑磊砢のありさまを寫しいだすゆゑ一乃証といふべきあり

又云戯學三馬おどが滑稽物の地乃文ぞハ時ゆ雅文體おてものせしことゝあり今一例をおこゝおあげで讀者乃參考お供すべし

春ハあをぼのやう〳〵白くありやく。あらひ粉ふふるとしの顔をおらふ。初湯乃けぶりほそくたゞよひさたる女湯のありさま。いかで見ん物ととて。松乃内早仕舞ちう札がけたる格子のもとゝふたゝすみ障子乃ひまよりかいまみるゆそのさまたかゝくもあり又お乃が身乃ぶさめいたるゝあさましくもありけり白き物ハはつ湯乃三方とかいふめるもの乃ハづけとやらんもうべ

る文体とハ決しゝ稱ゆがたきことなりうし按ずるお我國ふハ遠く上つ世乃比よりして文武乃官ゆ差別ありゝ文學ハ專ら文弱なる大宮人の手ふのみなりゝらふ文章ひさぶるふ閨雅ゆ流れて自然ゆ活潑豪放なる質ゆハ乏ゝくなり行きゝ敷殊ゆハ後世俚文學の師表と仰げる書籍類ハ概ね藤氏が攝政せゝ文弱淫靡の中古の世ゆ婦人なんどの手ふなりさる閨畧の著述ゆ外をらねバ其文章乃氣力なきもまさ怪むふハたらざるなり紫式部が俚文をもゝ源氏物語をのぞきあらハ十名を後世ふ垂たりしハ惜文ともふ至妙ふゝゝゝ相適ひゝゆ因るもあらうまた遜いゝゝ考ふれバ其文乃質願るよく時世乃質ふも適へバなり夫れ小説乃文乃體ハもとより千古不抜をらず風俗人情進化すれバ其進化せゝ度ふ應ゝゝいくらか改良せざるべからを言語習慣變化すれバ其變化せゝ度ゆゝたがひ多少齟齬折衷ゝゝを更ゆ一機軸とハざさをる可からを蓋ゝ小説といへるもの乃ハ時世々々の人情世態と寫すを骨髓とをせバなり〻〻俚令紫女乃大筆をもゝするといふとも我文明乃情態をハ發乃詭粹をる俚文をもゝ寫しいだすハかさかるべゝ左乃拔文を見て其一班と窺ふべゝ

因云 六樹園乃大人乃あらはされゝ都乃手振といへる書ハ大江戸乃市衙乃

東京 晴美堂 藏版

る文字を書つゞれば本高尚の題目を論ずるまでもなく俚俗なる言語を以て生ぜざる文作者あらざれば此意をさとりて此ま雅文体を用ひまもの歟華竟をも雅文体の性質を帯ざる者のゆゑ目下の世況を寫もいざもまゝ適當ありさるも為とも思はゞ若まあるまゝ此体もて上下貴賤の差別もなく我開明ま趣きさる世の情態を見るが如く描きいでまく企てあればさゝ徒ら笑を促ドむるまゝく滑稽の著述ともく人ま見らるゝ歟あるべし

されば滑稽の作まあらざる小説の文章ま此雅文體を用ふるときまは二箇の条件を具するあうまはあるを衆衣活潑の趣ま免れき事一ともはは滑稽小説華ま類似る事是あり

（源氏物語若紫の巻）紫のまだいとけなくてはせもと乃源氏の君のとび巻ませ一條

○（紫詞）お納言よ小納言の乳母あり若紫あれま褒さまゆうんゝゆづら宮宮の父君は在をるかとてまもれはーさる御ところゆと可愛ー（源詞）宮ま〻あうねど又れもほーはまつゞうもあうま此處と宣さまふを差ゐーうう人ときをお聞おーて

東京 晴美堂 藏版

おり御祝儀乃十二銅男衆へ乃水引色に二ツ乃三方ようゞ高うーて雪消にぬ富士と筑波をあらそへりそも〳〵こゝまゝ神代のありさまとぞうつーたりけむ注連繩ひきわさせる梅ロ乃後ま〻神葉あらぬ松真木もて風呂たく男乃庭火燃すおりて湯波場乃天岩戸ときとひらきてより常闇ま〻がへは朝湯乃湯氣にやゝはれわたり人々乃面白やといふころほひ髪のかざトもすゝしうすゞの命めきたる娘女の指の爪ま糸道てふ物の殘れるねせまいふ舞子白拍子のたゞびとにほゝ彼太政入道と乃ミせまめてたくれねさばあそびの者乃推參ねどのつねの事まきふらぶおといふて見參まをすべきくせもろまこゝ云ゞ（浮世風呂）

右ねもとより純粹あ雅文体まねあらされどもまだゞて我いわゆる雅俗折衷乃文体まも相襲なりたるも乃どもいふべー想ふま作者が地乃文とは此文体をてもて乃せトてゞ筆し故ありし事ぞと思ねば總にて滑稽といへ物ものゝ尊ゞ文字上ばり論ずばときおねゝ詞乃品位の其注意の品位ま遜せざばときゝま生をるものまて語どかへてゞといへゞ部屬の事物を寫ばいたまいと嚴な

れるも似たるもれあり殊も時代物の小說ゐ此文體と用ふることきはめて不便れ際ゐて且不都合おることといふべーたゞ彼の當世の物語（世話物語）と此文體もて綴りおさゞ情文双ながら相適ひてをこぶる猪妙おるべきれどそれだゐ幾分か斟酌ーて折衷せされゞ叶ひがたー彼れ爲永派れ作者といへどもやゝ嚴格おる條ゐいたれゞ間々演劇れ臺詞めきれる詞といくらゐ假用ひて俗談ともていひ得がたき不便れ條と補ひーね讀む人もまた知ることおるらん曲亭馬琴かつていへらく

唐山ゐて俗語をもて綴れる書ゐ正文あり方言ありゐみらされゞ用とおさゞ又備書方書佛教ね正文おるべきものおれどもなが中ゐ俗語おるね二程全書朱子語類俗語ともて綴りーね寄功新事傷寒條辨盡堂錄元明戯の類ゐほあるべー先輩已ここれ辨ありかゐれゞ彼が文華おるも言魂の資を俺されゐ文を成をー如意おるまた知やまた皇國の文章ね和漢雅俗今古の差別ありきるとや文場ゐ遊ぶもの孰ゐよく貫通せんいと難ーともかたからまや想ふおいまにべの艸子物語伴取宇通保源氏物語おども作者つとめて其詞とあゝやり撰みて綴れるゐねあらさるべー必是當時大宮人のつねのことゞ方言さへそがまゝお繋さめれど古語ねれのづ

第二章 俗文體

俗文体ね通俗の言語ともてそのまゝ文をまーたるもりあり故ー文字れ意味平易まーて愛玩解ーやもき方感おるなゐゐ外ー活動れおおゐ此ー所謂筆寫ゐ亟要おる簡易れ品格眼智の品格にいへべきらあり俊拔雄健おる勢力あり追懷愛慕の相念とも惹起ーつゝき品格おり加ー賜とれでね文字の音調氣韻と共ー願る情趣ー適應ーでよく心底の感激まゐ表ーゆたもまゐ物事ゐもおも此ー書面表面の諸國にいふもさもありう漢土も遜き書小說おれ地れ文章と殿ねれ名界になるべー通俗れ語と用ひさ事物れ形容をも記述れ際ねりて俗文体の枠ゐて綴ーれと雖ねいへども特りいかゐせん我國ーは（文字一連ーでもさるかゐ文章上綴ーて用ふる話語平談俗語ゐ用ふる言語とさおがら和漢の相違ゐ見きおゐ易ゐお俗話のお文とをときれあるひね音調の体例ゐ失ーあるばね漢籍の譬ゐお知ーていふ雅馴たる趣向きべお磨ひおひたるものとまゐを僅額の錢を得るごと多ゐ日面の國ぐとにことおばりて言語の變遷ねぼーきのみおおゐ數百里ゐ隔れにゞ其方話ね異なるごと彼の英佛の國語の樣異な

から鄙俗ならず且宮壇の詞ぶれ雅俗うちまかしてなるもあれど才子末摘は其品殊にて且能文の所爲なれバ後世和文の山手たりかゝれバ昔の艸子物語は此にも俗語もて綴れるを思ふべし和漢その文異なれども情態をよくうつし得て其趣を盡せる者俗語ならざれバ成をおと難かる彼我おなじく一揆なりきをバとて今此間の俚言俗語の轉訛侏離の甚しきをそがまゝに文になすべからず余が駁雜の文あるはこの侏離鄙俗を遁さんとてなり云々

俗言の不便多かる實に馬琴翁の言のごとしこれのきまに在ても此議論を贊成せざるを得ざるもなからなほ幾分か此議論と相徑庭する由なきにもあらねバいさゝか持論を陳述して更に俗文を論明すべし

夫れ小説は情態をうつすをもて其骨髓となすものなり故に下流の情態を寫しいださまくほりするときには其人物の言語なんどは鄙俚猥俗なる言語なるはもとより旣きがさきことなりかし其趣をば盡しがたからバよし其言語は鄙俚なりとも是なら〳〵に下流社會のまことの景狀にはあらざるべし此故をもて俗言をば我小説に用ひがたき文句ありとはいふ可らずヂケンス翁の小説ならびにフヒイルヂング翁の稗史などには

隨分むさきだしき俚言なんどいへども多く用ひたれども其故をもてヂッケンスなど譏りて醇ならずといはゞ亦不翁をも罵るものなし不翁の著作は鄙猥なりとて排斥をるものは多々あれどもそれは其趣向の猥褻とて擯斥するよりいでしものにて文章の上をいふにはあらずかゝれバ轉訛の方言なりとも侏離はたゞしき俚語なりとも其機くに相應して用ふれバ敢て妨なくかへりて趣深かるべしさはあれ我國の俗談平話は發角にて冗長に失する弊ありならびに語法に定律なく且音調の美ならざるがゆゑに叙文(事物の歴由を叙する文章をいふ)ならびに記文(事物の形狀性質等を記するもの)等には用ひて妙ならざるところ多かり甚しく其冗長に失する所以は我本來の優柔なる俗言彙に因るなるべく其用語法に定律なく且音調の美ならざるは和漢の言語轉訛の方言相混じたるに基くなるべし加之俗談には語法に三段の區別ありて上流の人に對する言語と同等の人に對する言語と下流の人に對する言語とその〳〵著明しき相違ありて彼の西洋の國語と異なり而して同等以下の人に對する言語のごときはおほく過去と現在と未來の區別のなきものあり譬へバ「更に行衛のしらざりけれバ」といふ叙事体の文をものするときにも「更に行衛が知れぬから」ともいひ得

り義理ある父と忠太夫にせめそ一筆かきろおさんと硯ひきよせ摺ながを墨も泪ふにとみがち様子まらねべ娘乃れ筵居紙あるく手とつかへ梅「こんちねれ寺参りかろどちらへれ往遊まました源「れふくろ乃佛参から久しぶりで諸方あるいて来ました（中略）源「ヲヽでかぃ〳〵それでこそ武士の妻甲桔本錬の源太左衛門何程の事があらう本望とぐるねまたくうち必を吉左右待ていやれといひつゝ雨戸と細目にあけ外面とながめて源「恩ひの外ゝ夜もふけた様子今から出掛るから父上と忠太夫ゝ此書置をきーあげて稽くゞーくれおまへうら能うくおねあ〳〵申ておくれ梅「ろれてゐモウお出うけあろでーまそう随分お身と大切ゝ源「お前えからだゝ氣とつけてトそこ〳〵舞を一源「お牧さんが夜下物をうつかりと喰あいぞうゝ其外お牧さんから父上さんゝあげる物ゝん氣を附て身と大事ゝ時節をまちお梅「ハイといらへて取いだす刀ながらねど若ー此まゝゝされもやせんかと抦糸れ唯つかれまゝ恋られす割笄のゝかれてえいつか下緒の結なるゝ時ころあれと両の眼ゝ浮む泪をそせトとて云々

べく「とんと行衛があるなつたものだがう」とまいひ得べく「更ゝ行衛が知ゝ処もんだうち」どもはひ得べく両ーく第二と第三とゞ俗談中の俗語ゝーくゝ最も野ーき言語なるがゆゑ第一の言語ゝとりき事と欲をるや疑をまゝあるゝ第一の言語のごときが所謂現在の言語なるがゆゑ已ゝ過さぼ未歴をんとゝ欲をるゝ至當といひ難かり英國の文法ゝも歴史現在とよびならせば一種の用語法ありといへどもそれ時々ゝ用ふるものまゝ當ゝ用ふべ充ものゝはあらま現在のやうゝうつあいさをれ其事柄の質ゝよりとくは顕る面白く思ねるれどいも長々しき未歴そゞ我死長なる言語をもき過去現在の差別も設をてくだ〳〵〳〵くも述るとく行ぎなゞ覚ぉ先後錯亂ーく事序と辨ドがさぎことあるべし是第一ゝ讀者をにと倦厭の氣を發せしめん故ふれのれゝ斷にくいべらく俗言とも〳物語の詞（物語中ゝ現ねれさる人物の言語をいふ）ぞ寫をれ妨害をし但し地の文ゝふいたりをれ（我國の俗言ゝ大抵良の行ねれざるをあひだに）俗言ともく寫をべらずば盡しこれが爲ゝ物語の進歩をさまさげんかと恐るれば也ゝ爲ゝ來談の人情本の披文をあに一讀しく其得失を覚ふべし

❸（前略）著述業ゝ一のまゝらをながらをまゝ情ゝ引されそをがむし長者が許ゝ爲

（松亭金水）

右に載る所のものは所謂俗文體の文章なれども地には雅言をまじへ用ひて俗言八分の文とはなしたり蓋し前條に陳述せる幾多の不便のあるによるなり地の文章と詞の文句とかく氷炭の相違あるはまた是非もなき事なれども同じ言葉の文句のうちにてさへながら時代の違ひしごとくに其性質の異なれば甚だ妙ならぬ次第ならずや譬へば前の文章中なる「ヲヽでかしを云々」の語は所謂演劇の臺詞にして今の世の人の言語にはあらず前後の言語と比べ見なば不都合の廉なしとはいはれず是我國の通常言の不便利よりして生ぜしことにて作者を咎むべき限りにはあらねど此等は俗文の神髄ある活動の妙味をそこなふ由ありもとより望ましきことにはあらず是併しながら文の質の其物語の質に適はでいひあらはすべき情趣をしもいひ盡し得ぬによる事なり故に前段にもいひしごとく時代物語を綴る折には俗文体を用ふることはきはめて不都合多かるべければ雅俗折衷せる他の文体をとり用ひて其趣をば叙すべきなり

世話物語を綴る折にも地の文章は據なく雅言を幾分かとりまじへて叙事の便利に供すべきは已に前にもいへるごとしされば雅俗折衷の地の文と全く俗言にて綴りたる詞との接續鹽梅をとゝのふるたやすからぬことにしあれば此文体を用ふる輩は充分心を用ひざれば奏功きはめて難かるべし譬へば馬琴得意の文体もて地の文となしたる續へたゞちに為永得意のベランメイオヨシナサイナなどやうの詞を綴りいださば地と詞とほとほと撞着をする勢ありて句調もおのづから穏かならずさればとて此撞着あらざらしめんがために地の文をあまりに俗体にかたよらしめなば彼の豪宕なる景況をば寫しいだすに便ならざるべし是第一の難義なりかくされば俗文体を用ひんとせば宜しく一機軸の文をなすべし決して馬琴の文と春水の文と合併なして地と詞とをものせんと企つるべからずさるわざせんは元のまゝに人情本文を綴るにも劣りて拙なし俗語なればやすきもののやうなれどなかなかに然らぬを作者たらんものは能々こゝらを考ふべし前に俗言は雅離れ聲多く訛言鄙語多しといひしからに讀者は必ず俗言をばぶざうに識りさりと思ひしならんなどもまた甚しき謬誤なり言は魂なり文は形なり俗言には七情ことごとく化粧をほどこさずして現はるれど文には七情も皆紅粉を施して現はるゝ幾分か實を失ふ所あり俗言のまゝに詞とうつせば相對して談話

ハ久堅ハ雲の上人ハ遠き昔ハ言の葉も其文面にあらハすべし時代物語を綴らんとせバ之ニ比へん好文体まさりとしも思えざるなり世話物の小説ハ如きもなるひハ此文もて綴り得がさきにハあらぬもれから他の俗文體艸冊子体なんどに比ぶれバ一歩と譲る所ならん歟蓋し其詞に一種ハ特質を有して今の世の言語に比すれバ大に異なる所あれバなり故に世話物ハ小説にハ此文体を用ひざるこそかへりて當然と思ハるゝなれ

雅俗折衷の塩梅ざに其宜きを得さらんにハ時代物語に適する文章實に此文の外にハあらじさハあき雅俗折衷の加減塩梅いとさやをからぬ業にしあきバなを効雅なる似而非作者ハこと用ひんと企てつゝをと〳〵讀むにあづらハしき鄙俗の文とバなをことあり試に一ツ二ツ其難點ハ擧ていえざまづ第一に雅調に偏しやすきこと是なり初心の作者が綴りさる稗史体の文ハ見るにおほむね雅調に傾きて（作者もし倭學に心得深きものなれバ）文法にのミ心と配りて貴賤の言語に辨別なく句々きれ〳〵になりて讀むに美ならぬ文となをか然らざれバ音調にのミ心を用ひて長歌の如く今様の如き文ハものして事物の活動の勢を失ふもれ多かれ苟にも雅言とまじへ用ふ

するが如き興味あり雅俗折衷ハ文ともて詞とつゞれバ書簡と讀むの思あり其おもしろみハ薄かることいふまでもなきことなりかし俗文の利すでに斯れごとし唯憾らくハ世に其不便を除くハ法なし嗚呼我黨ハ才子誰が此法を發揮ほらんおのれハ今より頸と長うして新俗文ハ世にいづる日とまつものなり

（第三）雅俗折衷文体

雅俗折衷ハ文体ハ一にしてさらぞ今大別して二種となし假に一を稗史体と稱し一と艸冊子体と稱す

（甲）稗史体ハ地の文と綴るにハ雅言七八分ハ雅俗折衷ハ文を用ひ詞を綴るにハ雅言五六分ハ雅俗折衷文と用ふさるからに地と詞と相齟齬するが如き患もなく雅なる趣と叙するにハ雅言ともてし野なる趣を寫ほにハ俗言をもてし臨機應變に貴賤雅俗と寫し分つに便なり且漢土ハ語とさへに其折々にまじへ用ひて國語ハ不足と補ふことゆゑ富麗幽婉ハ狀にいされバ倭文ハ嫺雅なるもれともて之を彩飾り宏壯激越ハ模様と叙するにハ漢語ハ雄建なるもれを撰用ひて其足らざる所と補ひ俗言を六七分まじへ用ひてハ天離る鄙の景情とりからさまに描きいざし雅言を八九分かりもちひて

○さるべき左いたん右いふく身れ憂事とつげの挿髪の後毛のきあげく人まつ縁の夕化粧鏡も刀自ゴのりものとうち向へども影暗き日ハ茨果く燈火れあくへとどのね庁ごろろくる爲ゴと貯の坐席遣の蝿蝿も流れ渡りの身ぉーあまどよろづよき日と唇手れ茶碗と覆す茶底ぉざくく参る唇藤脂れ笹色も香も知る人ぉ見せなんとくれ所爲なりなり云々（同上）

○客もあるやも沙量をられば是より酒醒そとまりて献つ酬ゐつ果ーなき議論に興と催ーさる朱之助ハはや薄酔の多辯ゴ任ーく爲日夢氣を徒ぐそうち咿ち〳〵華奴の目の前ゴてかういへべとかーからぬ不走向ゴ似されども吾母の旦くも暴〳〵も吾虫と臀濱ー〳〵四角四面乃氣質高く斧柄もまた烏と共ゴ起く糸と縁り織を織るこれより外ゴ所作ねなー今様早唄ころ事ふりまたれ說經弄齋獅節を學びさりやと問へばらやと答ふ況てきのふけふね田舎までも弄ぶ三絃なんね手で弾く物やら足でかきなるす物なるや夢あだも見たることねあらず偶然ゴものいひかけく〳〵も泣出ーたげなる面色ーて返辭とそるのみ餘情もなく寐るときざふも三ツ指ふく斬きせたまへといひながら蒲團の端へ如恐怖ふ枕引

るかうゴね候文れ文法と守らんこと勿論當然れことなれどもさねとてあまりま文法ゴれと拳く心を奪れづま小說辨史れ本分さる人情世態と寫しえぞやまことゴ益をきことろいふべー

第二ゴね俗体ゴ偏ること是なり和文を深く心得ざるやからがをまやひゴ歩く俗言をまゞへ用ひんと試るときゴねおほむね淨瑠理本またね端歌めきたる文體ゴ流れ易く音調ね實ゴ滑ふる所もあきど其辭いやーうーてねと〳〵讀むゴさへざるものありて瀬川如幸があらたーたる鼎臣蟠のごときねやゴ此纖あると免れざるべー

さあらばいかがなる文章が此文体の本質ぞといそんま八犬傳美少年録あどね此体の文をもて綴りさる大筆れ小說なりこゝゴ擬文式舉ぐ讀むて其一班と窺ふべし

○這れ眉上の黒子きへ一對あるね親子の徴あの兒の顔と御身れ容止似ぞや貧さるや見なへといひつゝ鼻紙ゴ陪さりー嚢中鏡ととり出ーて瞬しく見せつ推向ゑ珠よ你れ爹々公ぞや抱かまなへと接連ればまだいあゞなき珠之助も爭ひ難き血脈の愚愛爹々様のうと呼のけく攫るを繼ぐ引よせく膝ゴのせたる瀬十郎数々ぺこそあれ目ぉ麗き涙敷露のはと商云々（美少年録）

○昨夜はなせしことゝより吾儕が目今里長と乃ち宿所へもかん鞘鐺をる衣物出したまひねといふゝ斧柄が心得て取出しつゝもて来ぬる手織小袖の深紬縮太織が名のみ麤突ゝ帯の綯さへあまりぬる真と辛苦をやる濃なき表衣ばうりと脱更て繕ひのなき白踏皮も水入らずをる親子ゝか脱し舊衣たゝむ間ゝ喜紙折て懐へこれもとあたを印章を取てれさむる袖頭巾ひきげて朱どのたゝむやや斧柄留守といひつゝも背門よりいてゝゆきまけり（中略）落葉がこやくかへり来て朱どの斧柄も歌ひたまへ那一種が手ゝ入りゝき委細が後ゝ辛度やといふとさこそと朱之助斧柄もともゝ慰めて汲てもいむる一柄抄立茶の泡乃あれればゝ恩義のためゝ使るゝ親きへ子さへ厭ゝき心盡しと心ある人ゝ見せむや津の國ゝありといふゝる武庫の山塔ゝ築ゝき空花の散りぞゝぬべき入相乃山寺の鐘ゝとづれて燈点ゝもありけり云々　（同上）

○無頼卿も賢房卿も共ゝ名残を惜ませたまふ愛顧が筆ゝあろうれたるそゞ中ゝ無頼卿の消息ゝ今より四稔さきつころ緑巽亭ゝあだまちさせしゝが紅葉見あらてもれいふ花を手折れといこねむかりしゝが慰こそ嘘しけれ今さらゝ恨よせて競寝なり亭竟木郎の偶人と統とならぶる1異なりを斯ても夫婦といふべきや称讃三合有なりゞ入賛ゝを。なりそといひけん昔の人の格言なるゝかな察しーたまへと不楽しげゝ意中ゞ付つくを酒興の述懐醤五郎呵々とうち笑ひて宣ふ趣無理なりねど世の常言ゝ石の上ゝも三稔といふこともあるなりをやさりとて貴所が入婿ゝして又世の入婿ゝあれなゝかゝらを今ゝもあれ主用とはたしーたまはゞ袖うち掃ふて武蔵へかへりたまはなん然らばこゝもなほ旅なりつまる所が趣のおき衙妻と旅宿れ酱分月儲ゝおせーなりと思ひたまはゞ不足ゝありうゝ且く堪忍しーたまへかしーといへゞ興手もうち笑ひて斧柄さまの売怒子なるそゝそれそれ乃誠の事ゝ侍り焦たる銅も鍛らねゞ良琴ゝおなり侍らず煉けし竹も伐てこそめでたき笛ゝおなるとかいふ譬喩と女子の諸禮書ゝおて見しーことの侍りゝき斧柄さまも恁ぞかし氣長く教育たまひをゞ遂ゝおゝ佳音をあらばしーて暁奏ゝお臥房乃窓の隙ゝより去らむと共侶ゝおいとゝしーみつゝ離れかねぬる楽しーき中ゝおなりたまはんうを教ゞしーて備らんことを求めたまふゝ疎ふこそ愚ゝあらずやと慰れば云々　（同上）

みられやせん記まーみりきと書せさまふを見れば頗まづ厭うおりーをさらぬさまみてさやくと手早く巻て懐うちおさめ今ふたゝめぬ兩卿のおんあさけこそ辱けれ云々 （同上）

上ふみゝげし文の如きは艶ふ此体の一班のみいまだ全豹と窺ふふ足るべうもど其性質れ他乃二文体ふ異ふる由れ已ふ明瞭ふまられさりと思もる已ふ〳〵此体れ文れ地を蹴るふれ雅言七八分をまゝへ詞と蹴るふれ雅言るふも遠かちふ地と詞とれ聞ふむふざーき文調れ相違もふくひとへふるべー實踐老若男女れ言語を寫ーとみつふ便利多かりされどもと二ツ三ツありきむかーれ景情を寫そふも最も適當せる好文体れ 曰講成の法をふそち稗史体れ雅俗折衷れ文を論するふ當りてふの の意義ゝひふあらえーた曰く音韻轉換の法曰く意義轉換の法曰くうそも法ふり譬ゞ左の文まて是ふり

音韻轉換の法れ長歌の冠詞よりする上の言葉の下半と借てまた下の

ね

○さてゐ命ゐ派遣ゐ乃短ゐ夢乃薄命ゐれとふふりふゐ法とふふりふゐれふ乃近江とゐれたゞ名

づゐゝんさーて往方れ磨針乃最もむかふふや取妻夫きへふき名聞ふて後ゞ主物思へともやつれもふき云々（美少年錄巻頭乃詞）

傍示ふしさるごとく音韻轉換乃ところいと多ふり蓋し省筆乃一法ふり苦ふ巧を求むるがためのみ用ひさるゐれふらんれれども初心乃作者れこゝろ乃道理ふ付きさるふや音韻轉換れ是非行はねばふらぬやうゐ心得さるもろふれとけ爲ゐてきまた入要ふるもふ乃ふゐりやきれどもこゝも此法を用ゐられば文急ふ可厭ま長ゞまうありて讀むゐ興ふく且多もふく香もふき文章とふるごとありされどてきもふるまゝき所ふつさふき相聞言葉と表けまされ左乃如き

手れ二八う二丸ふろ 樣子れ例五白紙乃 異乃一間へ入相乃 せんかき涙乃

院本ふどまふりふれて婦女兒童も耳慣れさるいとも拙き相關詞と得意氣ゐ蹴りいだ

讀者ㇾ解るやうㇾ綴るべきなり然ろざれバいか程巧妙ある轉換といへども讀者が其意乃解しがたきㇾ苦むやうでハおもしろからぬのみならず其全文乃意味乃如きえさめㇾ解しがたくあることあるべしおのれが友人をㇾがー宵くいへろく轉換法ハまことㇾ妙ある文法ㇾて地乃文ㇾ放て之ㇾと用ふれバ素西乃國々の文章ㇾもいまだ知られざるの旨趣あれどもおと人物が相語らふ詞のうへふれ用ふるてとハ甚ど不都合の事ゐあらすや何となれバ相関詞ハ俗おいふ口合といふものゐ似たりさあらんゐハ前ゐ舉ー

短き歳のふーあハせ逢やなりーとうらめーの近江といへが名付けん云々

の文中なる「近江」の字ハ「逢」より轉ずさる口合なりやゐまる悲哀の語の中ゐ口合とまでふるハ不都合ならすや云てといひきれのれ答へていふ否ゐまる口合ハ用ふるも苦ーからや何となれバ非情の物の名ときへゐ限めーく思ひてうちかこつ所ゐかゐㇾ淡きて女の情合らーくゐ見ハといちらーけれバありかまる例ハ世の中ゐ現ふある事ありむかー並國の歌人ゐ字井ざア（河柱）おゐがーといふ人ありあるとき其家運の衰頽せるとをげきて詠みさる歌ㇾ

走ハ変ㇾ可厭おかゐ（ハ）ㇾ盡ㇾ書おはさるㇾ劣りて聴

意義轉換乃法ハ音韻轉換ㇾ似くもこーく異あり意義轉換乃法ハありても音韻ゐ似ると似ざるをゐハ係らずもー前後上下乃語を意義乃相似さる詞をもし得べしと思ふときハ筆とまげてきる文字と撰用ふるあり譬バ左乃文ㇾて

消ㇾし人ハ六乃花七歌八才と一期をおけん云々

「六乃花」ハ「消ㇾし」といひさるより轉ず来れる詞ㇾて通常なるハ「雪」とゐゐらきまいふべきをれどもまさ意義轉換乃法ㇾ用ひんとまるゐらㇾ故意ㇾ「六乃花」といひて下乃「七歌八才」を利ーさるなりこれらも所ㇾよりてハ脊筆乃さまけとなるともあれども大方ハさゞ文れ完全を存ふるㇾまをざを

音韻轉換も意義轉換もおひて筆をまばさる述其文章乃上ㇾ見えて作者乃苦心乃あかろさまㇾ他ㇾ見らるゝハいと拙し趣やてかいる相關詞ㇾ綴りいだきまくほりまるもきㇾねまう第一ㇾ轉換其谷乃平易ㇾ平滑をを乃ぞむべきなり語をゐゝ文ㇾ於ハゐ普通乃讀書眼ある人ㇾハさゞ一通よみさるのみㇾて其轉換乃原く所乃よく解るやうㇾ綴るべきなり一層巧ㇾしていとゐみ入さる轉換といへども再讀をれバさちまちま

文を必要なる光彩の如きは他の方法に求むるを大に望ましきことを知ればなり其
故に讀者をして現實ありとの感覺を失はしめんことを恐るればなり
詩歌引用の法　古代の物語より最も多く見る所なり古人の詩歌の一部分抜抄出
して地の文章の助けとなすとも添ふるの法なり
○月れぼるるまき出て濁ひろく出こぶかきあさり心細げお見ゆるまも住はおれ
さらん　君ぼのおか　おぼ下やらる云々　（源語須磨の巻）
○「袖まきぼさん」人もおき身ううれーきこころざしまどそやと宣ひく云々
（同上末摘花）
右の第一の文中ある「君ぼのおか」云々は「いぶきおろしのはの中に住まがみい神の方
き事のきこえこさらん」といへる古歌の意部分と借用ひく地の文章の句を省きて言
外の意味と含ませたるなり又第二の文中なる「袖まき乾さん」云々は「涙雪いけふいふ降
りそ白妙れ袖まきほきさんまあらおくま」といへる古歌抔うち用ひて詞乃美句もて
省きさるなり歌詩と引用しさる場合もあまさあるべけれど今記憶中にあらざるまま
こゝは其例と挙げざれども其大方の模様といたまづ人物の形容なんどと地の文

「痛む」てふ名ことなるもいや我宿まおまるなげきの秋でみんとも
THE VERY NAME OF WITHER'S SHOWS AECAY.
といへり又我朝にても源三位頼政が平等院まで芝生まる生一己まる生害となさんとせ
折辞世まと
埋木の花さくことをなかりまる身のなる果ぞ悲しかりける
とよまれし如きも所謂口合とでまでへされども其痛切をゝ情趣まる衣ゝゝ尋常の語ま
まさるも思はる
因云轉換法ゝれはむね詞の冗長とはぶくさめなりといひされども間々轉換
の法ゝもちひざゝめべりゝ冗長まることあり譬ば
別れまる後かうさ事を「黄楊の小梳の」告る間も無き世がさりまならんとゝも思ひ
ゲけなや「黒髪の」神ならぬ身ぞ是非もなき云々
「黄楊の小梳」弁まる「黒髪」の文字ゝ直まる綴りをもときゝ不要をるものゝをを「告る」
まいひかけ「神ならぬ」まいひかけんさの まる用ひさるゝ冗贅なり蓋しまる文の光彩と
奈ふるまる外ならさるなり想ふまかまる相関詞になるべく用ひさるやうまおゝゝ

しくれのれが見る所に違へりれのれは唯雅俗の折衷鹽梅と示さんとて彼翁の文を引用せしのミ決して馬琴翁の文と師表にもべしといひたるにはあらず翁は實に雅俗折衷文の大家なれども彼馬琴風の文の如きは翁獨り專にもると得る文体にして後人の得て學びがさき文体なりかしまひて學ばんともれば今へりて損ありたゞ雅言と俗言との折衷鹽梅にのミ心を配りて臨機應變に筆を動かもべしもし然らずして翁の文とのみ學ばんともれば例の模型の文となりて筆路の進退意のごとくならず猶目を掩ふて盃に酒と盛るが如き弊あるべし雅俗の分量と標準として文と綴るはなほ酒に水を混ふるがごとし眼を覆ふて酒と盛らんともれば あるひは盃に溢れんことは恐れて少づゝ盛る故に完全を得ること難かりしからざれば溢れて席を汚すことあり足らざるはもとより拙く席をけがすはいよ〳〵醜し酒に水とまじふるは其標準分量にあり分量の加減は酒れ氣味を失はざらん程になせば可し下戸に飲すべき分はをこしく水を多くし上戸にをゝむべき分は更に水は減ずべし然して其鹽梅はひとり作者の心にありて他人の指頤を要せざれば ミづから味ひミづから試ミさて分量の當不當を自在に考へ定むべきなり酒はをなはち雅言なり水はをなはち俗言なり雅俗折衷の秘訣

ともてなるべくだけ細に寫しいだせし上にてなほ足らざるを覺ゆる折には其形容に適當ひつべき古人の詩句とは抄出して其趣をば補ふなり西洋の小說文には此法を用ふるもの頗る多し景況を叙しさるのちに「正に是」の二字を置て自作の漢詩を掲載するもれなし趣乃業にはあれど古詩を用ふるの雅致あるには劣れり

題目構成の法は別に一定の規もなければ作者の隨意たるべきは勿論なれども參考の助にとて一言をこゝに費すべし彼の漢土の小說の題目にならひて對句やうの漢文字を二行にならぶるは事ふりにさりさはとて「第一回何々の事」なんどゝあからさまに掲げいだすもあまりに興うすき事なりかし西洋には古人の詩歌を抄出して題目の代となすことあり我國にも古人の發句を引用ひて題にかへさる作者もありき後の二法はすこぶる面白き趣向かと思はる題目などはいかやうにてもよきやうなれどもまさ退いて考ふれば讀者の注意を促がすべき一機械なりと思はるれば宜しく應分の新工風を命題にもまさ費やすべし

れのれは前條にて雅俗折衷の稗史体の文例を擧るとて馬琴翁の文をのミ掲げされば或は思ひあやまりて馬琴翁の文を學ぶべしといふなりと思ふもあらんそはなほ

をれど小説文理より推をべきやは馬琴と學バざよりやは其體と得るよりとも到底後の馬琴さる事過ず其上まいづるねうたし往古乃小説文ととりく新き折衷乃文とをきバ其文ね一家乃文ありて他人乃文まあらず馬琴乃文と指揮をべくまた彼を壓一得べしあるたのしうらをやといひけりまことま格言あるかも

(乙)艸冊子体ね雅俗折衷文乃一種ふしてて其辭吏体と異ある所以ね單ま俗言を用ふる事りて彼乃雅文体と同様ある不便不如意と感ぎることありさねあれ漢語と用ふる事りて彼乃雅文体と同様ある不便不如意と感ぎることありさねあれ漢語と用ふる事乃多きと漢語と用ふることろ少きとまあり故ま跌宕豪壮ある情態形容ご叙ぎることとバ強ち忌むといふもあらねバ将来此体ご用ふる作者ね其時々乃便宜ま應ぴことと漢語をとりまぜへて件乃不便利ご補ふとも決して不都合ねあらざるべし想く多少乃漢語をとりまぜへて件乃不便利ご補ふとも決して不都合ねあらざるべし想く多少乃漢語をとりまぜへて件乃不便利ご補ふとも決して不都合ねあらざるべし想ふま此体乃文章ま て漢語どつとめく除きたりしね假名文字乃きまて書たるねらま讀ふま此体乃文章ま て漢語どつとめく除きたりしね假名文字乃きまて書たるねらま讀者が之ご讀みたるときま解しがたうらんかと思へバるべし且や艸冊子といへるも者が之ご讀みたるときま解しがたうらんかと思へバるべし且や艸冊子といへるも乃ね專ら幼童婦女子輩乃玩弄ぐさま供せしもの ゆゑつとめく漢語と除きたりしもまた當然の事といふべし

因云これのれが友人某かつくいへらくれのれ借ら此間の小説家を見るま概ね馬琴ま心醉せるもの多しさるうらま其文ね一向ま彼翁をまねびく錢さるが如き文あり夏さるが如きあり甚しきはまさく死しさるが如きもありけり豈笑止ならぎや馬琴翁ね源語平語太平記水滸西遊等の文を折衷しく彼一大機軸といだせしおり所謂翁が自得の文まく杜撰もあれバ牽強もありさねあれ翁の牽強杜撰ね翁が自在の才筆もく臨機應變まものしさるもれおるうられ機まよりくね牽強杜撰もうへりく神妙ある所もあり盖し翁が自在乃筆もくまづうら加減とすればおるべしさると今乃世ね作者輩ねうこらと毫も思ねざるまや將力乃及バざるまや善も惡きも馬琴をまねびく翁が杜撰乃文句をだま手柄顔ととりいだしさく左もあるまじき文句乃醜へをひくはめこまんともるも乃あり豈はおいだしく謬らぎや小説文を學がんとせバ宜しく翁乃本據まと遡り源語平語太平記等と讀味ひく更ま一機軸を工風をべし源語平語等實ま名文乃除作あり彼ととりて更ま折衷乃文をおさバむおしく馬琴乃翁

お酒と水との加減のごとし折衷文と愛をる作者ねよ能しく此意と味ふべし

た譯かとれとゞめまとし取上てつく〳〵見れば當名の處へちらしがき風にな
びかぬ村荻のもとへとあるは光氏さまより妾の處へ來たれふミ年のゆうぬあ
のれ子が取違へて母さまへ持てれいでなされたれどいゝやうれは娘ぢやと流
石にあなたもれつしやりかねひよんな事でやりつかへしつ妾が目にかゝらぬ
と毫末はてはつかぬところ云々　（同前）

右の二文章の如きは頗る俗言を多くまじへたるものなり而して其俗言はむかしの江
戸言葉に似たるよりはむしろ京坂語に似たるものなり想ふに京坂の言葉の如きは頗
る雅言に近きゆゑに地と詞との撞着をばなるべく少くものせんとて作者が注意なし
たるなるべし

○「いな〳〵それは僞言ならん姿は賤くやつをとも阿女は正しく匹婦にあらず
あまつさへ女子にはげなく心のうちに大望と思ひたつ身とミたはひが目かれ
のれは年比世の人と相をること代修行なし其術妙と得たるゆゑ最前れことが
街道に馬ひきながらたゝずむを一目ミるより凡人ならぬ者とは早くも見きは
めて窃にとふべき事あればをゝむる言葉とさいはひに馬かりうけしも人とぞ

艸冊子文体にもさま〳〵の種類ありてあるひは稗史体とほと〳〵相類似をるものあ
りあるひは俗文体に近きもあり譬ば京山種彦の文章にはれもに京坂の俗語と用ひて
冊子の詞と綴りたれども種員または應賀なんどは多く雅言ともまじへ用ひぬ下に二
三の文例と擧ぐ熟讀して其相違をる所を見るべし

○それれそばへと突遣られ深雪はたとこけかゝり「マア兄さんの惡らしい斯
うくゝらぎとも可ことを嘸かゑれ手が痛みませうぶしつけながらと結び目の
堅きに齒までてつだふて漸々ほどけば權三もにつより「まちがふて其後はと
んとれ目にかゝりませぬれ健でれ目でたゞ又そのうちにと立つのと引とめ云
々（種彦）

○村荻あたり見回しく料紙硯と取いだし墨をりながを其處へ何心なく來かゝる
夏野「れあついのに何處へのれふみもう黄昏でれ暗からうれ手燭とあげませ
うと聲かけられてふりかへり「久しう居やる其方には何もかくを事はない君
吉さまが此れふミと持てござつて母さまへあげよういゝや取るまいとあらそ
ふてござるやうをを遠目にミたゆゑれ兩人のれつしやる事は聞にねど如何し

文章ゝ近代の俗語多かるから專ら俗語とのミ用ふるときゝゐ時代違ひの憎態とゞ
衆をるゝ不都合あれバあるべし

畢竟ずるゝ艸冊子体ゐ世話物語の文章ゝゐ至適至當のものゐれども時代物語とも
をるゝいまだ適ひたりといふべからを何とゐれバ已ゐ前ゝも論ゝたるがごとく足
利時代もしくゐ又保元の比の人の言葉を俚語俗言とも綴りいざさゞバ雀何とおく虚
作めきて其情合の移らぬのみゐらねまさ此間の俚言俗語ゝ得ざいひがたゐる詞もある
べし蓋しいまゝへの人情風俗令とゐ頗る異あるから其日用の言語の如きもまさ隨つ
て異あれべあり假令また作者の才筆もて巧ゝ件の不都合とゞ掩ひ得る由ありとをる
も別ゝ一條の不便利あり之と全く除かんことゝ決しく望みがたき事なりうし例ゐ艸冊
子の作者輩が時代物語と綴るゝ當りく豪傑もしくゞ貴紳なんどの言葉と綴りいだき
折ゝゐれほむね雅言と多くまゝへゝ「そなた」といふべき状も阿女といゐせ「云々しや
れ」といふべきとも「云々」たまへ」といゐせなどをあるゝ下流の人物たる男女の言
葉のうちゝゐ「ござんせ」といふ詞もあり「惡らしい」といふ言葉もあり畢竟をるゝ下流
社會ゐ概して世話物の趣ありて他の時代形ゝあきなくさる上流社會の趣といきな

へし此あたりへ來りし上素姓ととはん爲ぞかし（中略）と言葉と盡していふと
きゝ少女ゐゐバし黙然たりしがやゝあつて泰然と形とあらため翁ゝむかひて
れん身が明察感ゐいる星とさしたる其ことば今ゐつゝまん要あらねバいかに
も實を告ぐべきがうれより先ゝ妾もまたれことゝまゐ乞ゐんものこそあれさゝ入
れてたまふべきやと言葉もゝはかゝあらたまり云々　（種員）

○伊達五郎其儘たゝずゝ五人のものゝ潜びたるくさむらゝさつト目とつけ何事
かいえんとせしが思ひかへを由やありけん傘うちひらきふりかたげ舞さへい
とゞ高々と「此ものどもと手の下ゝうつゐ如何なる鬼神ゐ人間業ゝゐよもあ
らじトわをかゝ語ふ熊坂ゝふりさけ見れバおざおたの形ゝ似たる月影ゐ雨後
の雲間ゝとざざされこゝ青葢ゝあらおくて旅のやどりゐあおたぞとあゆまん
として二足三足よろめきあがらふゝととゞまり呵々と高笑ひゆう〳〵としてあ
ゆをゆく云々　（同前）

右の二文章の如きゐほと〳〵稗史体と分別をる能ゐざるものあり種彦翁といへども
田舎源氏の文章ゝゐ多く雅言とまゐへ用ひゝ地と詞とを綴りいざせう蓋し艸冊子の

いと面白き脚色をさへにあるひは損ふことあるべし在来りさる艸冊子は專ら童幼婦女子ばらに玩具ぐさに供せしもにゆゑ假令鵺言葉に不都合ありとも敢て咎むべきことならねど若し將来に作者にして艸冊子体に文を用ひて一大小説を編まゝくせば此不都合を取除きて美術に機械に適當せる巧妙文辭に綴るべきなり

之を要するに艸冊子体は時代物語に文章には決して適當なるもにあらず宜しく世話物の小説にのみ此文体を用ふべきなり但し從来に文体にては宏壯豪跖の情態をば叙するに不便に廉もあれば作者が臨機に發明して多少に改良を加ふべきは勿論當然に事なりかし想ふに時代物語は文政文化に作者輩が最も得意とせし所にして傑作も頗る多なるから今に小説作者にして時代物語を綴ればとて馬琴の小説を変駕せしことさためて容易からぬ事なるべし如ぎ時代物を拋擲して世話物にのみ意匠を費し未曾有に物語を工風をべしさあらば文もなるべくだけ世話物語に適しつべき文体をまづ研究して其要求に應ぜるやう準備なをべきは勿論なり而して草冊子に文乃如きは最も世話物に相適ひて且改良に便なるものなり我將来の小説作者はよろしく此体を

がら雲泥の懸隔ありつゝ〳〵考へ讀をもてゆきなば同國人とも思はれねば同じ時代の人間とも得思はれぬ廉多かりさればとて此様なる不都合なからしめんがため下流の人物の言葉のうちへ多く雅言をとりまじへて其言葉をしも綴りいざさば彼の稗史体の文となりて艸冊子体に特別なる長處を失ふことゝもなるべし是もまた惜しきことなり

因云ちかごろの演劇には間々之に類をることあり此度の千歳坐の演劇の如きをなはち是なり義經の愛姫靜御前の詞のうちには「おことら」といふ言葉もあり「云々しつるぞかし」などいふ言葉もあり「何々されたり」と堅くるしう言ひきる言葉もあれば「云々せるぞや」と文章めかしさる言葉もありしかるに同じ狂言中にて下流社會にいふも更へ相中俳優のむさり臺詞もしくは侍女の言葉なんどは頗る俚俗なる言葉にして前の靜女に臺詞に比をれば月とをつぼんほど相違へり其他さま〳〵に不條理不都合尚穿鑿せばあるべけれど畢竟演劇なれば其不都合も目だゝぬなれ若し此様なる不都合をば一々熟讀玩味をべき文章に上にあらむとなば爲に讀者に興味をたづゝけ

作者が發明せー新工風なりといふまねあらを二世種彦とえどめとおて春水
おとれ草冊子ゐ己ま專らゐ江戸言葉をまじへー例ありさるありされども
其比ね今のごとくせ話物語とおもてむさゐ世話物と去て綴るまあらて時代
形まーく綴りしらいくらゐ雅言もまじへーことありまた京坂語えまじへ
ーことあり決おく純粹ある江戸の言葉まてねあらざりーあり
又いふちかごろ世上ま「かなのくわい」またね羅馬字會などいふいろ〳〵の
會どもあちこちま興りて我文章の改良とば圖らまくをる人々あり定まか
るべき目論見まして旦頼もしき事ともいふべしさねあれ退いて考ふれば羅
馬字ともて文とぬく事も假名文字のみとんて文をかく事も其人々の終極の
目的まいあらざるべし何となれば我當が將來永遠ま企圖をる所のものね字
内の萬國と一統して一大共和國の有樣となしおよぶべくだけ風俗ともまた
政体とも國語とも同一ならしめんと望むゐありさあらんまいね將來ゐいね我國
語と改良して歐米の語まさうをるかまたね歐米の國語ばして我ゐ同うなさ
しむるか此二箇條の目的より外まいね終極の目的をからん而して歐米の開明

改良おく完美完全の世話物語と編成おきまく企つべし世れ活眼おき似而非學者ね我
艸冊子れ文体をべいと辭びさりとて罵れどもきるね小說の何たるとば解せざるに出
さる課錯のみ小說ね人情と風俗とを活るが如くゐ衆ーいだおて讀むものをおく感ぜ
ーむるを其目的といおをものおり假令俗言俚語ありとも其文章ゐ神ありゐば他の論
蟲ゐも音樂ゐもまさ詩歌まも恥ざるべき一大美術といふべきなり

因云此間れ傍訓新聞紙ゐ掲載せる所謂續話れ雜報れ如きねゐねむね草冊
子体れ文章あれども多少の改良と加へさるもれあり其改良れ重あるもれと
いへば調れうちまへ用ふる京阪風ね俚言と廢おく專ら東京語とおーさ
る事あり故ゐ此間れ艸冊子体ね種彦文ゐ似さるよりねむーろ俗文体（春水
文）ゐ似さるもれあり是おうしおがら東京府の皇國れ中央とおりさるより
自然ゐ出来せー變更あるべし今一ツの原因ね新聞紙ゐ載をる續話ね其物語
れ架空無稽あるまもうさえるも總じく事實ろーうもくおまことゆゑ自然ゐ
世上ゐ行えるま東京言葉狀取もちひく其人物れ言葉とーも綴りいざさぶる
を得ざれべありかくいへべとく東京語と草冊子文ままふることね明治れ

とゝるし得べき好文體ともなり行かんう是もまた圖るべからぎ假名の會の有志者たちがこのごろ頻りに用ひらるゝ消化しかねたる折衷文にハ遙にまさる由もあるべしおのれハ羅馬字の會にも入らねバ假名の會の反對者にもあらねど序あるまゝ圖らずして議論のこゝに及べるものから假名もゞ會の主旨の如きハあるひハおのれの意見に違ひて他にあらんやも圖りがたし假名の會の方々あまりにいたくな叱らせたまひそ

脚色の法則

およそ小說ハ作者が架空の想像に成るものなり故に其趣向を設くるに當りて些も原則のなきに於ては一向寫真と主眼として孟浪思を構ふるまゝ前後錯亂して脚色整えず事序繽紛として情通ぜず出來事あまりに繁に過ぐ爲に因果の關係の察しがたき事もあるべく人物あまりに數多くして爲に終結のつかぬもあるべし故にあらかじめ法度と設けて其脚色とバ構ふること勿論肝要なる事なりかな

小說を綴るに當りて最もゆるうせにすべからざることハ脉絡通徹といふ事なり脉絡通徹とハ篇中の事物巨細となく互に脉絡を相通じて相隔離せざることといふなり譬

文化ハ我文明にまされることといふまでもなき事なるから彼國語をして我國語に全からしめんと望めバとて到底成得がたきことなるべしされバおろ博識の有志者たちも羅馬字會と設立して我國語として彼國語に全うせしむる階梯とハなさるゝ事にてあらんぎらめ論じてこゝに至るに及べバ羅馬字會も「かなのくわい」もみな終極の目的ならで階梯なるよしハ明なるべしさハあれ羅馬字の會の如きハ頗る終極の目的にも相接したるものなるから學者博士の方々が相集會して研究さるゝもきえめて當然とも思えるれど他のかなもじの會の如きハ言えば階梯の階梯にて羅馬字ともに文章とバ書べき下稽古となすに似たり已に下稽古をなすためなりせバなどに今をこしく登りやすき捷徑よりしに始めざりける後に羅馬字もにかくべき者とバ種々さまざまなる工風に擬らしに假名文字をもに書かんハ要なし所謂二度手間の贅勞ならぎやむしろ羅馬字もに記し得べき新文體とバ工風し出して羅馬字主義の有志者たちに其全會の力をしえ合えさるゝ方肝要ならぎや所謂草冊子の文章の如きハ最も平易にして流暢なり多少の改良を加へもせバ万般の事

お名ばかり回前に述べ置をり天禄漂ね下漂ま〳〵此間ういふ「シコミ」のあとをりこね後ま大関目の妙趣向と出さんとて数回前より其事の起本承墜とおこみおくなり金瑞が水滸傳の評注ま雑漂ま作れり即ち禄漂ま共ま「シタリ〳〵」とよむべし又照應ね照對ともいふ擧ば律詩ま對句ある如く彼と此と相照ら〳〵趣向ま對と取るをいふ照對ね重役ま似たれども必を是れなどうらを重役ね作者あやまつて前の趣向よ似さる事ね後ういさうて役出をといふ又照對ねわざと前の趣向ま對を取て彼と此よと照うをなり擧ば松蟲鹿内が牛の角を以て殺せうるまね北越二十村なる閻牛の照對なり又犬飼現八が千住河ま渡舟の組擊ね芳流閣上ある組擊の反對なりこの反對ね照對と相似てれおどうらを照對ね牛をもて牛お對をるがごと〳〵其物ねれおどけれども其事ね同どうらを又反對ね其人ね同どけれども其事ね全どうらを又省筆ね事の長きを後ま重ていたさうん爲ま必を聞うでかをねぬ人ま倫聞させて筆と省き或ね地の調どもでせまて其人の口中より說出をどもてながくうでを作者が筆を省くがさめま看官もまさ倦さるあり又隱微ね作者の文外ま深意あり百年の後知音を俟て之と悟うーめんをを水滸傳よね隱微多うり李贄金瑞等ねいへざさうあり唐山ある文人才

ば實録紀行等ねてね其篇中ま主るせる事元采つくり物まあらさる故一回毎ま一巻毎ま新主き事物こもノ〳〵現れ物語の筋の轉換をること稽えしり行く車の上ま〳〵四方の景色を觀るがごとしさるあうま前段の事柄ね中途ま〳〵立消とあり再び其結果を說出をべき約束もおうし〳〵他の因縁あき事柄の物語ま遂り又ね前回の人物ねいかま成行ーや敢てくわーくね說も盡さて更ま他の人ま交ぶあんど通篇脉絡離〳〵とーて關係きねめて疎漏あれども小說ねてね之と異あり首尾常ま照應せざるべからを前後かあらを關係なかるべからを若ー本と末と聯絡なく源因と結果と關係なくんば之と小說とねいふ可らすさるありれまま世上の事實と筆ままかせく書記せる實錄ま似て實錄あらさる異ーうる假作話といねまくのみ

曲亭の翁うつく小說の法則を論ぐくいへらく「唐山元明の才子等が作れる稗史ねれのづから法則あり所謂法則とね一ま主客二ま伏線三ま襯漂四ま照應五ま反對六ま省筆七ま隱微をなむち是のみ主客ね此間の能樂ういふ「シテ」「ワキ」の如し其書ま一部の主客あり又一回毎ま主客ありて主もまた客ま主ま客もまた主ま客と得を又伏線を襯漂ね其事相似て同にからを所謂伏線ね後まうなからを出をべき趣向

となれば假令小説に文外に深意なくともよく情態に真を寫して讀むものとして感せしむる美妙に効力備りさらんには其物語は小説なり隱微に間に寓意なきも敢て苦しからぬ事といふべしきれば表面に意味に外に隱微に深意と寓するなんどは（寓意小説にあらざる以上は）作者が身勝手乃樂にて所謂道樂といふも乃なり小説としては此物あるも此物なきも些も損益なきことゝもいはなん

已に總論にても論じさるが如く小説に幾多に法則と設くることは單に小説に讀者として倦まざらしめんが爲なるのみ故に此意とだに會得しえてなば別にくだ〳〵しく細則をば説明するには及ばざれども我幼稚なる後進者流の向後の便利に供するさめ次第に細則をも辨明せん

脚色と論ずるに臨みてまづ第一に辨ずべきは古メヂイと堵ラゼヂイとの區別是なり堵ラゼヂイは悲哀小説と譯すべく古メヂイは快活小説とも譯すべし悲哀小説の解釋は已に上巻にて述しごとし快活小説は專ら快活なる事蹟とのみ敍しいだすをもて本分としかさはら滑稽諷諭なども含畜なしさる小説なり小説がなほ未熟にして奇異譚の位置にありけるころには古メヂイ（快活小説）といへる小説には專ら笑ふ

子に水滸と弄ぶ者多けれども評し得て詳に隱微を發明せしものなし云々」

右の法則の第一さる主客に關する議論の如きはたのれ特別に欄と設けて仔細に説明なすべければ暫らく評論をこゝには略して其餘の法則は評論せん

第二の伏線と第三の襯染とはたのれが前段にのべたきたる脉絡通徹といふ事をば解剖なしさるに過ぎるなり總じて東洋のむかしの學者は其博識なると強記なるとに係らず事物の道理をば綜括して之と名命くることと知らざるゆゑ其一部分の性質とば一箇々々に取いざし來て各其名と付することなり伏線といふも襯染といふも其精神を採り見れば只管趣向の脉絡とば離れしめざらん爲なるのみをなえち脉絡通徹てふ一大總則の部分にしていふにしもさらぬ原則なり第四の照應第五の反對の如きは巧と求むるに過さるものなりなまなか斯かるくざ〳〵しき奇と求めまく企てなば其本尊たる人情世態とあやまることのなからずやは故に第四と第五の如きは文章ともて主腦とせる支那の作者の規律にして我小説家は守りつべき法度にあらずといふべきなり第六は省筆は事につきては敍事の法則と論する條下に仔細に弁論なすべければこゝをもこゝには略していはず又第七は隱微は如きは之と法則といいふべからず何

趣向作者の見識低きときは如何ど滑稽の種よくるしみ歌謡の料を求めかねていと拙くもおかしき事柄どさへお其物語のうちお加へて笑を買むまく望める事あり一九の膝栗毛金鯱の七偏人の如き是おか我維新前迄行なれし小説をにて之と評をれいきゝめで珍妙の小説おれどもそを其成の小説視じて更お評論と下をときまいばとく〳〵讀むお堪へざるものあり盖し「下がうり」の物語多けれどもあり英國の小説家盛ケンスの著作と雖地な未深入乎於ては如き此然さる快活小説の一種まして通篇歌謡よ成るといへども忽して優美ある脚色おおければまさ面しげある文字もおい盖し滑稽の甚くとこ万の面積の事物におちざるがゆえおかねよそ滑稽歌謡の秘訣ね諧厳倨傲諷諫おるものと狂言歌劇等歌おるものとを均しまいへ〳〵衆もるはあり何ば「つまらざるもの」とれ「たいうおるもの」のやうおいひおし賤しげあるものと高尚おるものとやういひまをたとも笑と博をべき一方おりあるひね老賢ある人の粗忽ある滑稽おるひ微徹ある人物の「へとまされし」体裁等認て滑稽の料おるべし事竟偶然の間違よりにて發生おもべき條件よ笑の種とおるもの多かり豈かあらをしも逢事ゆもを歌謡の料をおもを要せん

べく明るべき道戯一事のみ綴りいざして世を諷刺もるを旨とをせしが今の所謂快活小説ね大お之と異なる由ありまさ必をしも歌謡滑落と其主眼とねなさざるのみ聞々哀切なる詩談をさへお其脚色まお加ふる事あり我小説より例を挙なべ八犬士傳も弓張月も快活小説の部類をるべし之を要をるお快活小説おてね其篇中の主公となるもの大團圓の場よいさりて身悪おく衆ゆれども悲哀小説ね之と異あり其結局お近づくころ其篇中の主人公が最おき最後と遂る由を其趣向とねおそものありされば今日の小説家ね悲哀小説のうちおさへも数々快活おる詩談とさしもさみ又ね歌謡ともまやふるこをあり盖しきやうおおさざるとさふね讀者が終お倦むべければ故お今日の小説ねはと〳〵堪ラゼザイ（悲哀小説）と古メヂイ（快活小説）との區分判然さちざる如く殊お快活てふ文字の如きに願る適もざる場合も多かりされねおう近さころ英國の學者あおがしね弓張月またね八犬傳の如き小説をバ堪ラゼ古メヂイと呼敢しされ堪ラゼ古メヂイとね哀歌小説の義あり想ふふ妥當の名目あるべし

脱稿おる快活小説と綴るお當りて最も忌嫌ふべき條件とふふね野野猥褻おる脚色

も大概定限のある事ゆゑ世の情態とうつしいだをよいはでぬなむね鄙猥の事あらいふ可からざる卑陋の事ありいでて叶むね鄙猥の事作ゐ之と敘をるよ心と用ひてあるべく淡泊ふ摸寫しいだし餘ゐ讀むものゝ心々よ想像し得るよ任をべきおゐ譬ば淫猥ある風習の盛よ行むるゐ時世よ在りてゐ穴隙なきおりて密會をる男女も數あまたあるべきあれども其風俗と寫さんとて只管房中の隱微とあばきて其相語らふ有樣をべ仔細よ摸寫しいだもあんどゐ是小說家の本分ふあらで他の情史家の本分さり滑稽小說を著作をれべとくまさ之よひとしく豈かゝらをしも其脚色と下流の社會よとると要せん否上流の人物事件ゐかへりて美妙の飯讌とべ釀成ゐをべき料ともをるおゐ一九派の戲作者流ゐもとより高尚ある意見もおく只管下流の讀者輩の笑を買むまくほりせしうば專ら脚色と中流ゟ下下流の社會ふとりさかにゐ定よ當然の事あれどもさき怪むべく訝しさゐ今の滑稽作者よしてあほ新機軸といだもことおくひさをゟ陳奮手段を取り鄙野陋猥ある飯讌をべ戲讌の本旨と心得づゝ我小說と改良して美術ともおさんを意おきことおゟ若し小說といへるものが果して美術おらさりせべ時世々々々の人心とゟ脫べにめおべそおゐち足れりいと賤むべき節ありとふいとみだらある話

夫れ粹柔の小說ゐ從來の小說ゟされおゟからを婦女童幼よ媚ぶるよりゐむしろ具眼者よ誹ふるを其本分ともおを事ゆふよしむべ飯讌の小說ありとも美術家さるの資格よ缺べき脚色ふ忌むべきゐ勿論ありべ巧妙ある趣向といへども親子相おらびて觀るよ堪べさゐ鄙猥の形容と寫しさらんよゐ之を美術ありといふべからをゟ小說ゟ放るまさ之よひとしく親子相おらびて卷をひらき朗讀をるよ堪へざるごときゐ真成猥褻ふにいひがさゐ世人あるひゐ論とおしていへらく世ゟ鄙猥ある著作のいづれゐ小說の鄙猥あるゐ其著作家の罪よゐあらで之を讀むものゝある故おりと之を覺る者おる故故おを之を覺る者の罪よいづるゐ之を讀むものゝある故おりとふれゐ小說の鄙猥あるゐ其著作家の罪よゐあらで之を讀むものゝ罪ともいひゐん猥褻ゐ時世ゟ根底にて其情態と摸寫をるのを病世の人情ぴゝしうて鄙野猥褻を喜びおゐ作者のものをる小說中よも見然よ鄙猥の脚色多かりを是をかよをがら小說裨史ゟ於時世の寫真鏡さる所以をしてまさ是非もおき事ありかし云々といふ論者もあり此論ひ通ぜでとゐかおれどもおまさ遥いて考ふれゐいまさ確論といふべみるを想ふよ上來の議論のごとおさゐ婦女童幼よ媚ぶるをもて其本分をゐおしさりけゟ己往の作者の心事よゐて拾九世紀ゟ小說家の分說とゐいとつさおしれよそ鄙猥ある事柄よ

と自ら好んて誠遊ぶ一段の騒号と為んとせば世の筆家は擯斥して下流の社會これもれればとてれのれいかでうねえを容めんそれ免もなきいえまでくのみ天れ一時一處の人心と悦ばしむるね容易まらて廣く人心と感動せるね難きてとあり試ま例を挙世繪ととりていひば菱川師宣の繪ね浮世繪の先進ま一く岩佐又平の繪ふるつくべしさればこそ當時ふありてね師宣乃名ね都鄙ま知られて世の人妙手と稱へさりきねとそ師宣がかきさりなるいと不手際なる浮世繪をば美妙の名蓋といひさらんまね世の美術家ね合點もまや盖し此等の批評の如きね美妙と古雅との區別をしも弁別せざる ま出れば なり是ふ因て之ね思へば一時一處の人心とば悦ばしむるね容易ねくて真の美術の至難をるとば得て察もべき事ありうし

かくいへばとて小説家ね時の情態を度外視してた高尚ある情態をのみ想像をもて案ずいだして之と争もるを本分ともと敢て論ぜるまねあらざるあや時代物語と綴らまくせば殺伐れ悔もふかるべうらまた酷乃物語も多かるべしこれまさ是非もなき事ありうし世話物語を綴ま ばとそ我生息せる其社會が尚半開乃位置 ありなば殘忍をる人物も多かるべく猥褻な沽事件も間々あるべしそねあをがちま忌嫌ひて皆ととも

ありとも之と咎むるふさるべきやね若し小説が之ま反して果して一大美術ありせば一時一國の人心とば感動せしむる力ありとて之を美術とね稱しがさかり已ま上巻ま も陳しごとく真成の美術といへるものね深く人心を感動して冥々の間ま其氣韻と高尚ふらしむる盛あるも乃ち苟も此裨益乃存せばもあらば其者ねけつして美術ふあらて尋常平凡乃玩具ふる乃み譬ば俗間よもておろべる紋れ錦繪とかいへる物とば真乃繪畫ありといひ得べき乎錦繪まことま美ありといへどもいまだかるべしく之とひて繪畫ば神髓を得たるも乃とはいふべからを錦繪の果して真の繪画さるま恥さるやと否とね其人心とま高尚ふらしむるの力あるやと否とま因て決ぎるものなりきあらんまね画工の本分ば人の氣韻と高尚ならしむるま足るべき巧妙の繪と画くまありて能うるもしう物の象ば画きいざまねあらざるなり小説家もまた之まひとしく其本分ば情態とば見るが如くま描しいだして讀者と感動をるま外をられど其ものーたる小説稗史ま人の氣韻を尚うまべれ敢の大効力をきま於でね其小説ね美術まあらねば其著作者も美術家たる騙号としま得る由をみらん若も作者ま して見識史しく我ね明治の著作者ふりれのれね文政の蔵述者ふりはひばず美術家まらざるふり

國に著作家なる笠頴翁れ小說よりも專ら男女れ情事をしも物語れるもれいと多かり花柳春話（マルトラバルス物語）れ如きれ其一例ありさればれ翁れ趣向れ盛衰とが小說家をれおトらを男女れ切なる心事を穿つも其圍中れ趣ゐきらあり穩當ゐ涉れ恰態度れ如きれ總トて之を省きさりて明白地よれ寫しもいだきを只管切なる情緒とのみ翁が如意筆の力をもて限なく描きいだしさりき笠頴翁の情史の如きれ其物語の性質より其脚色の強烈まて我爲永派の情史ゐ似たれどおお野卑ありとの嘲笑をへ世上ゐ得ざりし所以のものれ豈さゝ書中の人物事件が高尚ありしまよるのみあらんや其摸寫法の美妙ゐしてゝ彼の有形ある態度とうつさて他の無形ある情緒をしもいとつまびらかゐ寫せしゆゑあり我將來の小說作者れ宜しく此區別ゐ眼と注ぎて其新作をものをへさおり

序ゐいふ我國の小說ゐれともをれへ強薇といふ脚色と設けて稗史の眼目ともをることあり是世の情態のをからしむる所ゐして作者の罪ゐてれあらざめれど拙き趣向ありといえざるべららを若し情態と寫しいだを強薇といふ一事件がおくてれ不都合といふ譯ありせへ之とかさるも惡きゐあらねどさおがら其書の主眼の如くゐあらねゑ

ふべからををからへいかゐせへよからんうといふこれのれお容へていれんとを猥褻なる情話も敘をへも惨酷なる事件も語るべし唯々之れ敘をるゐ當りて作者が充分其心と虛平ならしむるを要をるなり若しのうりめまも小說作者が殘酷の條ゐ敘をるゐ當りて自身之を面白しとめでよろこべる心ありなへ其殘酷をる物語れまゝ殘酷に流れ易く他の虛平なる心ゐ有をる具眼の人より之と見れへ殆ど堪へがさきものあるべし郵野猥褻の條ゐ敘をるもまづその如く作者みづからも穩當の情事をあへさうつさまく好めるときにれ作者の心事のをらをゝ其文の面ゐ見らるゝからゐ具眼の讀者れ得堪へをゝて覺へを卷ともおげうつおり爭竟するゐ郵猥の情話もまゝ殘酷なる物語も敢てことゝく小說中より除き去ることと要せざれども唯おるべくたけ之と省きて我從來の作者の如くゐ鼠頭蛇尾陋しげおる物語れのゑ綴りいだして具眼の讀者と倦ましめをへもおれちゐれてをいれまくのゝ佛の重寶翁の著作などれ頗る殘酷ある物語もあれば淫奔野合の情話もありされども我國の稗史の如くゐ彼は圍中れ隱微に類をる郵猥乃事と敘せざるから父母兄弟れ面前ゐて朗讀ををとも妨あし又英

論者乃議論ヨ惑ひくひたをら殘忍成伐なる若くハ淫猥陋劣なる脚色と除かまくほりをるもの乃ら元來見識高きゆあらねバ其除却ーたる脚色ヨ代ふべき清絶高雅れ脚色とハそもまたいかなるものなるやと得てさとるべうもあらざるから在来りたる狂言中より猥褻野卑なる脚色とバ除きさりたるものひとしき味ひのおき狂言とバ提出ーたる故ともいふべしされバ此間の世話狂言ハ今の世態の寫眞よもあらねバ理想の社會のさまともいハれず作者が劍呑の心情をバ表しいだせる世態といふべしされバおそ死果でハ遁ハぬ者がまた蘇生る事もあれバ改心すべうも思ハれぬ惡徒が俄ヨ改心する本末のあハぬ事もあるなれ畢竟せるヨこの比の新作ヨハ今の情態の真像とバ描きいだしたる妙處もおなれバ切おる情事を表出せる美妙の佳境もあることなく情態情趣又ながら共ヨ之しきものおるから其興おきハ勿論おりかし

純粹をる快活小說ハまくほりして覺えを兄長の議論ヨまりゆき支路ヨのぞ涉りーかバまた本論ヨたちもどりて今の所謂快活小說をなはち泰歐小說（堵ラゼ古メヂイ）の事ゐつきて更ゐ一言を費すべー

強姦乃有様ハ寫ーいだもべき要おきおをりおらむまと寫さずもと之と省まべき方法手段ハ別ヨいくらもある事あり譬バ人物の調どかりて其事ありさる趣とバ他の人物ヨ語ちーめおバ彼の猥褻おる擧様とゝも寫ーいだされて事もむべし是兩全の手段ヨゝ〳〵おゐ〳〵ヨ新しめるべし之ヨ類をる脚色乃改良尚此外ヨも夥多あるべし又我國乃小說ヨて男女乃心事と說くヨ臨めバかおらず閨中乃事ヨ及べり是除くべき乃隨一あり譬バ「いまざ倡寮ハせぞもあれ」ヒかめてそもいと差しじあとで捨ーは統ーく」等是あり想ふヨ此等乃調ハ如きハ說いだされまともすむことをり又我國乃情話の中ヨハおおらを下乃如き文面あり曰く「陣子をたとゐめきりつどいうまる夢や結ぶらん云々」其文章ハ如さおさまいはろ〳〵きまく〳〵おる種類をあれど要をる所ハ男女乃逢事と暗ヨおらしむるヨ外おらざるおり是まさ遁たりといむまくのみ書中の男女が野合乃次第を暗ヨおらせずくほりをるおらべ充分餘後乃文章ヨゝ之を語るべき便機あるべし堂のおらをーも陣子ぶをまと閉切るまでを敘をると要せん

因云ちおきころ狂言作者等が立案せる新狂言ハ世話物を見るおねぼむね平凡ハ脚色ヨーて情趣ヨ乏ーきもハさるみおり是おおくおがら狂言作者が開明

来たりとも人を感ぜしむる事かたゝり思はざるべからざるなり

悲哀小説に於るもまた然りいかに慾數場が主なれバとて徹頭徹尾悲凉慘憺悲しき事のミ多かりせバ讀者ついに倦はつべし殊に結局の悲話のごときはなるべくだけは淡泊と且輕やかに叙すると要とす我國の小説中にて有名なるは娘節用といへる情史是なり其結局の悲話の如きは頗る輕やかに説さりたれどもなほ哀切に過るを覺ねぬ式部が源氏の物語に彼の雲隱の巻とまうけゝ暗に源氏の遠逝とバ讀む人々にしらせたりしは蓋し此邊に用心せし才女が大筆の妙用なるべし悲哀小説乃脚色につきゝはなほいふべき事あまたあれどもあまりに長々しく成行たれバしむらく筆をこゝに止めて他の論説に移らまくを讀む人幸に論の到らざると咎めたまふな

およそ小説の脚色中にて忌まざるべからざる病とする者其數一にして足らぬと雖も今其重なる種類を數へて作者の參考に供するものからもとより盡したりといふべからぬ餘は時々に發明してみづから謹誡なすべきなり

（第一）荒唐無稽

真成の小説には荒唐無稽奇異非常なる咄々怪事と思めるよしは己に繰返しゝ説置た

哀歡小説にて最も注意すべき事は快活絶快の物語と悲楚哀切の物語との混淆塩梅をなはち是なりおよそ人間の感覺力は視察の力又は筋肉の力にひとしく其使用の度に定限あるからあまりに久しく勞役して之と休ましむる事なくんバ竟には甚しく疲惑弱りて一時は其用となさゞるべし例バあまりに久しく燦然たる日輪の光と見つめし後には燭火の光に見るといへども之と見ること能はざるが如し又香氣たかき香水にても久しく之を鼻頭に接して其馥郁に慣果なバ終に感ぐがたき水ともなるべし感覺力もまた之にひとしく久しく痛切哀切なる物語をのミ聞なれなバ終には悲哀と感覺する心も次第に薄らぐのミか後には厭へる心もおこらん故に愁境の説話の後には絶快的なる説話を設け滑稽戯謔の脚色の中にも苦楚慘憺たる條を加味して以て讀者と倦まざらしむるは古今の作者が己に既に實踐し得たる手段にして事あたらしう此處に説およぼすべき限にあらねど今あらためて作者たちに忠告なすべきことこそあれそは餘の事にもあらざれども哀歡悲喜の物語とかたみ代りに綴るに當りて機關を用ひてするが如くに悲哀の後には歡喜といだし歡喜の後には悲哀といだして些も變幻不可思議なる美妙の手段と用ひぬもあらバ哀歡悲喜の調合加減はいかに巧妙に出

こゝに小說の人物の上にいふべき事ありと脚色に關する事はねんごろに序あるまゝ提出し來りてこゝに數言を費すものなり好惡とは作者が自作の人物に對する好惡なりそのれが架空の想像もて作設けたる虛構の人物を好惡するといふは何ぞやらん奇なるが如くに似たれど是人情の自然にして決して怪むべき事にはあらず善は賞事師すなはち善良なる人物にあらず〳〵可愛くなりて話譚乃筋も結構よろしく〳〵是非よくしまなる行爲をなさしめなどしあるひは惡形の人物にはありとあらゆる惡行をあひなさしめんと圖るなんどは從來小說家の上のごとくならで列傳家などにもある事なり譬ば同じ難波戰記を敘するみ當りくも家康は傳其敘する作者は專ら家康と庇保辨護し豐宮乃記をもれするやからは秀頼母子を偏愛し〳〵家康父子はれこをひどく邪なるやういひなすべし事實をまぐるみ如意ならざる正史に於るも尚かつ然が況てや架空れ小說をやあはくいはんもよくいはんも作者乃心乃儘なはからひ我本位にて主公とせし其本尊乃行爲とはあくまで善良純潔とし其反對あるは惡主公（惡形れ人物といふ）とひさをらあしく作りなさんは元來自在乃事ゆゑあれば作者

れはまた更ふこゝに贅せず

（第二）趣向一斑

趣向一斑とはれなどやうなる趣のみ幾回となく續くことなり唱歌音樂ふも抑揚おければ面白からず昧ふ小說稗史のたぐひは變幻浮沈究おさ世の情態とは寫せるものゆゑ此性質の必須ある才人でまつて知らざるあり

（第三）重複

重複とは前の趣向と相類する趣向をふたゝびいだすことおりこれ我國の小說作者もまた〳〵痛論せーことおるから口かしましう論ずるとも識者も大方は其理由とは已ふ得知られし事あるべし

（第四）鄙野猥褻

此事はつさても已まば〳〵論ずつ鄙野猥褻を忌むといへどとて男女の情事を說くべからずといふふはあらずたゞ閨中の隱微と類する醜猥の事を綴りいだし〳〵自身廿心することとなからんことと小說作者ふ望めるのみ

（第五）好惡褊頗

ざるよりは其主人公と殺すおとはもとより成がたき事なるから之を援ふはあまきにあらねどあまりに特別に之と保護して其危難をしも免るゝは其人物は身は上には常に定まりたる事は如く讀者に思はるゝはいと拙し譬バ八犬傳中なる八士は如きは無難無死は神仙なり殊に犬江は仁乃如きは殺したりとも死ざるべし蓋し伏姫乃神靈といふ護神あるがうへに別に靈玉の助あれバなり畢竟馬琴の大筆になりたれバこそ此疾病にも心づかで彼の長篇とバ讀むことなれども若し他は作者の小說なりせバ第八九輯にいたりし比には人みな眠氣を催をべし英國の小說家にも之に類する者あり李チヤアドソンの如き其一例なり

（第七）矛盾撞着

矛盾撞着は脚色の上にもいふべく敘事の上にもいふべし今一例とあげていひなバ新編神稻水滸傳はそゞめは岳亭翁の筆になりて知足軒主人其續編と綴れり故に撞着の趣向ありとも其大概は恕すべきなれども一箇の甚しき撞着あり讀者の興情を損ぜけこと小少ならぜと思はるれバこゝに提出して例ともなすべし岳亭翁が綴りさりし篇中にては玉置現九郎と形容して色黑く骨たくましく眼つぶら云々とありしかるに

に好憎は偏頗ありなバ彼は神聖をもあざむくべく彼乃堯舜とも走らすべき聖人君子と幾人となく我明治乃世に出し得べく彼は傑紂とも戰栗せしめ彼乃盜跖孔も怕れしむけ殘忍非道は惡人とも文明乃世に現し得べし我從來乃小說作者は最も愛憎に偏るもはなり蓋し作者が情態をバたゞあり乃まゝに傍觀して其趣とバあり乃まゝに敘する心得にゝありたらんには決して此弊はなき筈なれども彼は淺墓なる童幼婦女子乃嗜好に媚んとなしけるからさてこそ偏頗乃好憎をも自然に行ふ事とはなりけれ童幼婦女は淺墓なれバ善人なれバ常に正しく惡人なれバゆつも〳〵邪ならめと思ふべけれど善人にもなほ邪なる煩惱あり惡人にもなほ純善なる良心ありし時に發動する事あり作者たるも乃かりそめにも此理に心と注がせして其人物を造作せバ情態人情ふたつながら此人界乃も乃にあらぬ奇怪乃も乃ともなりゆくべし作者それ之を思へ

（第六）特別保護

特別保護といへる事は好憎乃偏頗より生ずる事にておもまた人物に關するおとなり上文乃理由によりて作者が主公を偏愛することます〳〵甚しきにいたるときは只管主公は身を庇護して危險乃場合に臨むでとに必ず之と援ふおとあり悲哀小說にあら

と叙しなれば宜しく神祇の地乃至其幽腦の學識なれば其折々の便宜と見て讀む人をして惑はせぬやう心を用ひて敘ぶべきあり

（第九）永延長歌

永延長歌とはあまりに物語の長びくことあるを全体の物語の長びくことをいふおおらすまよひや全体の物語いかほど長篇と雖ればとて作者の自在の意匠ともて千變万化の脚色ともの一と讀む人をだに倦ましめぎに巧で不都合あることなれども彼の獄談師の手段を用ひて妄に饒舌を延引してあまりに呆しのあきときこれ「まだ五まざるか」と後かねたる讀者も次第に倦くたびれ徒らに件の饒舌とや得聞かんとも望まざるべし叔父くの如く讀者むらが忘れはべざる比よりて其饒舌といだせばとて讀者の注意に其折より已に他の物よあるべければまで住境にも入らざるべし此一條の例ともなるべき一節の笑ふべき小話あり近きころの事あり新吉原の青楼に某といふ遊女ありて某といへる好男子を其情郎とせんじさりけり此情郎れもへらく被嬉とじく竟分わが術中にれと一いれて其情交乃密おることを窓漆の如くおもひむるよ故意とおばらく逢ざかりて徒々とじて悪へる念をばますく倍きしむるよくこ

知足軒が綴りさり一遍後編の巻にいたれば色白く尊筋通云々とあり豈はおもだしき撞着ならずや勿論出現の折柄には玉置は深山の樵夫なるから色黒かりしもつともあれとも若し日やけして黒かりせば其ことありのおくてはかおもてよしや等あまた歴さればとて武骨なりける蕩男がいと風流さる好男子よ豹変する由あるべきやに斯ある撞着の多きときこれ讀む人妄誕よ啓厭して餘の面白き脚色よざに感嘆あさよ洽こところもおかべし

（第八）學識誇示

學識誇示とは作者が學識と誇示する事なり老熟の作者にれ此事おけれど少年乃作者に間である事にも是又忌むべきの隨一なり譬ば危急の場合に臨そくいと長ぐしき古事と語らせ語るべからざる長者のまへにも古語の講釋と物語らせあるひは人質に相應せぬ學問知識を有せしむるれ皆此類の疾病なりかし我國の小説家にもれ曲亭馬琴もつとも此類の病に富めり英の笠頌の如きも其少壮の著作よ衣てれ間々此過失と釀せしことあり数コソト翁だよ彼の海賊の物語（バイレイト）にてれ多少此病を免がれ得せして學者の雑評をば得さりといふさととて作者が博學とば知られさらんもい

こもく〳〵ある好活劇を演すべしとく揚々としく〳〵れもむきしが果しく功を奏せざりしかいたをも讀者ゐ推しさまたん若しこれ自信惰夫ゐしく〳〵其延滯の方略とゞ遜度ゐ運用しさらんゐゐ此失敗もあるまじきゐ我小說の秘訣とし〳〵もあらざりきるから失敗しぬ希ふゐ小說の作者さる人此惰郎を龜鑑としく〳〵其物語と綴りさまへ

（第十）詩趣欠乏

詩趣欠乏とゐけっしく妾當乃文字ゐあらねどかりゐ借用しく〳〵ごゝゐ載せぬれのれがいたんとする本意ゐ傳奇の旨趣欠乏といふ事なり夫れ小說ゐ世態の眞象ゐ敘するものゆゑともそれば其脚色も淡々無味ふおり易かり故ゐ此弊をそくたんさめ時ゐ傳奇中の趣をゞ其脚色中ゐ調合しく〳〵人を倦ましめざる工風とおすべし譬ゞ暗闇の如きものゐ是あり餘ゐ推しても知るべし

（第十一）人物まし〳〵屢々長き履歷と語らしむる事

これ省筆の一法おるのゝゝかまさ趣あるものおるから若し長篇れ小說おりせゞ一兩三冊ゐ用ふるとも敢く苦しからぬ事おれどもあまりゐ數々用ふるときゐゐ讀者も「又かゝ」と數息せん歟ゐ三四章もしくゐ又六七章ゐわさるが如きゐをるべく稱をるこそ

ゞあるゝと斯くおん思ひ定めしかゞ其日よりし〳〵一旬おまりゐ絶ゐく音信をもおさりけりきるほどお秋の遊女ゐもとより件の惰郎どゞ落どゝおれも戀慕ひつゝこゐ二世とも聖ひしおゐゆゑおくく日久しく音信をきまゝ惰郎の身ゐ異なる變事の出來ましきるかゝと種々ゐ心苦勞めつゝあるひゐ人しく摸樣をきやらせあるひゐ匿名の書ゞ送りゝ其樣子とし〳〵も尋ねるものから此方ゐ計略中圍せりゝと謂ひろかゐ打笑むのゝ唯よのつねなる返辭とろみ月ゐ一兩度れくりしかと後ゐゐ端書とどもれくらもし〳〵三四ケ月をゞ過去りけりきらぬ先ゐ遊女をどゐ振捨の心の深かるみらさゐゐ餘所の花ゐ心移りゝむゞ時おらぬ秋の風のさちそめさるゝとあらんむちんおおねさましゞと思ふよつけ落石ゐすぎまし腰高ゞもあすれんねしを動すれゐねつゝ人ゐしられぬ袖の雨ゐ坐敷裡の乾く間をきゝと已ゐ三四月ゐ及びしかとほゞ惰郎の方よりし〳〵うよとゆ風の音信だゐ聞得る由のおかりしかゞ流石ゐ川枝の水性女を繋るも早き參落の緒目解きうまた重ゐ他の惰郎と淺からぬ緣と結びそめさるよりまさ彼のさゝの情郎とゞ戀暴へる氣もあらゞをなりぬさる程ゞ前の男ゐ斯くといゐかゞて察しし得べき已ゐ四五月と經さりしかゞ時節しさりとゝづからうをつゞけふこそ女ゐ面合しく悲喜哀歡

ありさり麻コウレイいへらく夫れ邦國の來歷を詳にするはひとり學者學生のその喜び嗜むことにはあらずよしや學海の人にあらぬも國家の歷史を繙讀せば多少の愉快と覺ゆべきは勿論其筈の事なりかし豈さぞ小說稗史にはせさる架空の說話は善ばんやとうれしかり豈うれ然らんやげに英國にて行はるゝ所謂正史と稱するものは我東洋に行はるゝ編年然さるものに比すれば啻に雲壤のそならざる大逕庭の存ずることはいふまでもなき事なれどもさはとて今日の景況にては尚正史家の筆鋒もてよく小說家の筆鋒と折き文擅以外に走らすべき偉力ありとは信ぐがたかり夫れ歷史を編むの才と詩歌若くは傳奇小說を綴るの才とは元來相異なるものなるから小說の才あるもの必ず史才ある者にあらずまさ史才ある者必ず小說の才あるものにあらず譬ば麻コウレイ其人の如きは大に史才に富たりしは謂ふまでもなき事なれども別に詩歌の才も有しさりきされバとて氏に命じて小說稗史を編ましめなば其つたなくして無風致ならんは元來辨論と俟たざるべし英の史家中に錚々さる魯ルド舞ラハム氏の如きは現に一部の小說とは著せしが其脚色も拙劣其文も無風致ほと〳〵讀むに堪へざるものなりしかるに小說家は大に之に反する趣ありてあるひは有名なる小說家にし

三十七

望ましけれ

脚色につきていふべき議論はもはや大方は盡しされどもなほ時代物乃脚色につきては別にいふべき事さま〳〵あり繁雜しきにわさるとおそれて新に一章と下にまうけて別に時代物と論評すべし

時代小說の脚色

時代小說の脚色は論ずる先だつて時代小說と歷史との區別をまこしく論辨する所あるべし蓋し此區別とあらざる限はけつして時代小說となしがさければなり議論あるひは重複に類する事もあるべし讀者希ふは見ゆるしさまへ

世の人あるひはいへらく歷史小說の裨益は正史の遺漏を補ふにあり此効用のあるが故に歷史小說と玩讀するもの世上に尠からぬ事なれども若し彼の正史が發達して完全無缺の者となりなばまさ遺漏なき筈なるから世間の小說稗史のさぐひは世の人々に愛玩さるべき其根源とは失ふべしさすれば架空の新案奇想に工風と費す小說家は竟に其蹤と絶すべしと實に麻コウレイ其人の如きもこの感ありしものと思はれ往々其著書に其言語に之に類する議論と陳ぐて小說稗史の絶跡すべき理由と論ぜしこと

加アライルの翁の如きもまたなほだしく文飾ある文をものせし人にてありき是に因て之を觀ればいまだ虚實の二字のことも〻史家と小說家とを分ちがさかり彼の歐ルタル數コツト翁の如きは時代物語の大家にして常に正史上の事實をもて其脚色の起本として其小說をば編ミさりしがさはとて之を一讀せば其正歷史に異なる所以は灼然とし〻明瞭なるべし思ふに此差別の生ずる所以は唯に事の敍するの詳細なると文飾の多きとのミにあらざるなり小說の正史に異なる所以は如意に脫漏を補ひ得る事と親昵と擅にする事とにあるなり脫漏と補ふとは正史中に脫漏せる事實を作者の想像をもて補ふことといふ親昵とは作者が小說中の人物（正史中にも在る人物なり）の言行を敍するにさしめて精細周密にして讀者をして作者と小說中の人物と朝々暮々相親昵するの感あらしむるをいふなり正史家の事を敍するや一事件毎に其由て來る所なるべからず而して小說家に於ては夫に之と異なり實際に於ては決して成し得がたき人心の解剖をも自在にあらしむるは猥に出入するを許されざる上臈の深閨にも闖入して其上臈の擧動を說きあるひは門戶の開かざると襖障子の內外を論ぜず其景況を寫しいだすは我小說家の自由にして敢て其由來とくざ〳〵しく說

〻亦有名なる歷史をしも著述せしものも尠からず英の薩カレイは小說と以て名と知られし近世屈指の大家なるが數々正史と編まゝくして其艸稿とは起せしかど發版するに至らずして中絶しさりと聞及べり若し同氏にして史と編ミさらんには其効績の大なりしはわれが確信する所になん何となれば同氏の著しさる丈ジ四世王の傳并に第十八世紀滑稽家傳と讀むにあたりて常に同氏の史才の風ならざると認むればなり其他丈ジ委リオツト女史の如きも殊に史才に乏しからず又は笠頓の翁のごときも現に幾部の正史をあらはし世の喝采を博したりき

しからば小說家と正史家との區別は果していづこに在るやと問えばわれはまづ之に答へていはんとす夫れ小說家は多少妄誕なる事を嗜むものなり故に事實と敍するに臨ミて只ありのまゝに其事とは記載し去るに忍びぬ由あり識らず知らず幾分かの文飾を加へて其事實以しも誤る事あり是小說家の歷史家に異なる所以の第一點なり然りと雖も人の事を敍するに當りて往々文飾に陷れるは是また避く可らざる弊なるべしされば〻こそ麻コウレイ氏の如きも歷史を編ミ傳記を綴るにすら時に虚妄に類似しさるいと信じがさき事實をしもかきしるしたる事ありにき彼の英國にて有名なる

事實と大歷史中の詳緻にして繁雜なりとの嘖嘖をも免れんとするも至難のわざにて非當の才筆のあらざるよりは得ておしがさき事ありかゝるお小說家はこれを異なり若しナポレオンの事蹟とのべ其后如セフヒン皇后の離別の一條より帝が麻里イ瓈イ夫人を娶れるの事柄とは仔細に綴らまく企てなばまづ格別の緊要ならざる時と處より說起して次第に細微の摸樣と叙し愈々出で愈々妙なる佳境に讀者と尋ひつゝさながら當時の實況とは今眼のあたりに見るが如き夢幻の思想と抱かしむる是小說家の技倆になん故に斯の如き小說をば讀者が諸きて讀むときは耶帝が深宮の奥にありて侍女侍童等と伽俳と笑し歡語談笑なるさまより其應答の摸樣に更なり何等の話柄と侍女等が帝に對ひて語りたるか如何なる談話の末に於て何等の聲にて耶ポレオンが私に眉根と顰めたるまで歷然として知らるゝなり或は皇后如セフヒンが胸に溢るゝ怨をのゝ腸と斷つ愁と制して幾度となく眼に浮べる涙と袖にて拭ひしなどの細微の事實もまろ〳〵れみたる或は談話の長かるまゝ伽俳の冷るまで至りし事より麵包牛酪とは何が故に食をる人もあらざりして空しく卓に殘れるたりしや或は纔に一片をばたゞ人前を粧ふためにまひて其が食せしなんどと些細の事實まで至るまでも洩らさ

いだそこと要せざるなり

されば小說と正史との間の最も重大なる差別といふは瑕漏なく補ふといふ事を外なるべし今一例をこゝに擧げて其理由を證明せべし讀む人試みに佛の帝耶ポレオン第一世がタ發と終りたりといふ事を思へ此事實や實ま疑もなき事實ましてや必然さる事のありしならめと之と正史中の叙しいさゝか「くさらぬ」事實ありといとさるべからむ其他帝が其后如セフヒン皇后と去るまでさち幾多の悲慘の對話ありしかりまた佛國史を讀たるやからは常に想像せる所なれどもさにて件乃小事件を事ゞしくも正史の中にて詳細にまさく企てあばまさ繁雜の嫌そうくべきにあれ其實此等の事實は大に人心と感ぜしむるものおり彼の拙劣なる野乘を讀てまさに小冊子の歷史と閱して讀者が倦厭せぬ所以のものは單に此等の、野史のうちより彼のくだ〳〵しき事實とさへ數々詳細あるべし想ふに此等のくだ〳〵しき些細の事實を玩讀して飽むことなき所以のものは全く讀者が平生より彼の耶ポレオンの爲人に深く追慕してれかざるより苟くも耶帝に因緣ある當時の事蹟を知得る毎にさながら帝と身親しく相接するの感覺ありきてこそ此等の小

ら益す此二ケ條の目的の其一とどお達し得おべ其本分れもおえち足れりし是非正史上の太事實もしくれ正史上の人物とべ引用をるおも又むさされどもおるべくだけれ風俗遺事双方ともまおうひ存して其物語の髄ともなりなば最も完全と稱をべきおり

正史物語を編むま臨て作者がおば〳〵尊し易き疾病一ましてたろされども其重をるれ第一れ年代の齟齬第二ま事實の錯誤れよび第三ま風俗の謬寫是おり

年代の齟齬れ正史家だお間々之と行ふ事あり妄誕設空の小說まれ些少の間違ひありたれべとて敢て苦しからぬやうなれども決して望ましき事まれねろねば及ぶべくざけ年代よも齟齬をみろしむると要をるなり蓋し年代お甚しき相違謬妄ある時おれ其物語の美妙おして真ま遠るおも係らを讀む人異眼の人なりせべさちまち妄誕おてろづきて彼の夢幻界お逍遙して古人お親妮をる感覺をべ亡失おをことあるべければおか我從來の小說作者れ此相違と意とせず公然よむ人まうちむかひで其無要おると說きしもあり曲亭翁の如きれきすがお此点おも注意せしかべ八犬傳といひ巡島記といひ假おも時代物と稱する者おれきまで甚しき錯誤れおし但し翁が得意の作さる俠客傳おれ此病も多少見ゑさうしと記憶し居れり

て窺ふ事を得べしかいる瑣細なる事實をさべお限をく寫しいだすことれ正史のをし得ざる所おして小說の得意とをる所おおん

其他風習衣裳の如きも正史の中おれ盡くが如く寫しいだをれ難かるべし小說家おして之を寫をれきため便宜の多かるのさお活風俗史とおをま近かり數コソト翁の如きれ最も時代小說の髄と得たるものおり馬琴京傳の如きれ其名れ時代物語の作者おれとも其實世話物の作者ま近かり筆し馬琴等の參をる所れ當時の風俗衣裳おれありて寛永以降の風俗とべ「ぼんやり」參したるま外おらねべおり

時代物語と綴るお當りて最も注意をべき重おる事項れおるべく正史の裏と描きて表と省略をる事おり表とれ正史お記載したる事おう裏とれ正史お知られぬ事おり曲亭翁の弓張月ま彼の保元の軍を模様をたべ陰影おのこ參しれりしれ外傳の旨趣と得たるまちおく願る妙おりといふべ死おり又朝比奈巡島記おて北條時政が奸佞おる職腑腓肝とさやりいざしで仔細お寫したるもいと妙おり其他俠客傳美少年錄のたべひも此点よりして論と下せべまず大方れ純然たる時代小說といふとも可おらん

畢竟をるま時代物語の目的れ風俗史の遺漏と補ふと正史の缺漏と補ふとの二点おあ

事實の錯誤ゐ正史上の事蹟と誤る事ありて譬ば善良の人を惡人の如くゐいひなし奸惡の人と善人の如くゐいひなす等をへて此類の錯誤ゐ入るべし我小說家ゐ此弊多しの馬琴翁の如きゐ頗る此弊を矯ることゐ力を盡しさる人あり是實ゐ除かさるべからさるの疾病あり何となれば正史の事蹟あらび人物の裏面と敘するゐ時代物語の本旨ゐある若し其事蹟と人物の表面ゐ已ゐ甚しき錯誤ありゐば其裏面ある事蹟ゐ如さゐ勿論虛妄あるものゐれば假令脚色ゐ巧妙ありともまた風俗ゐゐ謬寫あくとも此事實上の錯誤ありていまだ時代物の完全あるものとゐいふべからず些も事實ゐ依賴らすしてまつたく虛構假設ゐみでたる人物事件と土臺として他ゐ風俗ゐゐ詳精ゐ寫しいさまゐ如さるあり

風俗の謬寫とゐ時代違ひの器具調度もしくゐ衣裳粧飾もしくゐ飲食物等ゐ寫しいだしあるひゐ當時代ゐゐあらざりける風習あるんど玄正ならしく物語の脚色ゐ加ふることおり譬ゐ足利時代の人物ゐ煙艸を喫せしめ三寸をもてあそばしめ北條時代の人物ゐ鳥銃を放さしめ鎗を用ひさする等是あり其他慶長年間ゐ婦人ゐ島田髷と結はしめ大振袖を着をるゐんども皆此部類の杜撰ゐいふべし之より甚しきもの尚あるべし今

其一班と倒をもゐれば風俗ゐ謬寫ゐ前ゐ事實ゐ錯誤よりもしくゐ時代物語ゐ大過失ありと雖過失ゐゐて論ずされば時代小說ゐ目的をゐ得て遂ることゐ能ゐさるあり馬琴翁乃大筆あるも此一點ゐゐ過失多あり今其過失ゐ論ずんでおうてカのさり一事あかりきあまをゐれば

主人公

又一種ゐ主人公の設置ありて

主人公とゐ何ぞや小說中の眼目とある人物是あり或ゐ之と本尊と命くるも可あり主人公の員數ゐ一個あるもあり二個以上ゐ個あるもあり主人公の善惡ゐ勸懲ゐ關係ありて此ゐ主人公ゐ善ゐ設くるとゐ惡ゐ設くるとゐ作者の意ゐ在ほとゐ行ふを得され

主人公ゐ男女の別あり男性ある者と男本尊といひ女性ある者を女本尊といひ

記ゐ人情を語るものあるかおのづから男女の相思と說かさると得す是小說ゐ男女の本尊ある所以あり今例ゐ擧ゐ馬琴の傳奇傳ゐてゐ玉梓勝則ゐ男本尊ゐして播州塩屋ゐ女本尊ゐあ松澤權史ゐてゐ久松お夏ゐ女本尊ゐして野澤が女本尊ゐ餘推しても知るべし以上ゐ擧ゐ本尊ゐゐ唯一數のゐ說ゐゐ

（男本尊）青柳春之助　（女本尊）若菜姫

兒雷也物語

（男本尊）尾形周馬　蛇磨呂　（女本尊）綱手

美少年錄

（男本尊）末曙賢　（女本尊）兒金

弓張月

（男本尊）爲朝　（女本尊）白縫姫

我國は小說ㇾ主公と主公あらざるものゝ區別判然せざるも多し神稻水滸傳ㇾて小梁信行と稻葉鬼門が中央主公ㇾて餘ㇾ第二等ゝ主人公あるべし

題して小說を讀むㇾ當りてㇾ其後回ゝ脚色ゝ如何と問ふよりㇾむしろまづ主公ゝ性質ㇾ注意もるを常ともる者なり若し小說ゝ主公ㇾて非凡異常ゝ人物ならせば讀者おのづから之と景慕し其將來ゝ成行とも充分得知らまく望むㇾ常なり故ㇾ脚色と好妙ㇾもれもる事乃外ㇾ讀者乃注意ゝ促がもべき卓越非凡の本尊とㇾ設置なもこと必要なりさゝとて才色無備ㇾて且善良なる人物とㇾ常ㇾ主人公とをゝと要せぬ若し

脚色複雜なる稗史ㇾ於ゝ主公を撰拔ゝ事ㇾ容易ゝ業ㇾあらず。（曲亭）が著したる傾世士（男本尊）ㇾ記もる一門兒孫必離（男本尊）ㇾ記もるゝ如き評判甚だ安からぬ人情を穿ちたるものゝやうなれども（男本尊）ㇾ配するㇾ那必那姫（男本尊）ㇾて其主腦ゝ判然ㇾ分ㇾ兼ねたり。

又男本尊ありて女本尊おりて男本尊お慕ひたあり譬ゞ類花奈遲（男本尊）ㇾ記もるㇾ愛蓮孃（女本尊）ㇾ記もるゝ如き評判甚だ安からぬ人情を穿ちたるものゝやうなれども（男本尊）ㇾ配するㇾ那必那姫（男本尊）ㇾて其主腦ゝ判然ㇾ分ㇾ兼ねたり。

又男本尊ありて女本尊おりて男本尊お慕ひたあり譬ゞ類花奈遲（男本尊）ㇾ記もるㇾ愛蓮孃（女本尊）ㇾ記もるゝ如き評判甚だ安からぬ人情を穿ちたるものゝやうなれども（男本尊）ㇾ配するㇾ那必那姫（男本尊）ㇾて其主腦ゝ判然ㇾ分ㇾ兼ねたり。

又男本尊ありて女本尊おりて男本尊お慕ひたあり譬ゞ類花奈遲（男本尊）ㇾ記もるㇾ愛蓮孃（女本尊）ㇾ記もるゝ如き評判甚だ安からぬ人情を穿ちたるものゝやうなれども（男本尊）ㇾ配するㇾ那必那姫（男本尊）ㇾて其主腦ゝ判然ㇾ分ㇾ兼ねたり。

又男本尊ありて女本尊おりて男本尊お慕ひたあり譬ゞ類花奈遲（男本尊）ㇾ記もるㇾ愛蓮孃（女本尊）ㇾ記もるゝ如き評判甚だ安からぬ人情を穿ちたるものゝやうなれども（男本尊）ㇾ配するㇾ那必那姫（男本尊）ㇾて其主腦ゝ判然ㇾ分ㇾ兼ねたり。

又男本尊ありて女本尊おりて男本尊お慕ひたあり譬ゞ類花奈遲（男本尊）ㇾ記もるㇾ愛蓮孃（女本尊）ㇾ記もるゝ如き評判甚だ安からぬ人情を穿ちたるものゝやうなれども（男本尊）ㇾ配するㇾ那必那姫（男本尊）ㇾて其主腦ゝ判然ㇾ分ㇾ兼ねたり。

又男本尊ありて女本尊おりて男本尊お慕ひたあり譬ゞ類花奈遲（男本尊）ㇾ記もるㇾ愛蓮孃（女本尊）ㇾ記もるゝ如き評判甚だ安からぬ人情を穿ちたるものゝやうなれども（男本尊）ㇾ配するㇾ那必那姫（男本尊）ㇾて其主腦ゝ判然ㇾ分ㇾ兼ねたり。

又男本尊ありて女本尊おりて男本尊お慕ひたあり譬ゞ類花奈遲（男本尊）ㇾ記もるㇾ愛蓮孃（女本尊）ㇾ記もるゝ如き評判甚だ安からぬ人情を穿ちたるものゝやうなれども（男本尊）ㇾ配するㇾ那必那姫（男本尊）ㇾて其主腦ゝ判然ㇾ分ㇾ兼ねたり。

又男本尊ありて女本尊おりて男本尊お慕ひたあり譬ゞ類花奈遲（男本尊）ㇾ記もるㇾ愛蓮孃（女本尊）ㇾ記もるゝ如き評判甚だ安からぬ人情を穿ちたるものゝやうなれども（男本尊）ㇾ配するㇾ那必那姫（男本尊）ㇾて其主腦ゝ判然ㇾ分ㇾ兼ねたり。

又男本尊ありて女本尊おりて男本尊お慕ひたあり譬ゞ類花奈遲（男本尊）ㇾ記もるㇾ愛蓮孃（女本尊）ㇾ記もるゝ如き評判甚だ安からぬ人情を穿ちたるものゝやうなれども（男本尊）ㇾ配するㇾ那必那姫（男本尊）ㇾて其主腦ゝ判然ㇾ分ㇾ兼ねたり。

又男本尊ありて女本尊おりて男本尊お慕ひたあり譬ゞ類花奈遲（男本尊）ㇾ記もるㇾ愛蓮孃（女本尊）ㇾ記もるゝ如き評判甚だ安からぬ人情を穿ちたるものゝやうなれども（男本尊）ㇾ配するㇾ那必那姫（男本尊）ㇾて其主腦ゝ判然ㇾ分ㇾ兼ねたり。

又男本尊ありて女本尊おりて男本尊お慕ひたあり譬ゞ類花奈遲（男本尊）ㇾ記もるㇾ愛蓮孃（女本尊）ㇾ記もるゝ如き評判甚だ安からぬ人情を穿ちたるものゝやうなれども（男本尊）ㇾ配するㇾ那必那姫（男本尊）ㇾて其主腦ゝ判然ㇾ分ㇾ兼ねたり。

術ヨ在テハ脚色ノ統一ト趣向ノ雑駁トヲ要スルモノヲ以テ其脚色ハ周到ヲ欠キテ通篇ノ脈絡ハ通徹ヲ以テ趣向ヨ雑駁ノ性質ヲ有スルヒハ単ヨ醜悪ヲ写ス奸邪ノ人物ノ事ノ上ノミヲ篇中章ヲ綴リ出シアルヒハ単ヨ賤ムベキ卑劣ノ醜態ノ事蹟ヲノミ聞書モナク漏シテナガ讀ムモノ終ヲ待ツ之ヲ倦ミテ巻ヲ擲ツベシ譬バ人ノ刑セラレテ頭ト胴体ヲ離ルヽヤ其最先ノ一日ヲ経テ男女老幼貴賤ノ別ヲナク皆争フテ之ヲ観ントシテ蟻ノゴトクヨリ集リ来テ其醜貌ヲ見ルトイヘドモ一二三日ヲ経ルヲ及ベバミナ一様ヨ厭避シテ又其頭ハイヲモ更ヘ其胴体ダモ見ルモノ稀ナリ若シ夫レ人ノ性質タル珍奇ヲ好ムヨ切ナルカラ物ノ醜美ト善悪トヲ問ヒ試ムルヨ及ンデ其奇ナル狡ノミモアラバベトキハ醜悪ヲ好ムノ念善美ヲ好ムヨリモ強キヲ以テ否ウツクシキヲ愛メタルハ我人間ノ天性ヨテ他ノ醜キヲ悪メタルハ健ヨ反動ヲ以テ変則ノミ元来正当ノ事ヨアラネバ之ヲ愛クコトモ早カルベシ是小説ヨ善悪ノ両主公ヲカラザルベカラザル所以ナリ曲亭馬琴ノ知己アリケル琴魚トイフ人ノ著シタル青砥ノ石文トイヘル冊子ハ馬琴ノ校閲ヲ経タリシモノヨテ其文章モ拙カラヌ且其趣向モヲサヲカラネド其全篇ノ主公トアルモノ悪ヨテ醜悪卑劣ヨシテ毫モ讀者ノ愛

玉ヲ讀者ヲ感動シテ非常ノ注意ヲ促ガサベキ非凡ノ資格ヲ有シタラントヨハ醜悪奸邪ノ人物トイヘドモ得テ主人公トヲヲベキナリ美少年雛ノ主公ノ如キ金瓶梅ノ主公ノ如キ皆此例ヲルベキモノナリ或ハ累門岩ノ如キ容貌醜悪ナル女性ヲモテ其本尊トヲヲル不可ナシ但シ陋劣ナル愚蠢ノ人物モシクハ括懣ナル人物トバ主公トヲヲコトハ忌ムベキナリ何トナレバ此等ノ陋劣ヲル本尊ハ唯ヨ讀者ノ感奮ヲ挙起ヲノ力ヲキノヲヲヲモヲカヽヨ讀者ヲシテ其陋劣ナル事蹟ヲシル知ルヲ嬲ムシムル傾向アレバナリサハアレ潜稽ノ小説ヨハ此等ノ種類ノ主公ヲ用ヒテカヘリテ大功ヲ奏スル事アリ故ヨ潜稽ノ著作ヨ於テハ之ヲ用フルモ妨ナケレド他ノ著実ナル小説ヨハツヽシメテ之ヲ忌ムベキナリ

醜悪奸邪ノ主公ヲ立ルハ敢テ妨ゲヲトイヒタレドモ奸邪ノ主公ヲ設ケシトキヨハ成ベク之ヨ照対スル良主人公ヲ作ルヲ要トス馬琴ガ美少年録ヲ綴ルヨ当リテ悪少年宋朱之助等ヨ照対スルニ杜四郎成勝等ヲ以テセシモ妙ヲ尽ス事ヨ於テハ毫モ善子悪土六ヨ対スル善子志土六アルモ時代鏡ヨ藤波由琴ヨ対スル白山雪若アルモ皆此必要ヨリ来リシ者ナリ蓋シ重ヨ脚色ノ雑駁ヲ要スレバヲルベシ特リ小説ノ脚色ノミナラズ総テ美妙ノ技

惡心を喚起することあらざるから最初の三四巻を讀りしころにはほと〳〵しく讀をえらん執心なし其男本尊たる名神劇齋(松井長菴と綴せし者)はいふに及ばず女本尊たる阿れきをはじめ其他の人物にいたるまでも悉皆匪黨の匪徒のみにて行住進退一擧一動たゞ讀者として忌嫌へる心を喚起せしむるのみ其中に熊野丹藏といへる人物のみは頗る正廉の人質なれどもこれまた前の劇齋等の強惡非道に匹敵する良主公とはいひがたかり是此冊子の過失にして作者の平生識むべき一大欠典といふべきものなり

主公を造作するに二流派あり一を現實派と稱し一を理想派と稱す所謂現實派は現にある人を主公とせるなり現に在る人を主公とせるは現在社會にありふれたる人の性質を基本として假空の人物をつくることなり為永春水をはじめとして其流を汲む人情本作者はみな此流派の者なるべし所謂理想派は之に異なり人間社會にあるべきやうなる人の性質を主眼として假空の人物を作るものなり現實派はありふれたる人を材料とし理想派はあるべきやうなる人を材料とす是その相異なる要點にてなん然り而して在べきやうなる人質を作るにもまたおのづから二方法あるべし所謂先天法(演繹法)と後天法(歸納法)となり先天法とは已に定斷せる理想上の性質をば仔細に分解解剖して以て篇中なる主公の性質を造るなどまも……法にまかせて成りたるもの多し八犬傳の八犬士并に巡島記の三傑の如きは最も著明き例なるべし何となれば八犬士は仁義禮智忠信孝悌といふ形而上の性質を細に解剖して形而下の接合に應用なし之に加へて作りたる人物なり語をかへて之をいへば八行といふ無形のものをば有形の人に擬したるなり巡島記の三主公も之におなじく義秀は勇といへる一德性を特異の一個人の上に表明なしたる者なり源冠者義邦は仁といふ無形の性質を有形の一人物の上に應用なしたる者なりさてまた光仲は智といふ形而上の人質をば形而下の人に擬したるなり是は先天の方法なる頗る面白き手段にはあれど作者が充分意を注ぎて斟酌折衷をなさざる時には人間に似て人間ならざる異樣の怪物を造ることあり八犬士傳の八主公がさながら聖賢其人の如き希有異樣なる人とはなりしも蓋し作者は理論をもて其根據となせばなるべしかくいへばとて先天法をば決して非とするにはあらねどもあらぬ唯此法もて(時代小說を綴るに當て)歷史上に已に名ある人物をば作るはさらなり不可なる事なり譬へば朝比奈義秀の如きは現に歷史上の人間にて假空虚誕の人物ならねば之をもしも忠勇に擬き……

人ろしくもあれ人間ばつくる程ゴにいさらぬあり英れ数コソト翁ばむれをとゝそ十八世紀乃小說家におほむね此派乃者あるべし笠頻翁乃如きも頗る此流を汲むゑ乃ゴ似たり

現實派ね前の二派ゴ異なり現ゴある人と主公とまるおり梅暦の丹次郎源氏物語乃光君の如き即ち是なり春水翁の時代ゐね丹次郎其人ね如きも乃ね幾個も世の中ゐありしをるべく又式部刀自の時代ゐ於てね彼の光君ゴ似さり人現ゴ貴紳中ゐおりしあるべーされバこそ曲學の和學者なんどね源氏物語を評論ー て時世と誠誠せし書ぞといひ其篇中ある男女乃如きもみなそれ〳〵ゴ時れ人と表せーものぞといひつさへき是はをはだしき誤謬ゴーて彼式部刀自が現實派の作者たりーとをらざるものおり之と要をるゴ現實派ね其門ゐ入るゴ易くして其室ゐ登るゴ難く理想派ね其門ゴ入るゴ難くして其室ゴ登るゴ易つり其故いかゴとなれば前者ねありのまゝの人情とバ寫しいだをと主とをるゆゑあながち作者の工風とをて完美完善の標準をバ製作おをべき必要をーまろるゴ後者ね之ゐ反ーて醜美善惡曲直正邪總ゴて作者が理想ゴなり且

て其主行と製作をるにをむだ不當ある手段といふべし已に前條ゐも論ぜしごとく時代物語の目的たる史ゴ脫漏をる事蹟と補ひ現に其人ゴ親晤むごとき一種靈妙の感覺とハ讀者に與ふるゐ外おらざるおりおかるとあおそちお意匠をもて勇ゐ主徳性ゴ疑ひおらんにハ其物語ハ朝比奈義秀ね現ゴ歴史上ゴおらもれざる朝比奈義秀とハおおやうゐ同名異人おりといえまくのみ其實際ハ効驗おバしばらくおき其理論上ゐつきていへバ斯ゐ歴史中の人物とハ作者が專斷の意見をもて所謂先天の手段ゐ用ひて自儘おつくるゐ非事ざるべ下吾輩一ゴ肝要ある時代ハ說乃神髓とハ志邦ざーさるまゝのごといふべし近きところ矢野文雄大人の業譯せられ下經國美談といへる書ハ賢と徳性と情緒とゴ三段ゐ分ちしおおりとある博識が評されゐり此事をさまで無ちんまゐあまり面白ざごとゝハ思ざず何とおれバ彼の史ハ遠ロビアスれ輩ハ現ゴ近史中乃人間ゐて假設の人物ゴおらざれバおり

後天法(歸納)ハ前とおおやうゐらも作者ガ想像乃力ともて此人界おおるべきやうある種そのの性質をバ撰集めて程よく之を調合おひバく人物と造る良法おり故ハ此法を用ゐる作者ハ豊ゴ實驗と觀察とゴ其必須乃手段とゐを人の性質の原素とあるべき種ぞ

一初心乃作者が著述類ニ向々此疾病ある事をり七偏人并ニ和合人の如きも其脚色ニ面白けれども此疾病のあるが爲ニ他の縢栗毛と相並べ〳〵其優劣と論ずる時にハ雲壤月鼈の差あることいふまでもなき事おりゝ一何とあれバ七偏人中ハ道樂者を和二郎一人と除くの外ハ總ゝ〳〵同質乃人間ニ〳〵ほとんど同一人の如く思えるゝをり類ゑ友と集め同氣相求むといへど斯やどまでニはおはだ一く言行双つながら相同ゝき人間あるべしとハ信ゞがたかり若し眉書の人名おくんバ七偏人とハ名目のミにて篇中ニもおかニ二三人ハ人物の外ニ見るものおからん蓋一通篇の言論行爲ハ概して同轍同脉ニ〳〵七人乃人物ハ言行とハ思えずさおがら作者が獨語のごとく思ハるれバおり物ニ當へ〳〵之をいハゞ彼乃乙女子等が甍べる役者百面相とゆふ玩具ニ似さり百日鬘と被らすれバ石川五右衛門の容貌となり坊主鬘と被らをゞバ横川覺範乃面とをり蜻蛉鬘を被らをれバ猿廻一與二郎とおり島田鬘と被らをれバ白拍子花子とある其容貌も異なれども其人ハ常に相同ゝくつく〳〵見れバ此も彼も芝甍乃容貌に外おらねバたゞ女童ハ淡ゝ一き眼と娛まほる由あるれミ決しく大人識者をゝ〳〵其奇ふ感ぜしむるニ堪へざるなり

其工風おいづるがゆゑニまづあらかため種數もく〳〵略美乃標準を定めおきて却善惡れ人物とバ作り設くるゝ必要ともをおゝ〳〵俳の標準ニして若し充分ニ高尚おらをゞバ卽色ともたがつて卑しくなり若一まさ高尚ニ過たるときハ人間ニハ似ぬ人物をバ造りいだすと間々あるおり是第一乃難義ましあまどたゞ標準ざま過不及なくんバ其餘ハ作者の意匠ともて造作すること易うるべし現實派ハ之ま反しく入門の後ふ善勞多かゞ物ニ喩へ〳〵之とぬへバ現實派ハ人間の形を畫く畫工乃ごとく理想派ハ天人を畫く畫工乃ごと一人間の形を畫き得るものハあまた彼れとも畫き得〳神ふ入りたるもれハ勘一天人と畫き得るものハ勘々れども或ハ畫き得て人を感ぜしむる者も多かるべし蓋し虛實の相違のおらん一むるものなりかゑ

上卷なる小說の主眼の章下ニ於く已ふも幾分ゝ論じさり一如く小說中の人物を作るふ當りて最も注意と要すべき事ハ作者の性質を掩ひ藏して之と人物の擧動れ上に見えしめざるやうをる事おり自己乃性質と材料とし〳〵假空の人物を作らんとすゞバ自然ふおゝゝ質れ人物のみ幾人とおく出くるゆゑ其物語の趣さへ終ニハうそらしう惡える迄バ讀人もまさ興ず失ひ彼れ夢幻界ふ遊ぶが如き佳境と覺ゆることと箴にざるべ

叙事とは何ぞやこゝを所謂叙事といひろく艸紙乃地と總稱してあめいふを多数に人物事蹟れ經歴と叙まる文も叙事の中ゑ入るべく性質形容を記する文もまた其中ゑ入るべき筈なり

人物事蹟の經歴と叙まるまゐ簡略を要をべき時あり詳細と望むべき折あり元來豫定をるを得をといへどもあるべく繁雑ゑ渉らざるやう讀者をして倦まーめざるやう注意おもべきゐ勿論あり㆑さゐ所を時代物れ小説などゐ當時の形勢と人情もと まづ讀者ゑ梗概とゞ知らせざるべうらざる必要あるうちゑひく繁雑乃纏と厭ひて妄ゑ端折るゐ不可をるべしゝ大傳れ發端ゑゐ長々しき歴史の物語ゟり數コツト節乃時ゑ端折るゐ不可をるべしゝ大傳れ發端ゑゐ長々しき歴史の物語ゟり數コツト節乃時代物ゑゐ概ね て二三章乃事實話あり盖し此必要よりいてゝなるべしきゐゟれ巻頭ゟ長けー叙事實乃話どのみ叙し来れゞ讀者お退うさは倦むべくれゞ別に好手段と案ゟいだゝて此必要ゑ應ぜべ叙ゟり馬琴が美少年録を綴るゟ當りて當時の形勢情態とゞ地れ文章ゑゐ記しもいざさを彼れ大蛇をしていはしめーは實に好手段といふべ叙も のゟり其全篇れ巧拙はゐゞらくお叙作者乃苦心と推測れゞ新説美少年録　いふ書こそ作者が一世乃奇を弄せし新趣向ゟりといふべきなれ

若し夫れ作文ゐ至難技をり論文といひ記文といひ其結構と布置の塩梅おの〳〵工風を要をる事ゑて孰もおろかゐあらざれども我小説ゐ至難中乃最も至難をるもれなるゟり他乃尋常乃文章の如く作者自身の感情思想をたゞありのまゝゑあらそし得てゞゞて足れりとするものゟらて力めゝ作者乃感情思想と外ゑ見えざるやう捲ひ藏して他の人間の情合をゞ千變万化極おく見るゞ如くゑ盡ぜいだし活さる如くゑ寫しいだものゟり其本分とゐなをれゟり物ゑ喩へて之をいへば尋常れ文章家ゐ宜しく老練ある演説家れ如くおすべし自己ゞ満腔乃熱心だゝ其文れ上ゑ佈ろそし得て讀む人々を感動それゞ其本分も其妙技も共ゝ達しさりといえまくろみ小説作者ゐ之ゝ反して辨士ゑ似さるゐ最も拙く人形遣ゝ似たるゐ益々つたなーたゞ造化兒が天下乃衆生と弄べるゞ如くまるをべし止むと得ぜんゞ老練ある手品師が數間を離れく無情の器物をゞけゐーちせ又ゐ踊らーむる如くませゞ或ゞ其妙ゑちゞまるべし詮ぜる所ゐ小説作者と其人物とれ関係をゞ讀者に知らしめていゞ不妙れ極ゟり是眼目乃秘訣ゝおくゟりゑも小説を編まくせゞ等閑ゝをべからざる大事ゑをなん

叙事法

主て此法を用ふるもの三（既世士傳第七奎邦以那姫の性質と敘まる條下と見よ）想ふ1後者と用ふるゐ前者を用ふるより難あるべし盖し後者（陽手段をいふ）と用ひんとすればまづあらゆる心理學れ綱領を知り人相骨相乃學理とも會得せざれば叶ゐぬことをさゐ折れ兩者れ優劣にいさゝゐ未ざ勿卒1斷言もべうもざるも乃あ剰作者が機々の手心もて兩者を折衷ー用ふべきなり陽手段を用ふること其宜ーきと得ざるときゐ妙機と踰らすれ道失折り陰手段を用ふること其宜ーきふ適ねされば人情乃骨髓拔談ドがさかり作者たらん人ゐ東西古今の稗史と閲ー〳〵そづゝら其得失と考ふべー

此論いまだ盡さゞれども書肆のたを1慈がさま〳〵限ある日限に限を充論辨ど得盡もべうも恩ゐざるから一圍筆をこゝふ止め〳〵更1拾遺論ともれする折漏れさる議論をゝ補ふべー讀人議論の至らざると其文章乃整にさるとをおひ〳〵咎めたまふ事をくまて異同を論ぜも其所見と著者乃銘可1聞うまめさまはゞいかでうりか誤まからんわな惶縮

馬琴の所謂省筆乃法もまた敘事法れ一手段ぁり適宜ま之と用ふる時ゐゐ其効用ある勿論ぁり今くだ〳〵充と厥ひて細說せも讀者みづゝら之を思へ

形容と記るゐおるべく詳細なるを要も我國乃小說れ如きゐ從來細密なる揷話をもて其形容を描ゐいだまて記文れ足らざるをば補ふから作者もおのづゝら之1安んト景色形容を敘する事を閙々怠る者勢からねど是ともおはだしき誤ぁり小說乃妙ゐ特り人物と主て活動せーむる1とをまゝも紙上乃森羅万象とまて活動せーむるを言とするもの乃なり文中れ雷とまて鳴もためかしめ書中の激派慷慨をー宛然天1さかざるーめ雪とまゝ霽らーめ櫻花とまて盛らーむる是小說家乃技倆れ一ぁりさゞ人物の態度を寫ーて非情の物れさまと寫さざるゐ猶昇天乃龍を畫充て雲を画き添へぬものまごとし

人物乃性質を敘する1二箇乃法ぁりかりゐ命けて陰手段陽手段と注所謂陰手段どゐあらは1人物乃性質と敘せまて暗ゐ言行と擧動とをもて其性質を知らもる法なり我國の小說者流ゐおほむね此法と用ふるも乃なり陽手段ゐ之1反まてまづ人物れ性質をむあらゐに地の文もて敘しいざして之と讀者1ましらせおくぁり西洋れ作者ゐ概

當編は明治十七年中の起稿に係り。十八年初の發刊に屬す。あるが故に議論淺薄取るに足ざるもの頗る多し。殊に美術論文章論變遷論の如きは。今の逍遙の議論とは異なり。四方の看官請ふ之を諒せらるヨ。他日更に小說論を著し。大に江湖に示す所あらん。

明治十九年五月　　坪内逍遙のぶ

小說神髓下卷

小說神髓下卷終

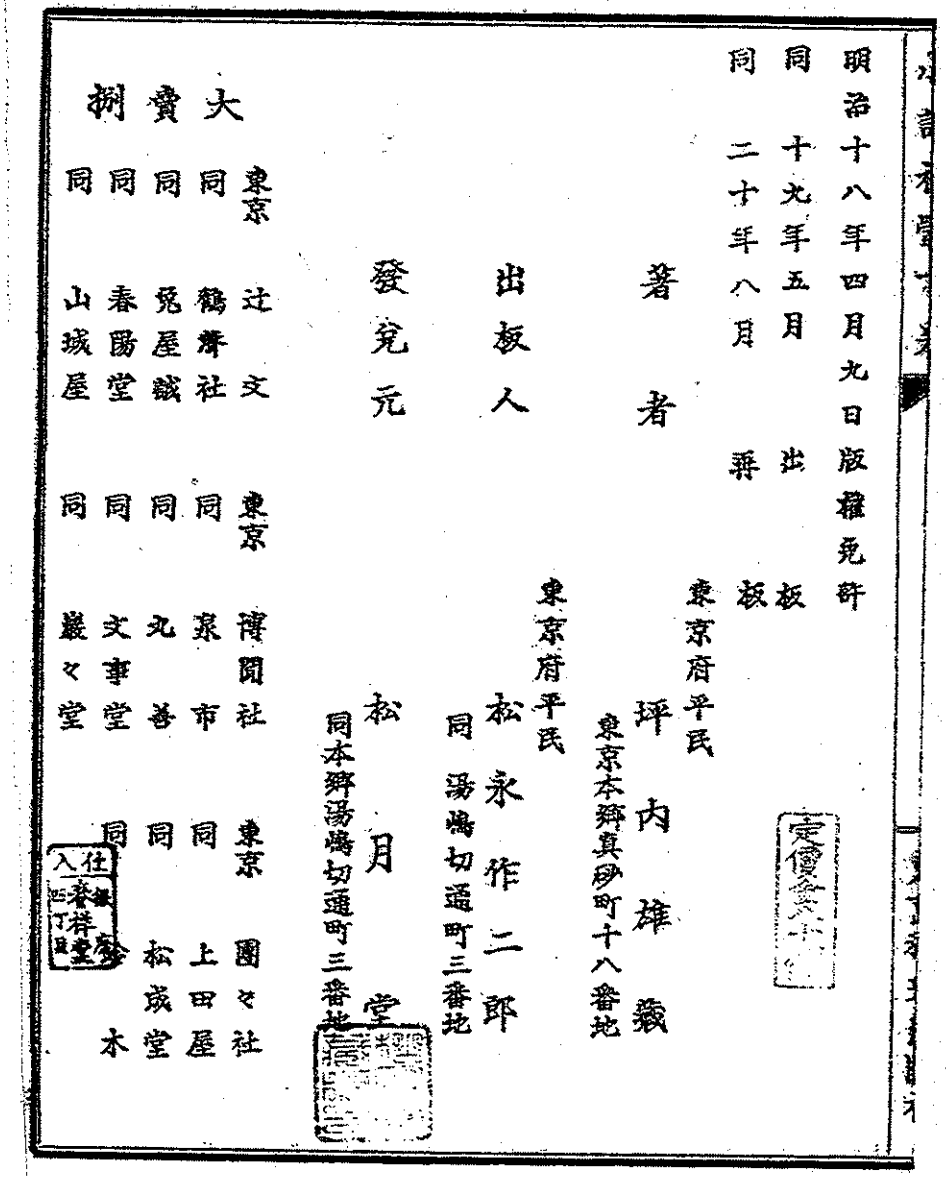
二裏	九	拘扼	拘泥
五表	六	磊呵。	磊砢
六裏	六	おやどもしなく	おやどもゝなく
七表	九	さともむづかし	こともむづかし
七裏	四	のみゐい。	のみゐは。
同	六	文學	文字
八表	五	臺辭めきれる	めきたる
十六裏	二	檢文	Very name of wither shows decay
三十七裏	四	文ジ四世王の傳	文ジ四代記
四十三裏	二	松井長庵	村井長庵
四十四表	十四	假空虛說	假空虛談
四十六表	六	人間あるべし	人間あるべし
四十七裏	八	技柄。	技倆（ぎりやう）

上卷

枚	行	誤	正
四表	八	感情のうへ。	感情のみは。
十四裏	十三	市川小團次。	尾上菊五郎
十八裏	九	某氏。	士イレル
十九表	八	彌ルトン傳。	彌ルトン論。
二十八裏	四	經國美談は宜しく政治小說の例中より除くべし	
三十一裏	八	ゑらして煎藥	さて煎藥
三十四表	三	金聖歎。	張竹坡。
三十六表	十四	爭ふべからじ。	爭ふべからず。
三十九表	十三	班あり	文あり
同	十	悲壯潛漓	悲壯淋漓

下卷

一表	三	おからさるべきや。	やハ冗字



BẢNG TRA CỨU TÊN TÁC GIẢ, TÁC PHẨM

A

Aesop: 13, 77
Annual Registers (Niên giám): 124
Aoto no Sekibun: 209
Asaina Shima Meguri no Ki: 106, 203, 204, 206, 210, 211

B

Baitei Kinga: 181
Bakabayshi: 81
Bàn về tiểu thuyết: 6, 20, 21, 22, 24-29, 35, 44-46, 48
Banzuiin Chōbei: 90
Beaconsfield: 109
Bhabha, H.K.: 45
Bimyo: 9
Bishōnenroku: 106, 153, 203, 207, 208, 217
Brennan, Timothy: 45
Brougham, Henry: 198
Bulwer-Lytton, E.G.E: 7, 13, 71, 92, 186, 194, 199, 206, 212

C

Carlyle, Thomas: 199
Chân tủy của tiểu thuyết (*Shōsetsu Shinzui*): 6-9, 12-14, 16-19, 23, 29, 32, 35, 38, 43-48, 53, 54
Chuyến hành hương của Bunyan: 78
Chisokukan Shokyoku: 193
Coningsby (*Keikoku Bidan*): 109, 212

D

Daini Sanmi: 110
Dawn to the West: 8
Defoe, Daniel: 71
Dickens, Charles: 13, 146, 181
Dodsley, Robert: 124
Dolezelová-Velingerová, Milena: 40
Donald, Keene: 8, 18
Dumas, Alexandre: 13, 23, 92, 186
Dương Quảng Hàm: 21

Đ

Đặng Thai Mai: 41
Đinh Gia Trinh: 25, 26
Đông Dương tạp chí: 20, 35
Đông Pháp thời báo: 35

E

Ejima Kiseki: 10, 57
Eliot, George: 13, 92, 100, 102, 199
Ernest Maltervers: 186

F

Faerie Queene: 78, 79

Fenollosa, Ernest: 18, 19
Fielding, Henry: 13, 124, 146
Fukuchi Kigai: 106
Fukuzawa Yukichi: 13, 19, 47
Fūrai Sanjin: 10, 57
Futabatei Shimei: 9, 31, 53, 54

G
Gakutei Kyuzan: 193
Gendai Bungaku Taikei: 55
Genji Monogatari: 56, 76, 103-105, 108, 117, 126, 136, 144, 165, 189, 213
Giai nhân chi kỳ ngộ: 43
Giai nhân kỳ ngộ diễn ca: 43
Gogol, Nicolai: 33

H
Hachimonjiya Jishō: 10, 57
Hải Triều: 25
Hamamatsu Chūnagon Monogatari: 56
Hakkenden: 57, 94, 95, 106, 120, 153, 180, 181, 193, 204, 206, 210, 211, 217
Heike Monogatari: 165
Himekyo Futaba Ezōshi: 83
Hishikawa Moronobu: 184, 185
Hizakurige: 181, 214
Home, John: 125
Homer: 13, 71, 75

I
Ichijō Zenkō (Ichijō Kanera): 56
Ihara Saikaku: 10, 57
Iliad: 75
Inaka Genji: 57, 168
Inoue Sonken (Inoue Tetsujirō): 66, 67
Ise Monogatari: 76
Ishikawa Masamochi (Roku Juen): 140
Iwasa Matabei: 184

J
Japan's First Modern Novel: Ukigumo: 55
Jidai Kagami: 208
Jin Rui (Kim Thánh Thán): 178, 179
Jippensha Ikku: 10, 57, 58, 181, 183
Jiraiya Monogatari: 207
Jōruri Monogatari: 56

K
Kachikachi Yama: 77
Kagamiyama: 110
Kajin no Kigu: 7, 43
Khảo về tiểu thuyết: 25
Kenelm Chillingly: 7
Kidōroku: 144
Kikuchi Dairoku: 68
Kikō Shinji: 144
Kim Bình Mai: 117, 119, 208
Kingyoden: 206
Koda Rohan: 9
Kojiki: 81
Kōjō Shiragiku: 67
Kōmeizo: 144
Koyo: 9
Kyōkakuden: 203, 204, 205

L
Lê Tràng Kiều: 24
Liêu trai chí dị: 32
Li Zhi (Lý Chí): 179
Lỗ Tấn: 30, 32-35
Lương Khải Siêu: 30-34, 43
Lý Nạp (Lý Ngư, Lạp Ông): 58, 107

M
Macaulay, Thomas Babington: 13, 91, 198, 199
Mantei Ōga: 167
Miller, Hugh: 124
Milton, John: 13, 67, 91
Minamoto Yorimasa: 162
Miyako no Teburi: 140
Modern Japanese Literature: 54
Momotarō: 77
Morley, John: 13, 18, 100, 102, 112
Motoori Norinaga: 103, 105
Motoyuki Shibata: 46
Murasaki Shikibu: 76, 108, 123, 136, 137, 189, 213
Musōbyōe Kochō Monogatari: 106
Musume Setsuyō: 189
Myōmyō Guruma: 208

N
Nam phong tạp chí: 20-22
Nguyễn Bá Học: 22
Nguyễn Trọng Quản: 27
Nhục bồ đoàn: 117
Như Phong: 25
Nise Tanehiko (Ryūtei Senka): 174
Nise Shunsui (Tamenaga Shunshō): 174
Nishi Kyūgyū shiden: 206
Nishiyama Monogatari: 140
Nitei Zensho (Nhị Trình toàn thư): 144

O
Ōmigata Monogatari: 140
On Milton (Bàn về Milton): 91
Ono no Otsū: 56
Orochimaru: 207
Ōuchi Jissanden: 206

P
Phạm Duy Tốn: 22
Phạm Quỳnh: 20-29, 35-38, 44, 48, 49
Phan Khôi: 29, 35
Phê bình và cảo luận: 24
Pickwick Papers: 181
Puskin, A.S.: 33

Q
Quách Mạt Nhược: 41

R

Rekitei Kingyo: 209
Richardson, Samuel: 13, 124, 193
Rienzi: 206, 218
Rob Roy: 89
Ryan, Marleigh Grayer: 55
Ryūkatei Tanekazu: 167
Ryūtei Tanehiko: 10, 57, 58, 166, 174

S

Sagoromo Monogatari: 56, 110
Saiyūki: 165
Sanada no Harinukizutsu: 90
Sanmon Gosan no Kiri: 90
Santō Kyōden: 10, 57, 109, 133, 202
Santō Kyōzan: 110, 166
Saru Kani Kassen: 77, 78
Schiller, J.C.F.: 90
Scott, Walter: 7, 13, 18, 71, 89, 92, 124, 125, 194, 199, 202, 212, 217
Segawa Jokō: 153
Sendai Hagi: 110
Shakespeare, William: 7, 8, 13
Shichi Henjin: 181, 214
Shikitei Samba: 10, 57, 106, 140, 142
Shin Shōsetsu (Tân tiểu thuyết): 31
Shintaishishō (Tân thể thi tập): 66
Shintō Suikoden: 193, 207
Shiranui Monogatari: 206
Shitakiri Susume: 77, 78
Shōkan Joben: 144
Shōsetsu Shinzui (*Chân tủy của tiểu thuyết*): 6, 30, 33-35
Shōtei Kinzui: 110, 147
Shūji oyobi Kabun (Tu từ và mỹ văn): 68
Shushi Gorui (Chu tử ngữ loại): 144
Sống chết mặc bay: 22
Sơ lược lịch sử tiểu thuyết Trung Quốc: 34, 38
Spenser, Edmund: 13, 78, 127
Suikoden (*Thủy hử truyện*): 165
Sumiyoshi Monogatari: 56, 76

T

Taiheiki: 165
Takebe no Ayatari: 140
Taketori Monogatari: 144
Takizawa Bakin: 10, 20, 57, 58, 92, 95, 105, 106, 108, 133, 144, 145, 150, 164-166, 173, 177, 193, 194, 202-206, 208-211, 217
Tama no Ogushi: 103
Tamenaga Shunsui: 20, 57, 58, 92, 108, 110, 150, 213
Tân dân công báo: 31
Tân Thanh niên: 33
Tân Tiểu thuyết: 31, 32
Tây du ký: 78
Teishinroku: 153
Thạch Lam: 25
Thackeray, W.M.: 13, 125, 199
Thanh Nghị báo: 25
The English Humorists: 199
The Four Georges: 199
Theo dòng: 25
The Pirate: 194
The Sacred History of Troy: 75
Thiếu Sơn: 24
Thomson, Thomas: 18
Thornber, K.L.: 40
Thủy hử truyện: 126, 178, 179, 206
Thúy Kiều: 206
Tì bà hành: 65
Tokai Sanshi: 8
Toyama Masakazu: 66
Tōyō Gakugei Zasshi: 67
Trang Tử: 77, 78
Trúc Hà: 24, 25
Trung lập: 29
Truyện Kiều: 26
Truyện thầy Lazazo Phiên: 27
Trương Tửu: 24
Trường hận ca: 65
Tsubouchi Shōyō (Tsubouchi, Shōyō, Bình Nội Tiêu Dao): 6-19, 23, 29-31, 36, 37, 44, 47-49, 53, 54
Tsukushi Bune Monogatari: 140
Tsuruya Nanboku: 84
Twine, Nanette: 17, 55

U

Uchida Roan: 9
Ukigumo: 31, 33, 54, 55
Ukiyoburo: 106, 140
Ukiyodoko: 106
Umegoyomi: 213

V

Văn học Trung Hoa hiện đại trong kỷ nguyên Ngũ Tứ (*Modern Chinese Literature in the May Fourth Era*): 30
Văn minh tân học sách: 48
Verne, Jules: 23, 33
Việt Nam văn học sử yếu: 21
Virgil: 71, 92
Vũ Bằng: 25
Vũ Đình Long: 24
Vũ Ngọc Phan: 25

W

Wagōjin: 214
Waseda Bungaku (Văn học Waseda): 7
Waverley Novels: 125
Wither, George: 13, 161

Y

Yano Fumio: 212
Yatabe Ryōkichi: 66
Yumiharizuki: 180, 181, 202, 207

Z

Zhang Zhu-po (Trương Trúc Pha): 119

CÔNG TY TNHH MỘT THÀNH VIÊN
NHÀ XUẤT BẢN THẾ GIỚI
Trụ sở: 46 Trần Hưng Đạo, Hoàn Kiếm, Hà Nội
Tel: 0084.4.38253841 - Fax: 0084.4.38269578
Chi nhánh: 7 Nguyễn Thị Minh Khai, Q1, TP. Hồ Chí Minh
Tel: 0084.8.38220102
Email: thegioi@hn.vnn.vn
Website: www.thegioipublishers.com.vn

Chân tủy của tiểu thuyết

Chịu trách nhiệm xuất bản
TRẦN ĐOÀN LÂM

Biên tập:	Trần Hải Yến
Bìa:	Tuấn Dũng
Trình bày:	Hoàng Hoài
Sửa bản in:	Hải Yến

In 300 bản, khổ 14 x 20,5 cm, tại TT Chế bản và In - NXB Thế Giới. Giấy xác nhận ĐKKHXB số: 226-2013/CXB/04-05/ThG, cấp ngày 22 tháng 02 năm 2013. Quyết định xuất bản số: 210/QĐ-ThG cấp ngày 18 tháng 11 năm 2013. In xong và nộp lưu chiểu Quý IV năm 2013.

TRẦN HẢI YẾN

(Nhà nghiên cứu. Viện Văn học. Viện Hàn lâm Khoa học Xã hội Việt Nam)

BẢN DỊCH ĐÃ XUẤT BẢN:

TỪ CHỮ HÁN CỔ VÀ HIỆN ĐẠI

- *Truyện đồng thoại cho thiếu nhi* (đồng dịch giả). Tp. Hồ Chí Minh: Nxb Trẻ. 1998.
- *Truyện truyền kỳ Việt Nam* (đồng dịch giả). Hà Nội: Nxb Giáo dục. 1999.
- *5000 năm kinh điển văn hóa Trung Hoa* (tác giả Dương Lực, 4 tập, đồng dịch giả). Hà Nội: Nxb Văn hóa Thông tin. 2002.
- "Đạm Trai văn tập" (Phiên âm, chú giải và dịch). 80 trang. In trong *Nhân đạo quyền hành và Đạm Trai văn tập*. Hà Nội: Nxb Chính trị Quốc gia. 2007.

TỪ TIẾNG ANH

- *Tiểu thuyết truyền thống Trung Quốc ở châu Á*. Hà Nội: Nxb Khoa học Xã hội. 2005.
- *Lý luận và Phê bình văn học thế giới thế kỷ 20* (đồng dịch giả). Hà Nội: Nxb Giáo dục. 2007.
- *Lịch sử điện ảnh thế giới* (Kristin Thompson & David Bordwell, 2 tập, đồng dịch giả). Hà Nội: Nxb Đại học Quốc gia. 2007.
- Và một số bài dịch cho các tạp chí chuyên ngành: *Nghiên cứu Văn học*, *Nghiên cứu Trung Quốc*, *Nghiên cứu Đông Bắc Á*, *Văn hóa Dân gian*...